昭和八年九月十五日印刷納本　毎月一回一日發行
昭和八年十一月一日發行

精神分析

昭和八年十一月

第七號

戰爭心理研究號

（口繪）故サンドール・フェレンチー肖像

研究

何故の戰爭か？……伊東豐夫譯……（一）
（アインシタインとフロイドとの間に交されたる戰爭に關する覺書）
戰爭心理分析論（グラヴァー）……岩倉具榮譯……（一七）
血に關する異常心理……長崎文治……（三四）
戰爭神經症とその治療……高水力太郎……（四九）
精神分析思ひ出の記……諸岡存……（五九）

——（裏面へ續く）——

東京精神分析學研究所出版部

時評

小學教科書の改正に就いて文部當局に質す……大槻憲二…(六五)
「細い葉蔭への慾望」を讀んで……則近保良…(六八)
久米氏の「ハムレット」全曲演出に就いて……松居桃多郎…(七四)

資料

戰場に現れる健忘症……長谷川誠也…(七七)
維新非常時と世直し運動……田村榮太郎…(八三)
X考……小野田幸雄…(八六)
エマスンの戰爭論……大槻憲二…(九二)
現代日本諸家の戰爭論……長崎文治…(一〇三)

講座

材料的象徴と機能的象徴と……田内長太郎…(一〇七)
民俗藝術に於ける性的象徴……奥本島田…(一一〇)
精神分析語彙(五)……記者…(一一〇)

探訪

古澤博士の診療所……記者…(一一三)

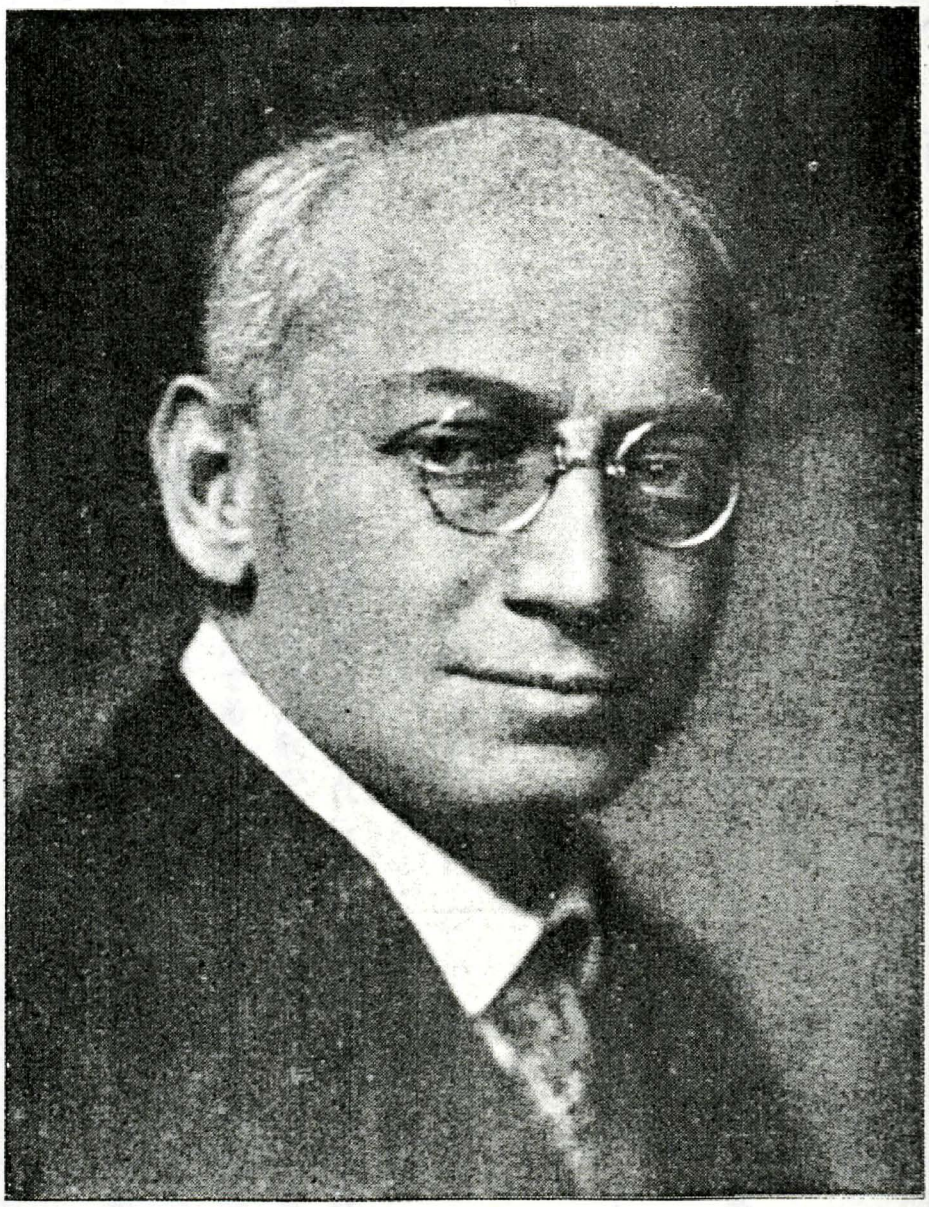
內外彙報

フェレンチーへのフロイドの弔辭——獨文國際雜誌第十九卷第三册——英文國際雜誌第十四卷第三册——印度に於ける斯學の進歩——最近國內事實——……(一一四)

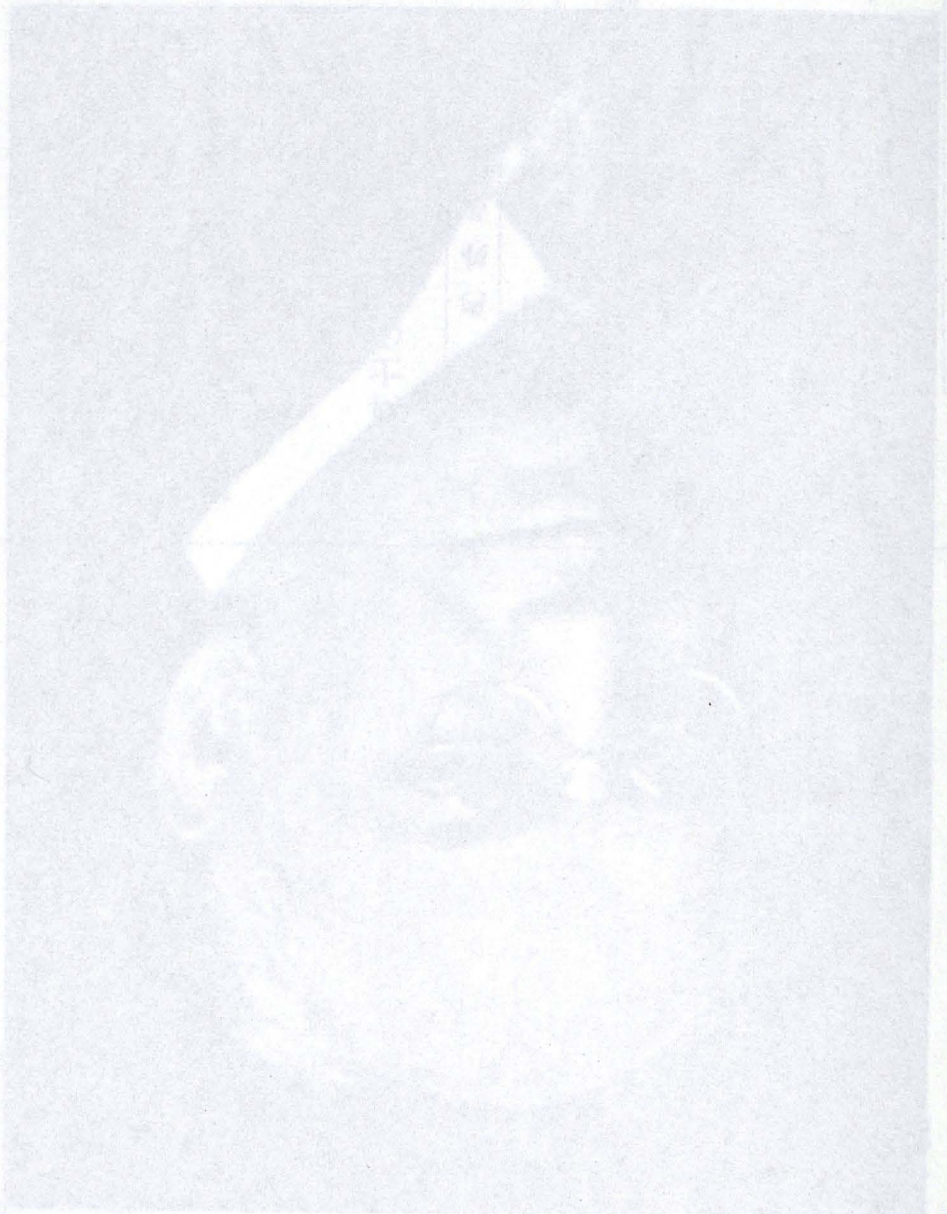
通信

臺灣阿里山から……近藤石象…(一一八)

編輯後記……(一三〇)



Dr. Sandor Ferenczi †



何故の戰爭か？

„Warum Krieg？——Ein Briefwechsel zwischen A. Einstein und S. Freud,“(1933).

アインシタイン、フロイド兩碩學の間に交されたる戰爭に關する覺書

伊東豐夫譯

一、

親愛なるフロイド殿！

國際聯盟並びにその在巴里國際精神文化共同研究所の薦めに依り、私は自分の勝手の人物を擇び、勝手の問題に就いて意見を交換することゝなり、此處に現在の狀勢から文明に取つて最も重大であると思はれる問題に就いて貴方と論じ合ふ、又となき機會を得た事を、甚だ幸福に思ふものであります。卽ちその問題とは、如何なる方法に依て、人類を不幸な戰爭から解放し得るか、と云ふ問題である。技術の進歩と共に、此の問題が文明人に取つては、生存上の問題と化したと云ふ事は、概ね人々の認める所でありながら、其の解決のために致した熱心な努力も、是迄は無殘にも蹂躙されて來た。

此の問題を實際的にも、職業的にも扱つてゐる人々の間に、自力に對して全く絶望的な氣持から、絶えざる科學的研究に依て人生の凡ゆる問題に著しい貢獻を爲した人々に向つて、一つ此の問題についての意見を徵して見やうとの

希望が、生れて來たのだと私は信ずる。私として見ると、平生私の研究してゐる方面では、人間の意慾と感情の深みに徹するわけには行かないから、私に出來る事と云へば、まづ問題を設定して、多少外面的な解決策は私の方で豫め片付けておいて、貴方には、人類の本能生活に關する御蓄蓄を傾けて、問題を解明して戴くやうに仕向ける事だけである。私としては、貴方が教育の方法を指示して下さるのを期待してゐるのであるが、其の方法とは、或る程度まで政治的ならぬ道に於いて、心理的な障害——心理學の素養の淺い人々は充分に感じては居ながら、其れはどう云ふ關係から來てゐるか、どうしたら變化させられるか等に就いては、殆ど見當のつかない如き、さう云ふ障害——を克服し得る如き方法である。

私自身は、國家的色彩を帶びた感情には緣のない人間であるから、問題の外部的な、或は組織者側の面は極めて單純に考へられる。——國々は、相互の間に持ち上がる、凡ゆる紛爭の解決の爲に、一つの立法し、司法する機關を設置する。國々は立法機關に依て制定された法規に服し、一切の紛爭に裁判を起し、其の判決に無條件に服從し、又裁判が其の判決の執行に必要と認めた處置を貫徹せしむべき義務を有つ。然るに早くも此處で、私は最初の困難に逢着する。——裁判が人間に依て構成される機關である以上は、裁判が其の判決を徹底せしむべき實力が弱ければ、それだけ非合法的な影響を受け易い事になるであらう。我々が當然、念頭に置くべき事柄は、權利（正義）と權力とが離るべからざる關係にあると云ふことであり、また其の名と其の利害に於て正義の云々せられるその團體が、その理想とする正義の尊重を强ふることが出來るだけの權力を具へてゐればゐるほど、司法機關の判決は當該團體の正義理想に愈々近付いて行くのだと云ふことである。所が現在では、裁判に動す可からざる權威を與へ、其の判決の執行に絕對服從を强要し得る體の、超國家的機關を所有する事は吾々には到底出來ない。其處で、私はまづかう云ふ命題を與へねばならない。——國際的な安全保障への道は、國々が行動の自由又は尊嚴を或る部分無條件的に放棄することを要す、さうして其の他の道に依つては此の安全保障には到底達し得ないと云ふ事は、疑ひの餘地が無い、……と。

最近十年に亙る明かに眞劍な努力を以てしても、此の目的を達し得なかつたのに徵しても、何か强大な心理的な力

が働いて、此の努力を痲痺せしめてゐるのを、何人も明白に感じ得るであらう。これ等の力の二三のものは、露はに見えてゐる。或る國家の内にあつて、其の時々に支配する階級は權力を必要とするから、從つて其の國の君主權は制限せられない。此の「政治上必要なる權力」は屢々、他の階級の物質的經濟的の努力に依て培はれる。私が此處で特に考へてゐるのは、彼の凡ゆる民族の内に居る、極く少數であるが、中々敏活な、社會的反省や禁制を度外視してゐる一群の人々のことである。

所で、右の簡單な命題は、事物の關係の認識に、僅かに一步を進めたものに過ぎない。次いで問題になる事は、私が今名付けて少數者と呼んだ人々が、戰爭の爲には、唯××××、××××××、大衆を如何にして、彼等の××××××に供する爲に動かし得るかと云ふ事である。(私が大衆の事を云ふ場合には、兵士として、自らは其の民族の至高の善の防禦の爲に奉仕すると信じ、或は多くの場合、正當なる防衛であると確信してをり、戰爭を全く職業としてゐる人々をも含めてゐるのである。)此れに對する答はかうであらう。——彼等當代の支配者たちは、先づ何を措いても、學校、新聞、そして又多くの場合、宗教組織をも掌中に收めてゐる。

併し、此れだけの答ではまだ這般の事情の全般を云ひ盡しては居ない。それは、此の手段を以て、大衆××××××××と云ふ事が、如何にして可能であるか、と云ふ問題が生じて來るからである。これに對する答としてはたゞ、人類の内には、憎惡し、破壞する衝動が祕むでゐると云ひ得るだけである。平生は、此の傾向は潛在してゐて、唯變質者にあつてのみ顯現する。併しながら、これは比較的容易に覺醒させられ、群衆的な狂燥へと昂進させられる。此處に、凡ての宿命的な、錯綜した人間の力に關する深刻な問題が祕むでゐるやうに思はれる。此の一點を明かにするためには、人類の本能に就いての偉大な識者を俟たねばならない。

かくて今や最後の問題へと進む。——人類の心理發達の道程に於て、彼等に憎惡、破壞の狂氣に抗し得るやうに、導くことが出來るであらうか?……と。此の場合、私は決して、所謂無敎養者の事を云つてゐるのではない。私が半生の經驗に依つて知つた限りでは、それは寧ろ全く、「知識人(インテリゲンツ)」と稱する人々であつて、彼等は事物を直接、經驗から

汲まず、印刷物を通じて最も安易に、又そつくりその儘、總てを受入れるのを恒とする爲に、×××××××× 見ても最も容易に看過することが出來るのである。

最後に、もう一つ付加へておく。——私は是迄、唯國家間の戰爭、並びに所謂國際間の紛爭のみに言及して來た。私とても、人間の攻擊性は、又別の形式や條件（例へば、昔の宗教戰爭や今日の社會的な原因に基く市民戰爭、或は國內少數者の迫害など）の下に作用するのを知つてはゐる。が、私が、人間社會の下にあつて最も代表的な、又無統制なるが故に最も有害である形の紛爭を故意に取り上げたのは、恐らく、これこそ戰爭を如何にして避け得るかを、最も直截に示し得ると思つたからである。貴方が是迄多くの論文の中に、吾々に興味ある、又燒眉の問題と關聯して凡ゆる問題に對し、或は直接に、或は間接に、回答を與へられたのを、私は承知してゐるのである。併しながら、特に世界平和の問題を、貴下の新たな認識の光の下に照し出して戴けるなら、それは甚だ有難い事である。そのやうな御高說に依つて更に別の立派な努力が生れて來るに相違ないからである。

一九三二年七月三十日　　ポツダム附近カプートより

A・アインシタイン拜

二、

親愛なるアインシタイン殿！

貴方が興味を感じて居られ、同じく他の人々にも興味があるべきだと信じられる問題について、貴方が私と思想交換を望むでゐられること承りましたので、私は直ちに喜んで承諾致しました。

貴方は、問題を今日の我々に知り得る範圍內から選ばれる事と、私は豫期して居た。知り得る範圍內から選ばれるならば、物理學者と心理學者とは、その知り得る事柄を、各々獨自の路から辿つて行つて、結局異る方向から同一地點に出會ふ事になるであらう。所が、貴方は意表外に出られて、人類を戰爭と云ふ事柄から防ぐには、如何なる方法

をとればよいかと云ふ問題を提出せられた。私には、これが政治家等に課せられる實際問題であると思はれたので、私——と云ふより、寧ろ吾々——に取つては、何か甚だお門違ひの感じがしたのである。所がやがて私は、貴方が自然探求者、物理學者としてばかりではなく、宛かも極地探險者フリトヨフ・ナンゼン Fridtjof Nansen が、故郷を失ひ食を求める哀れな世界大戰の犧牲者等を救つたやうに、人類の友として、國際聯盟の薦めに應じられたものであると分つたのである。

私としては、實際的な提案はする氣にならないから、唯戰爭防止の問題を心理學的に見るとどうなるかを論じるだけにしよう。

併しながら、此の事についても貴方は、御自分で書かれたものゝ中に、概ねの事を云つてしまはれた。謂はゞ、貴方は私の御株を奪つたも同然であるが、私は尙貴方に追隨して行つて、貴方の論じられた總てを裏書し、又私の知る限り、或は假定の及ぶ限り、更に廣く再論するに止める。

貴方は、權利（正義）と權力との關係から出發してゐられるが、それは吾々の探求の出發點として、確かに正鵠を得てゐる。「權力」《Macht》と云ふ語の代りに、これより一層烈しく生硬な「暴力」《Gewalt》と云ふ語を用ゐてもよいであらうか？　權利と權力は現在では正反對である。一が他のものから發展したと云ふ事は、容易く示し得るし、又原始に溯つて、それが初め如何に起つたものか、探求するならば、問題は直ちに解決する。所で、私は次に、概ね分りきつた事を、宛かも新しい事のやうに申上げなくてはならないのであるが、それは論の順序として必要な事であるから、御許しを願ひ度い。

人と人との間に於ける利害衝突は、原則としては暴力の使用を俟つて解決するのである。動物界に於ては、正にその通りであるが、人間とても必ずしも例外とは行かない。人類の場合には、更に是に意見の衝突と云ふのが加はるがこれは極端に抽象化してしまつて、これが解決には全く別の方法を必要とするかのやうに見えるのである。尤も、複雜化したのは、後の事であつて、原始的には人間の小さな集團にあつては、何人が所有すべきか、何人がその意志を

貫くべきかは、腕力次第によつて決せられた。やがて、道具が使用されるやうになると共に、腕力は更に強められ、且つ道具を以て腕力の代りにするやうになつた。より精巧な武器を有する者、或はより巧みに武器を操るものが勝者となつた。武器が用ゐられるやうになると共に、直ちに精神の優秀が暴力と交替し始めた。が、戰闘の窮極の意圖は依然同樣であつて、一方に痛手を負はせ、戰闘を不能ならしめ、餘儀なく要求を撤回させ、反抗を放棄せしめるにある。此の目的を完全に遂げるには、對手の力を永續的に取除くこと、つまり殺してしまふ事にある。對手を殺して了へば、再び敵對を企てる事が不可能になるし、又他の者としても自分もあんな目にあつてはたまらないと云ふ氣になるし、かう云ふ二重の利益がある。その他、敵を殺すことは本能的な傾向を滿足せしめる。が、是については、後に詳述するであらう。

敵を威嚇しながら生存せしめておけば、また必要に應じて利用することが出來ると云ふ考へがあつても、殺さうと云ふ意圖の方ではそれに反對することがある。敵を殺さないで生かしておけば征服するだけの力で足りるのである。が、是れは敵に對する寬大の始まりで、その爲に征服者は、それ以後は被征服者側の臥薪嘗膽を念頭に置かなくてはならない爲に、自身の安全を一部犧牲としてゐるわけになる。

より強大な權力の支配してゐる本來の狀態は右のやうであつたのだ。理智に支持されてゐる暴力、又は理智の支持してゐない自然的な暴力の支配してゐる狀態は右のやうであつたのだ。ところが我々の知る通り、この制度は發展の過程に於て漸次變化して來て、暴力から正義に變化して行つた。併し一體、暴力が權利（正義）となるには、如何なる道を經たものであらうか？　それには唯一つの道があるばかりだと、私は考へる。弱者も大勢寄ればたゞ一人の強力に匹敵し得ると云ふ事實の中にこの道があるのである。「團結すれば強力となる。」„L'union fait la force,“ である。暴力（專制力）は團結に依て打ち破られ、此れら團結者の權力が、とりもなほさず單獨者の專制力に對峙して、權利と云ふものになる。つまり、權利とは團結者の權力に外ならないのである。是もやはり專制力（暴力）たることに變りはなく、同じ手段に依て動き、同じ目的を追ふもので、それを妨げる如何なる一人者へも立向ふのだ。その相

違は、實は唯、その暴力を振ふのものが、一方は單獨者であり、他方は團體であると云ふ點に過ぎない。併しながら暴力が權利（正義）へと、移り行くに當つて、當然滿さるべき心理的條件がある。多數者の團結は確固たる存續性を必要とする。若しも團體が一つの覇權に對して戰ふ爲にのみ構成され、之を克服すると同時に崩壞する體のものならば、それは何の役にも立たない。次に、自ら最強と信ずる者が覇を唱へて暴力を行使し、勝負は限りなく繰返されるであらう。團體はそれ自身を保持するために不斷に努め、組織を固め、反逆の危險を豫防すべき法規を設定し、違法を監視し、合法的に强制力を發動すべき機關を制定しなくてはならぬ。此のやうな利害關係を團體が認めると共に、團結者の各成員の間に感情的結合、共同感情が醸成される。此の感情の中にこそ團體の本來的の力が宿るのである。

以上で、既に私は自分の云はむと欲することの本質的なものを總て云つてしまつたやうに思ふ。——より大きな統一體へ權力を移すことに依つて暴力（專制力）を克服する事。此の統一體は各成員間の感情の紐帶に依て、相互に結合される事。更にこれ以上の事は、凡て細說であり、反復であるに過ぎない。團體が、相互に同じ强さの多數個人から構成されてゐるならば、事情は極めて單純である。もしさうならば此の團體の法律は、各人の共同生活を可能ならしめるためには個人が其の力を强制力として發動せしめる事の自由を如何なる程度まで斷念すべきかを決定すればよいのである。併しながら、そのやうな安定狀態は理論的にのみ考へ得るのであつて、實際は團體の包含する要素が、最初から互ひに不均等な力のものである所から、事態は一層複雜してゐる。卽ち、男性と女性、親と子などのやうに實力が違つたもの、寄合であり、漸ては又戰爭や降伏のあるために征服者と被征服者とが出來、それが主人と奴隷との關係になつて來る。從て、團體の權利は團體內の不均等な權力關係を表現することになり、法規は全く××××××××××××××××作られて、××××××××××××にも與らぬ事になる。此のために團體の內部には法規の不安定性と同時に、又その存續性と二樣の源泉が存する事になる。前者は、支配者仲間の個々人が、萬人に妥當すべき制限以上に出で、權利（正義）支配から强力（暴力）に逆轉せむとの試みであり、後者は、被抑壓者側の者が更に權利を擴張し、この擴張せられた權利を法律化せんとし、つまり不均等な權利とは正反對に總ての人々に均等

な權利を目指して突進する不斷の努力である。此の第二の潮流は、團體の內部に權力關係の變動が實際に起つた場合に、特に激成されることは、多くの歷史的契機に於いて見られる通りである。

其の場合に、權利は漸次に新たな權力關係に適合し始める。と云ふよりは、屢々實際の成行きが示してゐるところを云へば、支配階級は此の權利の變動を認めやうとせず、反亂や市民戰爭が起り、一時的に法律は停止し、更に別の暴力行使を經て、新たな正義の秩序につくのである。尙、正義變遷の他の源泉は、平和的な形を取る。それは團體(社會)各員の文化的變化であるが、此の間の事情については後に考察することにしてもよい。

このやうに、一つの團體(社會)內にあつても、利害衝突が暴力に依て解決せられるのを我々は見るのである。併しながら、同一地域上に共同生活を營む事の必要からも、共同勞働の爲から云つても、此のやうな爭鬪は速やかに終熄せしめるのが得策であるから、此のやうな條件の下に於いては平和的に解決せられる見込みが愈々增すのである。併しながら、人類の歷史を一瞥するに、團體と團體、或は一團體と數團體との間の戰鬪、大小の社會的統一體、都市の部分、地方、種族、國民、國家等の間に於ける絕え間のない爭鬪の連續は、恒に殆ど武力に依て解決された事を示してゐるのである。

此のやうな戰爭は略奪に終ることもあれば、或はまた完全な降伏、一部の侵略に終る事もある。侵略的な戰爭と云つても、一樣に判斷するわけには行かない。多くの侵略、例へばモンゴリア族、トルコ族の侵略の如きは、單に慘虐のみを事としたが、他のものは反對に、暴力から權利(正義)への轉換に資した。彼等はより大いなる統一を形成し此の內部に於ては、暴力の行使を不可能ならしめ、新たな正義的の秩序に依て葛藤を解決した。此のやうにして、ローマ人等の侵略は、地中海沿岸の諸國に、貴重な「羅馬的平和」《pax romana》を現出した。フランス國王等の領土擴張慾は、平和的な、華々しいフランス國を生むだ。逆說的に聞えやうが、熱望の的である「永久平和」を生むのに、戰爭も其の手段として滿更不適當ではないと云ふ事を認めざるを得ない。それは戰爭が彼の大統一を成遂げると共に、其の內部の强力な中央權に依つて爾後の戰爭は不可能とされるからである。併しながら、征服の結果は概して

永續しないものである爲に、それは結局役に立たない。大概は、强制的に合併された部分に結合力が足りない爲に、新たに成就された統一も再び瓦解してしまふのである。その他、侵略は甚だ廣範圍に亘つてゐても、是迄唯、部分的同化しか爲し得ない所から、其の同化されたる各部分の爭鬪には何より必らず武力的な解決を要したのである。で、凡て此れらの戰爭的な努力の結果としては唯、人類が極く稀れではあるが慘害の著るしい大戰爭の代りに、多くの、實に絶間なき小規模の戰爭を行つて來た……と云ふ事になつてゐるである。

之を現代に適用して見ると、貴方がもつと手短かに到達されたのと全く同じ結論を示すのである。何より確實な戰爭防止は、人類が團結して、一切の利害の衝突に當つて、之が判定を委任し得るやうな中央權力を建設した時に、始めて可能となるのである。此處には明かに、此のやうな最高法院の設立と、必要な權力を是に委託すると云ふ、兩つの要求が一つになつてゐる。一方のみでは役には立たないのである。現在、聯盟が此のやうな法院として考へられてはゐるものゝ、今一方の條件が滿されてゐない。聯盟はそれ自體の權力を所有してゐないのだから、これに加入してゐる個々の國々が是に力を讓渡しない限りは、是を持つわけがない。併し目下のところではなか〳〵さう云ふことにはなりさうもないのである。國際聯盟なるものは、人類の歷史上、餘りに其の例を見ないと云ふより、寧ろ殆ど前例のない程度まで敢行せられた一の試みであると云ふことを承知してゐなければ、この制度を眞に理解するわけには行かないのである。この試みたるや、權威、卽ち强要の力（これは從來權力の有するところであつたが）を、一定の理想的な態度の上に委任する事である。吾々は既に、二つのものが働いて團體を結合せしめることを、知つてゐる。卽ち、强制力の壓迫と、團體各員の感情的結合（術語で同一視と呼ぶ）とである。一方の契機が弱つて來ると、大低は他の契機が働いて、團體を維持しやうとするやうである。彼の理念（理想）なるものは、團體各員の重要な共同觀念を表白するものであつてこそ、其の時に始めて意味を有つ。それならば、其の理念なるものは、如何なる程度の强さを持つてゐるかゞ、問題になる。歷史は、事實、其れが相當の働きをした事を敎へてくれる。汎ギリシヤ的理念、例へば周圍の未開族より何か自らが優れてゐるとの意識は、同盟、神話、祭式等の中に、强く表現されてゐるが、この

意識は好戰的風習をギリシャ人の間に大いに和らげたほど强烈ではあつたが、勿論、ギリシャ民族の各部間に於ける戰亂を防止することは出來なかつた。一つの都市、又は聯合都市が敵國ペルシャと結托して競爭者に打擊を與へるのをさへ抑止出來なかつたのである。キリスト教の共同感情は非常に强大であつたが、これとても同樣、文藝復興期に於いて、大小のキリスト教國が互ひに戰ひ合ふた時、回教主の援軍を乞ふのを、防ぎ得ない有樣であつた。現代に於ても、此のやうな團結的な權威を期待し得るやうな理念は存在してゐない。今日、人々を支配してゐる國家的理想が恰かも正反對の働きを爲す事は、是又明かな事である。ボルシェヴィスト流の考へ方を一般に徹底させる事に依つて始めて戰爭を終結させ得ると豫言する人々がゐるが、併し今日の吾々は、此のやうな目的からは甚だ緣遠いのであつて、恐らく是が達せられるのは、恐るべき市民戰爭を經て後の事である。其處で、現實の權力を理念の權威と置換へる事は、今日では未だ駄目であると宣告される。權利は原始的には暴力（强制力）であつて、尙今日に於てすら、暴力（强制力）による支持を必要とすると云ふことを考慮に入れないならば、誤算を來すのである。

さて、私は今こそ、貴方の文章の他の命題について、註を施す事が出來る。貴方は、人間が實に容易く戰爭に熱中出來るのを訝られ、人間の內には何かが作用して、此のやうな煽動に直ちに迎合する憎惡、破壞への本能を推定せられた。私は再び、貴方に全部的に贊成する事が出來る。吾々は此の種の本能の存在する事を信じて居つて、最近の何年かは、此の本能の現象を研究するに費したのである。此れを機會に、吾々が精神分析學に於て、長年の暗中模索の結果遂に到達した本能說の一部を述べることを許して戴き度い。

吾々は人類の本能は、唯二種であると考へる。卽ちその一は保存し、結合せんと希ふ本能で、吾々は之をプラトンの「饗宴（シンポジオン）」のエロースと全く同意味に於いて色情的（エロティシ）と呼び、或は情慾の一般的概念よりは更に擴張したものとして性慾的（セクシュエル）と呼ぶ。今一つの本能は、破壞し殺害しやうとの本能で、吾々は是を攻擊本能、或は破壞本能として考へてゐる。御覽の通り、是は單に、誰でも知つてゐる愛と憎惡の相反を理論的に說明したに過ぎないのであつて、其の關係の根源と思はれるのは、貴方の畠に於いては重要な役割を演じてゐる引力と反撥力との極性に發してゐるやうであ

る。併し、此處で餘りに早く、善惡の價値的見解を導入しないやうにしたい。一の本能は、他の本能同樣、已むを得ないものであつて、此の兩者の作用が協同し相反する所に人生の現象が生ずるのである。所で、一種類のみの本能が單獨に働く事は殆ど有り得ないのであつて、恒に必らず反對側の本能の或る量と結合——吾々は是を「合金」と稱してゐる——してゐるやうに見える。之の結合してゐる量のため本能の目的は修正されるか、或はその量が目的を達する事情の許す限りに於いて、始めて本能の目的は實現されるやうになる。例へば、自己保存本能は確かに色情的性質を帶びてゐるが、是が其の目的を實現する爲には、明かに攻擊的本能に賴らなくてはならないのである。同樣、對象に向けられた愛の本能も、其の對象を所有しやうとする時には、やはりそこに支配衝動（本能）附加を必要とする。此れ等二樣の本能は、その現象してゐるところに於いて兩者を辨別することが困難な爲に、隨分長いこと吾々は認識を妨げられて來たのである。

若し貴方が、今少し我慢して聽いて下さるやうならば、人類の行爲には更に異る種類の複雜さが認められると云ふ事を申し度い。人間の行爲が一種類の本能的感情に依つて動かされる事は甚だ稀れであつて、その行爲には既にそれ自身に於いてエロースと破壞本能とが關係してゐるにきまつてゐるのである。行爲を可能ならしめる爲には、同じ方途に向けられた多くの契機が、必らず關係してゐるのが常である。貴方の同學の一人であるところのリヒテンベルク教授 Prof. G. Ch. Lichtenberg は、既にそれを知つて居た。氏は、吾々古典學者の時代に、ゲティンゲンで物理學を講じられた。併し、恐らく氏は物理學者としてよりも、寧ろ心理學者として更に重要であつたのであらう。氏は動機說（Motivenrose）について發見した所を、次のやうに述べて居る。「人間が行爲する根據となるべきものは、三十二の風向に定められ、其の名稱も同じやり方でかう云ふことが出來よう。例へば、食物（パン）——食物（パン）——名譽、或は、名譽——名譽——食物、と云つた具合である。」

所で人間が戰爭へと遣られる時には、彼等の內に、高尙なもの、卑しいもの、人々が聲高に語るもの、それについては口を塞いでゐるもの等、全く多くの契機が、そこに協同してゐるのである。それ等動機の總てをこゝに擧げるこ

とは出來ないが、確かにそれ等の中には、攻撃破壞慾も含まれてゐる。歷史や日常生活に現はれてゐる無數の慘虐は此の本能の存在と烈しさとを強調してゐる。此の破壞衝動は、他の色情的な、或は理想的な衝動と化合した場合に、當然、此等の滿足が容易く得られるやうになる。吾々が歷史上の慘虐を聽くには、大概の場合、理念上の動機は單に破壞慾の口實として用ひられたのであると云ふ印象を受ける。又他の場合、例へば異教徒糾問所の慘虐等では、信仰上の契機は意識的であるが、破壞的契機がそれを無意識的に强めてゐると考へられる。二つとも有り得る事である。

私は、貴方が折角戰爭防止に就いて取上げられた興味を、とんでもない吾々の理論へと引張り込んでしまつたやうな氣がする。が、私としては今少し破壞本能について、語り度いのである。破壞を好んで取上るからとて必ずしも破壞を重要視するわけではない。吾々は多少抽象的な思辨を試みた結果、凡ゆる生物の內部には此の本能が働いてゐて生物を滅ぼし、生命を無機物へ還元せしめやうと努めてゐると云ふ見解に到達したのである。凡ての重大點に於いて是は死の本能と呼ばるべきものであるが、他方、色情的本能は生命への努力を代表してゐる。死の本能が、特殊の器官の助けを借りて、外部へ、對象へと向けられた時には、破壞本能と成る。謂はゞ、生物は他者の生命を破壞する事に依て、自己の生命を維持するのである。併し、死の本能の一部は、依然として生物の內部に殘つて居つて、吾々は此の破壞本能の內化と云ふ事から、正常な現象や病的な現象の數々を演繹しやうと試みた。これは科學としてはいさゝか邪道であつたかも知れないが、攻撃性が內部へ向ふ結果、良心が發生すると云ふ說明までしたのである。貴方もお考へであらうと思ふが、此の過程の度が過ぎると、(これは全く考へられないことではない)必らず不健康となるが此の破壞本能が外界へ向けられる時には、その生物自身は身輕になり、好都合な結果を得るわけになるのである。之の事は、吾々が常々鬪つてゐる恐ろしい、危險な傾向に對する生物學的な是認として役立つ事になるのであらう。此れ等の傾向は此の傾向に對する吾々の抵抗よりは、自然に近いものである事は、認めざるを得ない。で、この抵抗について吾々は更に別の說明を見出さなくてはならない。恐らく貴方には、吾々の理論が神話に類するものであり、此の場合、決して歡迎すべき性質のものではないと云ふ感を受けられた事と思ふ。併しながら、一切の自然科學は此の

やうな神話的なもの、域を脱してゐないのでなからうか？　今日貴方の領域である物理學に於ては、多少とも之と事情を異にしてゐるであらうか？

以上説明した多くの事から、我々はその第一の目的として次の事だけは云はふと思ふ。即ち、人間の攻撃本能を放棄させようと望む事は、到底期待出來ないと。是は、人間が必要とする總てのものを、自然から豐富に與へられるやうな地上の一角に住み、壓制や攻撃を他所にして、穩やかに生活する人々にこそ望めるのである。私には、そんなことは全く信じられない。若しそんな事があるものなら、此の幸福な人々について、更によく知り度いものである。又ボルシェヴィスト等は、物質的要求の滿足を保證し、社會の各員に平等を期する事に依て、人類の攻撃性を根絶し得るとの希望を持つてゐる。私にはそれが幻覺（イリユージョン）だとしか受け取れない。先づ彼等は細心の注意の下に武裝して見たが、彼等の追隨者達は彼等以外の凡ゆる人々に對する憎惡に依つて團結することは出來ない。それに貴方自身も御氣付のやうに、問題は人類の攻撃性を根絶せんとするにあるのではない。たゞ我々は此の攻撃性が戰爭となつて表れ出ないやうに、試みる事が出來るだけである。

吾々の神話的な本能說に依つて、吾々は戰爭防止への間接的方法のための一命題を、容易に發見する。若し、戰爭をしたがることが破壞的本能から來るものなら、是に對しては此の衝動の敵手役であるエロースを呼び起すのが手取り早い。人類の中に感情的結合を形造くるものは、凡て必らず戰爭に逆作用するのである。此の結合にも二種が有り得る。第一のものは、性的目的を伴はない戀愛對象への關係に等しいものである。精神分析學は此處で愛を云々したとて、恥づるには及ばない。宗教とても同じ事を云つてゐる。「汝自身を愛する如くに、汝の隣人を愛せよ」と。さて、是は云ふに易く、行ふに難い。感情結合の今一種のものは、同一化に依るものである。人類の中に著るしい共通性を作り出すものは、總て此の種の共通感情、同一化作用を呼び起すのである。人間社會の上部構造は大部分、是等のものに掛つてゐるのである。

貴方は權威の濫用と云ふ事を嘆ぜられたが、私はそれに依つて戰爭的傾向に對する間接的防止法の暗示を受けた。

人間が指導者と服從者とに分れるのは、生れつきであつて取除かうとすれば取除き得る不平等のためではない。此の後者に屬する大衆は、彼等の爲に裁決を與へる權威を必要としてゐて、彼等は此の裁決に對しては概ね無條件的に從ふ。之と聯關して、獨立性のない大衆の指導の任に當る、確固たる思想を持ち、眞理に向つて只管に邁進する人々を養成するために從來以上に骨を折らねばならない。國家權力や宗教思想がこれに味方をせず、これに干涉し禁止し來ることは、證明する迄もない事である。本能生活を理性に依つて統制し得る人々の社會が在れば、勿論是が理想的である。人間相互の間の結合感情が假りにないにしても、是以上に完全な、抵抗力ある、人間の團結を作り出す事は出來ないであらう。併しながら、是は殆どユトーピア的希望であるやうだ。戰爭防止の間接的方法としては、もつと他に確かに前者より一層適用性のあるものがあるが、是は早急の間に合はない。殘念ながら、是は廻りのおそい水車に似てゐて、粉が挽き上がる迄には、人間の方が餓えてしまふのだ。

御覽の通り、世間にうとい理論家に向つて、切迫した實際問題の相談を持ち掛けて見た所で、大した事は期待出來ないのである。寧ろ、手許にある手段を以て、個々の危險に直面しやうと、努める方がましである。

所で、私は尙一つの問題を取扱ひ度いと思ふ。貴方の書面は、是について何も觸れてゐなかつたのであるが、私は是に特に興味を惹かれてゐるのである。貴方や私や他の多くの人々をも含めて、吾々は何故に戰爭に對して此の樣にむきになつて憤慨するのであらうか？　何故に吾々は是を、人生の他の多くの悲慘な災厄のやうに、看過しないのであるか？　これもやはり自然であり、生物學的に相當の根據を持ち、實際的には全く避け得ない事なのである。かう云ふ考へ方をしても何卒、呆れないやうにして戴き度い。吟味の目的として、恐らく人間は、實際には持合せることの出來もしない優越を豫想する必要があるのではあるまいか？　是に對する答としては、各人は自分の生命についての權利を有つが故に、戰爭は有望な人間生活を亡し、各人を恥づべき位置に落し、彼が望みもしない××××ひ、貴重な物質的の價値、人類の勞苦の結晶を毀損せしめるが故に……等々の事が擧げられる。又現代的な形式に依る戰爭は昔の英雄的な理想實現の機會を與へないし、又將來の戰爭は武器の完成の結果として、一方或は双方の滅亡を意味

すると云ふやうな事も擧げられる。是等の理由は總て、眞實であり、爭論の餘地のない事であつて、戰爭が人類一般の共力に依て未だ廢止されないのが不思議に思ふばかりである。此等の各點については、尙論ずる餘地がある。一體團體の方でもまた個人の生命に對して權利を有ち得ないものだらうか、それが問題である。凡ゆる種類の戰爭を一率的に排斥すると云ふわけには行かない。他國や他民族の滅亡を我武者羅に企てる國家や民族が存在する限りは、これ等の國や民は戰爭に對して備へる所がなくてはならない。併し、是は貴方が私に課せられた議論ではないのであるから、いつまでも是等の議論に拘泥してゐないことにする。私の目的とするところは、他にある。吾々が戰爭に向つていきり立つ最大の理由は、吾々がそれ以外に施す術のない事に因るのだと信ずる。吾々は平和主義者である。それは生理的に條件づけられてゐて、さうならざるを得ないからである。果して然らば、吾々は此の心的態度を論證に依つて是認することは易々たるものである。

尤もそれは說明無しには諒解し難い事であらう。私の考へは次のやうである。——何時とも知れぬ時代から、人類は文化發展 Kulturentwicklung の過程を辿つて來た。(之を寧ろ「文明」Civilisation と呼ぶ方がよいと云ふ人もある事を、私は承知してゐる。) 吾々が吾々自身に就いて完成し到達した最もよきもの、及び吾々を惱ますもの〻全部とは云はぬが大部分は、等しく文化發展の過程に負ふてゐるのである。此の過程の動機と起源とについては吾々は知る所なく、眞の成り行きについても判然としたことは分らないが、其の特質の二三は容易く看取し得るのである。恐らく、文化の辿りつく先は、人類の滅亡である。何故ならば、文化は種々なる方途に於いて性機能を障害し、又今日にあつては、未開の人種の方が人口增加し、文化に取殘された者の階級の方が、高度の文化人よりも强いのである。多分、此の過程は、或る種の野生動物が家畜となる過程に較べることが出來やう。この過程には疑ひもなく、肉體的變化が伴つてゐる。文化發展と云ふことは此のやうな有機的の過程であると云ふ考へは、未だ人々の信じ得ないところである。文化過程と共に入り込むだ心理的變化は、誠に驚くべきものがあり又判然たるものである。この變化とは本能の目的を不斷に轉住させることゝ、本能の亢奮を制限することに存するのである。吾々の先祖に快感を與へた刺戟

も、吾々に取つては興味がなく、或は堪え難いものとさへなつた。吾々の倫理的、審美的の理想要求が變化したとすれば、それは有機的な根據に基いてゐるのだ。文化の心理的特質の中では、二つのものが最も重要であるやうに思はれる。卽ち知性が强くなつて本能生活を支配し始めたこと、、又危險な凡ての結果を伴ふ、攻擊傾向が內面化して有利な結果や危險な結果が伴つて來たこと、である。吾々を文化に驅り立てた心に最も甚だしく矛盾するものは戰爭であるから、その故にこそ吾々は戰爭に對していきり立つのであつて、吾々はたゞ端的に戰爭は嫌ひである。それは單に知的な、又感情的な否定であるばかりでなく、我々平和主義者に取つては、生得の偏執にも等しい、蟲酸の走る事柄なのである。また戰爭は殘酷な事だからと云ふのもさる事ながら、審美的に見て高く評價出來ないことも、同樣に吾々の反抗を助長してゐるのである。

他の人々も又同樣に平和主義者となるには、一體吾々は何時まで待たねばならないのであらうか？ それは何時とも云へないのではあるが、二つの契機——文化的心理態度と、將來の戰爭の效果に對する當然の不安と——からして何時かは戰爭の結末を告げる日の來るべきを信ずる事は、必ずしもユトーピア的希望ではあるまい。が、如何なる道如何なる迂路を辿つて來るかは、吾々の推知し得ない所である。然し吾々は次のやうに云ふ事が出來る。——凡て文化の發展を促すものは、また戰爭に對抗しても働いてゐると。

以上は誠に至らぬ答辯で、さぞ貴方を失望させたこと、思ふが、あしからずお許しを願ひたい。心から御挨拶まで に申添へます。

九月、ギインにて　S・フロイド

フロイドの「何故の戰爭か」と類似の題目を取扱つてゐる論文としては「戰爭と死に就いて」„Zeitgemässes über Krieg und Tod“(1915) がある。この論文の要旨は旣に夙く久保良英氏がそれを紹介し、現にまた同氏著「精神分析法」の中に再錄してある。が、この論文の飜譯は石中象治氏が試みて昭和七年アルス書店から公刊してゐる。また攻擊本能に關してはフロイドはも少し精しく『文明と不滿』„Das Unbehagen in der Kultur“(1930) の中に論じてゐる。この書の譯としては大槻憲二氏（春陽堂）のと菊池榮一氏（アルス）のとがある。

E・グラヴー氏の戰爭心理分析論

"War, Sadism and Pacifism" (1933)——Edward Glover

岩倉具榮譯

醫學心理學者が平和問題に口を出したりすると、何故彼が自分の學問の埒を越えたのか、又彼は自分の云ひ分を氣永に傾聽して貰へるとでも思つてゐるのかと人から尋ねられるのは明らかである。併し心理學者としては、ちやんとそれだけの確信と準備とを以て臨んで居るのである。彼は實際、誠意を證明するだけの二つの立派な理由を持つ。先づ第一に、平和の宣傳は應用社會學の役目であり、心理學者の方は寧ろ「群集心理」といふ言葉でこれを云ひ慣はしてはゐるにしても、彼は戰爭といふ現象とその反動たる平和といふ現象とは自分の領域のものであることを當然主張し得るのである。第二の理由は正眞の好奇心の理由で、殆ど醫學的診斷とも云ひ得べき事柄である。諸方面の高位にある人物の演說に於て、國際聯盟の活動は一つの十字軍として云々せられ、又イギリスの前首相某氏はこの十字軍が信仰の上に立たねばならぬと云つたのである。今や平和宣傳の直接目的たる戰爭廢止は、一人前の思慮ある人間ならば誰でも疑ひなく受け入れることである樣に見える。而も、熱心なる平和主義の一團に取つてさへも最も根强く平和宣傳を持續する必要がある許りでなく、彼等の努力が成功したとしてもやうやく戰爭的傾向と五分々々の勝負になることは疑ふまでもない。「戰爭根絶のための最後の大戰」の記憶が薄れるに從ひ、次の勃發を妨止せんとする一般人の動機もその精力と持續力と方向とを失ふのである。

これを自然的に註釋すれば、人類には戰爭衝動があるためにこの狀態になるのでと云ふ事になるのだらうが、併しこのやうな見解で滿足することは學問的方法の傳統を裏切ることである。一つの機關が部分的に病氣であると分つた場合には、醫者の仕事は單にその病氣を診斷するにある許りではなく、何故その機關の健康な部分が機能を倍加的に働かせる事に依つて病氣を克服して了はなかつたのであるかを探知すべきである。かう云ふ行り方で以て吾々は、何故戰後に自ら生じて來た平和確立への慾求がその迫力をかくも早く失つたか、又平和十字軍の戰略に何か根本的の缺點、或は內的の弱點がないかどうかを尋ねなければならない。

之等の問題を組織的に評論し始める前に、私は專賣藥行商人のやり方に從つて、心理學者がこの問題を取扱ふ見本的の結論を、見本的の實例を添へて諸君に提出しよう。典型的の結論は次の如くである。——卽ち、平和を招致しようとする精力の大部分は正に戰爭を招致する精力と同じ源から出てゐる、と。も少し學問的に云ひ換へれば、外部の人に向けられる攻擊衝動は、若しもこれが自身に向けられると（卽ち近道を取れば）、それが促進させ始めた攻擊を妨止するに至る、と。さて私は、この命題に附言しよう。平和を促進する衝動の或るものと戰爭を勃發せしむる衝動との間に根本的の類似があるために、平和主義は仕事がやりにくくなり勝であると。平和主義者も亢奮して來るとその攻擊慾的根元を曝露しさへする。さてそこでこれを治療するにはかうお勸めする。——平和運動の動搖的傾向は、戰爭衝動も平和衝動も似たものである點に注意を向けることにより、最も首尾よく且つ急速に、これを克服し得ると。

觀察の方法に關しては、あるものは非常に學問的であるが、他の者は甚だ非學問的である。例へば、戰爭の經驗に就いて兵士は如何なる心理的反應を起してゐるかの實例を蒐集して見ると、恐怖や嫌惡を起す狀態に遭遇してゐる事もあるが、それに反してその兵士が安全な狀態におかれてゐると、却つてある程度の魅惑を感じてゐる場合が多いといふことが注意されたのである。多くの兵士は、とり殘された一軒の家の建物全體が濛々たる塵と煙の中に見えなくなつてゐる時に、その家に直接射擊を加へてゐるのを見るのは奇妙な喜びであると云つてゐる。併し兒童が自分の室でやつてゐる事を客觀的に觀察して見ると、こゝにも兵士の場合と同じ觀察を發見することが出來る。兒童は骨を折

つて喜々として煉瓦の家を建てるが、出來上ると彼は直に自分の拳を振つてそれをこわして了ふのが屢々である。そこで心理學者は之等の觀察を比較して、兵士と子供との間には心理的の類似があると論ずるであらう。彼は平和を首尾よく宣傳するためには、それは家庭即ち育兒室に於いて亂暴をさせぬやうにするところから始めねばならぬと云ふ程、悲觀的でさへある。この見解の正否はともかく、これは何も私が始めて唱へたことではない。ウォータールーの戰勝の由つて來るところは、イートン校の運動場に於けるエリントンの遊戲ぶりにあつたと論ぜられてゐる。心理學は唯之に做つて、ナポレオンの戰略はコルシカの育兒室で計畫されたといふことを暗示するのみである。

×

戰爭と平和の關係を組織的に調査する第一歩は、これ等兩者に關係のある本能と衝動との表を作るにある。こゝで吾々は二つの困難にぶつかる。第一は人間の衝動の分類について意見の相異があるといふことである、第二は、材料の蒐集は之迄餘りに皮相なやり方で行はれて來たといふことである。そこで諸君がどんな分類を採用するにしても、諸君が普通の三部類（即ち性本能、自己保存本能、及び群衆本能）を受入れるか、又は十二種或はそれ以上の本能が假定する所の更に精巧な記述心理學の分類を擇むか何れにしても、そこにはよつて以て凡ての分類が評價される一つの實際的な試驗法があるのである。如何なる衝動にしても、それの障害が心的に葛藤或は不快を起させる如き衝動が個人に取つて極めて重大であるといふことは嚴然たる原則である。そして神經症や數種の型の精神症について精神分析家が調査したところに依ると、之等の病氣の背後には、性衝動（最も廣い意味に於ける）の重大なる不調と、攻撃的（或ひは破壞的）衝動を支配する機制に重大なる障害が發見されるといふことが明かとなつたのである。之等の事實を見ると、本能を二つの主なる部類（即ち追及的 appetitive と反應的 reactive と）に分類することの正しいことが分る。一般的に云へば、人間の心の傷き始めるのは、それが破壞衝動又は性的衝動を、或ひは破壞、性的兩衝動の何等かの重要な混合を何等かの方法で支配し得ない時に於いてである。

此の分類を採用すれば、研究の第一歩は比較的單純である。即ち戰爭衝動は破壞衝動と同一であると見做し得るこ

とは明かである。併し乍ら之の見解はあまりしつくりしない。戰爭の歷史を研究するには、もつと包括的の分類を必要とする。卽ち、かゝる分類によれば、戰爭に關する衝動は、破壞衝動（生物及無生物の）と獲得衝動（これは專らにと云ふわけではないが大部分は無生物に向けられてゐる）及び性的攻擊（主に生物に向けられる）と殺人（强奪或ひは劫掠）慾である。之もやはりしつくりしない。不適當なところがある。原始衝動の解放と共にある正反對の反應が高まつて來る。卽ち普通に高貴な德として稱揚されてゐるもの——例へば、理想への獻身、勇敢なる自己犧牲や戰爭道德、精神的又肉體的勇氣の離れ業や忍耐等である。之れは大分ましであるが未だ十分とは行かない。一體、本能的な戰爭現象の目錄を作つたり分類したりする事は、今迄何もやらなかつたといふのが事實である。心理學者に非ざる才能ある人がその仕事を試みたが、概して彼等はその戰爭小說或は自叙傳を始めるに强い主觀的偏見を以てし、決して全然客觀的な心理學的標準を以てしてゐないのである。で、吾々はこゝで一つ試驗的に問題を提出することによつて、後に實行手段を討論する時の準備にしておきたい誘惑を感ずる。——卽ち、一體、國際聯盟は戰爭衝動の性質を心理學的に討究するために、或は國際聯盟をしてこれを討究させるために、何百萬の金を使つたのであるか。どれ位多くの心理學的研究團體が、個人的或ひは社會的何れかの人間的鬪爭の謎を解かうとして、色々の國で晝夜活動してゐるであらうか。

廣い範圍の統計的調査が缺けて居るために、人々はあちこちに散在してゐる記錄を賴るより外はない。卽ち喧嘩をする者の個人的實驗とか、幼兒や原始野蠻人の戰鬪本能に關する多少の發見を賴るより外はない。兵士達の經驗を一通り實驗して見ても、一般に破壞衝動の解放に伴つて、ある不思議な生命衝動が戰爭狀態の下から勃發して來ることが分る。例へば、ある一私人——平時に於いてはたゞの一辯護士——が、あらゆる安全な機會を摑んで敵の齒を抜いて廻つたと云ふ事實があるが、かゝる衝動は如何に說明すべきであるか。勿論これは普通の場合ではないが、それにしても、その人間の中には、暴行と慘酷と戰利品獲得とに驅り立てる衝動が本人の意志とは獨立に存在してゐる證據である。實際、彼の原始人的遺傳の衝動とボルネオに於る首狩のお祭式の戰爭行動との間には、心理的類似がある。

アメリカ・インディアンの一時の頭皮剝ぎの儀式との類似は云はずもがなだ。この心理的類似の事實を追及して行くと、諸君はピッケルハウベンの記念物蒐集は同じ衝動に根源を持つといふ結論に達するであらう。卽ち祭りの日に老嬢が記念として前庭に植えるためにすみれの根を引き抜くのは、こゝにも亦、野蠻時代に狂亂的なお祭騒ぎをして發散させた衝動の名殘があるのである。何にしても、相當の材料を分類して見ると、戰爭狀態の下では、社會が不斷に承認さしてゐる普通の稱贊すべき衝動のみならず、又一時的に承認されてゐる殺人と破壞との衝動のみならず、陸軍省さへも承認しない樣な多數の衝動の現れ出ることが分るのである。さう云ふ衝動の第一類としては、敵を敵として殺すのが目的と云ふよりは破壞のために破壞すると云ふ特に深奥な目的や奇妙な變つた種類（例へば切斷）としての行動や衝動がある。第二類としては、性的滿足の要素が明らかに入つてゐる所の破壞行動（例へば性的切斷）がある。そして第三類としては、明かに性的の性質を帶びてはゐるが、普通でない性格の衝動（例へば所謂性的倒錯）がある。之等の分類は、兒童の初期の精力の大部分がこれ等と殆ど同じ衝動を支配するために費されるといふことを知るに及んで益々その重要さが分つて來るのである。

さて、原始的破壞衝動の發達に關して、更に重要なる一點がある。或る場合には、攻擊、破壞及支配の衝動は自己保存の目的に役立ち得る（乳兒に於るが如く）し、他の場合には愛情を高めたり促進したりする（熱情的な抱擁に於ける如く）が、凡ゆる個人の發展に於てある種の苦痛を加へることがそれ自身目的となる如き段階のあることが明かになつてゐる。この點に關しては、人間は動物界に於て殆ど獨特のものである。この事實は、大人がその性的滿足を得るに主に愛の對象に苦痛を加へんとするサディスティックな倒錯を研究することによつて多大の裏書きを得る。最近大いにやかましかつた「八つ切」犯罪はこの行動の過大なる型を現してゐる。簡單に云へば、戰爭は多分、破壞衝動が全く生物學的な目的から離れて個人的目的を追及する證據の最も劇的な一つである。

さてこゝまで論じて來たのであるから、今や更に實際的な考察に入つても丁度恰好の時である。戰爭と平和の問題は獨立の問題ではない。平和主義者は單に戰爭回避のことのみを考へてをればよいのではない。卽ち彼は明かな破壞

衝動と分つてゐる一群の衝動許りではなく、古代的な種類の「混合」衝動の復雑な衝動群をも問題にしなければならない。之等の古代的衝動の多くは、大人の生活ではもはや明かに露出してはゐない。即ち、それ等は學問的に云へば無意識なのである。そして之等の無意識の衝動は、不斷の活動狀態に於いて凡ゆる個人の心に存する。これから後の論及に便利であるから、吾々は最も重要な混合衝動をサディズムとマゾヒズムと呼んでおく。即ち破壞衝動と愛慾衝動との混合が外部の對象に向けられる時にはサディズムであり、又それ等が自身に向けられる時にはマゾヒズムとなる。ある程度のサディズムは、性的及社會的兩生活の要素として意識され得るが、最も深いサディスティックな興味は普通の狀態の下では、無意識のまゝである。從つて吾々は、サディズムの無意識な力と、之等の力を支配し、禁壓し横道にそらせ、隱蔽し或ひは氣付かないやうにさせておく同樣に無意識な方法とを正確に計量する迄は、戰爭の諸現象を分類することは出來ないのである。

暫らくの間平和宣傳の事に目を轉じて見よう。さきに私は戰場で敵の齒を抜き廻つた辯護士の話をしたが、もしこの男が平和團體の支部幹事であつたとすれば、彼の宣傳の賴もしさや效力について諸君は安心されるであらうか。その男がもつと責任のある地位、例へば外務大臣とか外國への大使などになる事を諸君は欲するであらうか。戰爭の刺戟がなかつたら、彼のサディスティックな傾向は大概は無意識のまゝに止つたであらうことを記憶せよ。實際、若し彼が未だ生きてゐるならば、彼は自分の行つた事は全部忘れて了ひ、そして今は熱心な平和の首唱者になつてゐるといふやうなことは如何にもありさうな話である。さういふ風であつても、諸君は一朝國際間に危機を生じ戰爭か平和かの瀨戸際に於いて、彼の如きを外相に大使に起用する勇氣が出るであらうか。

×

こゝに於て吾々は戰爭心理研究の第二線に近づくのである。若しも諸君が如何なる個人でもが力强い衝動の存在に氣付かないのは何故であるかと問はれるならば、それは確かに之れ等の衝動を支配するより力强い機制によるに違ひないと我々は答へる。專門術語を使へば、「抑壓」は、本能を禁制する凡ゆる機制の中で最大のものであり、又限られ

た意味では最も確かなものである。抑壓がうまく行くと未知の衝動が挫折してゐるために、吾々は抑々その衝動が存在してゐるとは夢にも思はず、又肉體的の不愉快も精神的の緊張（即ち感動）も持たないものである。この心理的機制を細かく說明することは非常に專門的に亙るから、私はこゝでそれをしようとは思はない。唯、次のことを云ふに留める。即ちこゝで云ふ心理的機制の內には、潛在的な心理的活動範圍からそこにあつたエネルギーを引揚げて、これをその危險區域隔離に從事してゐる諸觀念のエネルギーに補ひ加へると云ふことも含まれてゐるのである。なほもう一つ云ひ添へておきたいことは、この「抑壓」と云ふ機制は本質的には逃避の法であるが、生物學的に見れば危險を逃避する他のあらゆる形式と同樣（敢て以上とは云はないが）是認せらるべきものだと云ふ事である。この「抑壓」の助けによつて原始的衝動は相當に弱められてゐるので、その殘留物を、所謂文明的なものが容易に取扱ひ得るやうになつてゐるのである。抑壓はそれと氣付かれざる大規模な自己欺瞞である。生物學的に云へばそれは、ある分析家が云へる如く、嘘の父である。併し凡ての機制と同樣、「抑壓」も首尾よく行けばそれでよいのである。抑壓の危險は抑壓しそこないの危險である。衝動を代表する思考が意識にまで突出しさうな氣勢を示すと、どんな災害が起つて來るか分らぬ。心は危險を嗅ぎつけて慌て出し驚いた馬のやうに狂奔したり、梶を蹴散したりするであらう。たとへその思考が安全に閉ぢ込められて了つても、未知の被抑壓衝動の緊張が感ぜられると、どんな災害が起つて來るか分らぬ。例へば何か代りの物が避雷針としての役目をさせてくれるであらう。けれども若し抑壓されてゐる思考が意識され、同時に感情の緊張がその源まで跡づけられるならば、個人と社會とは安全である。暫くは兎に角、息つく暇が得られて、その暇に意識的の反省と判斷とをなす餘裕が得られるのである。

「戰爭押賣屋」の現象は誤れる抑壓の危險と不安の適切な實例である。その一番表向の形では、戰爭押賣は單に國際外交の侵略的な姿に過ぎないが、勿論それは甚だ外交的な活動の外見は平和的な性質によつて相當な程度まで隱蔽されてゐる。市井の人ならばその好戰的想像をそんなに匿すには及ばないのである。そして普通には國際的正邪の先入觀念は、實は都合のいゝ代償活動であり、愛情的緊張の代償發射であり、その根源は幼兒のサディズムにあるのであ

る。併し乍ら現實の危機に際して、この代償發射は當人をして戰爭か平和か何れかに偏せしめるであらう。吾々はどちらにその平衡が動搖するかを直に豫言し得るものでないことを諸君は觀察するであらう。他の多くの要素に就いての知識が、此の如き何等かの豫言には必要である。けれどもその偏向は個人的の無意識の必要によつて命令されるのであつて、社會的必要の合理的考察によつてではないのである。

×

併し、抑壓し損ひの危險は、原始的サディズムが不適當な方向に勃發し勝ちであること許りではない。誤れる抑壓は、それ自身不合理な憎惡を培ひ易いものである。この事實の實際的證據は神經症の個人の分析から得られる。神經症の徵候を分析すれば、大量の不安と罪惡感が發散されて、やがてその徵候が消失することを發見する。間もなくその徵候とはとりもなほさず不安を支配せんための自發的試みであることが分つて來る。勿論、多くの場合さう云ふ試みはうまく行くものではない。多くの神經症的徵候は、實際に、「不安狀態（アンザイエチー）」と呼ばれてゐる。その他の徵候は亦、恐怖症（フォビー）と呼ばれてゐるが、これは過度の恐怖が意識せられざる思考及狀態から意識されてゐる思考及狀態に轉位されたものである。（例へば、家畜、小刀、生き乍ら埋められること、密閉した場所、雷その他への恐怖）。これ等不安と恐怖、兩方の場合は、抑壓のうまく行つてゐない場合である。無意識の衝動による感動だけが意識に迄溢れ出し、その根源たる觀念の方はそのまゝ抑壓されて殘つてゐると云ふ場合である。併し最も重要な事實として觀察せられることは、無意識的根源の不安を發散させるに先立ち、平常は柔和な患者が深い敵意と嫌惡の態度を示すのみではなく、この敵意を一番手近に有合せの者に向けて來るといふことである。多くの場合にそれは分析家に向けられる。而もその分析家は、よしんば短所のある人間であるにしても、被分析者の個人的感情を當然このやうに突然變化させるやうな何事をもした覺えはないのである。不安は憎惡を培養し、憎惡は不安を起さしめる、兩者は共に破壞の前兆となる。

その證據はいくらでも擧げることが出來る。まづ比較心理學から始めよう。全く臆病な動物も、追ひ詰められると所謂窮鼠却つて猫を噛むの類で、望みのないのに拘らず攻勢を取るのが常である。次に兒童心理を觀察するに、兒童

は何か恐ろしいことがあると腹を立て易い。ビク〳〵してゐる子は不安があるのだ。むづかる子供は何か悪いことをして恐れてゐる子供である。攻撃的な破壊的な態度を示せば、罪惡感と不安と恐怖とを起してゐるのだ。これまで考へて來ると敵愾心なるものが判然と分つて來る。憎惡は攻撃的傾向の存在を示す許りでなく、內心の不安に對する防禦として用ひられることがある。兒童は何とも說明出來ない敵、卽ち彼自身の原始的衝動の耐えられない緊張によつて追ひ詰められる。之等の衝動は滿され得ない許りでなく絶望を培養する。絶望は不安に導く。不安は心の平和の敵である。從つて極點まで達すると、兒童は臆病な動物の樣に振舞つて咬み付くのである。

こゝで一寸論歩を休めて、右の事實と非常に似た國家的事象を比較研究して見度くなる。例へば、好戰國は不安のある國であり、又戰爭押賣國に駐在する大使は、その國に於ける群衆の不安の凡ゆる根源を見出し、これを鎭めることを義務とする……と云ふのである。併し、集團心理に對する個人心理の關係が明かにされる迄は、以上の如き比較考究への誘惑は見合せて置かねばならない。說明出來ない自分自身の衝動により、追詰められる彼の兒童の事に立歸るが、彼は振り向いて咬みつくだらうと私は云つた。併し、彼が振り向いても敵はゐないのだ。本能と云ふ敵は內にあつて意識されざるものである。だからその時偶然起つた出來事の中に敵がゐるやうに考へられて了ふのである。子供等は經驗に依つて、外部の世界が子供等に壓迫を加へ、絶望させ、干涉し、罰し、又概して精神的及肉體的の苦痛を生ぜしめると考へてゐる。簡單に言へば、外部の世界が敵の樣に振舞ふのだ。この經驗によつて偏見を持ち、兒童は窮鼠の位置から出て反噛して來る。生物でも無生物でも一番手近のものが彼の獲物となる。彼が何かを、どちらかと云へば無生物よりは生物を、見つけるや否や傷ついた水牛の樣に突貫する。之等の恐慌におそはれた者の叫び聲はヨーロツパのどこの公園の兒童遊歩場に行つても聞かれる事である。また現在ジェネバに於て、戰鬪の熱火の後で、多くの乳母や肉親が脛をこすり、或ひはこはれた玩具の破片を拾上げてゐることである。さて、こゝに吾々は所謂投出 projection の頂點を見る。投出とは心的轉位の意である。內部の（心の）刺戟を外部の（實在の）刺戟に、內部の敵を外部の敵に置換へんとの企てである。それは最も古い心的機制の一つであり、緊急の時には有益な役目を果す

が、大人の機制として保持されることは現在の文明に取つて最大危險の一つである。而もそれは、大低の群衆關係に於て特に力強く作用する。一つの思想が社會に受入れられてゐるある信條に違反する場合は、それは常に誹謗の形を取つて外部に向けられる。月並のイギリス人に取つてはパリは「浮華」の都會であるが、ロンドンはさうでない。又勿論、彼自身も「浮華」ではない。戰時にはこの投出過程が一層露骨で一般的でさへある。赤十字部隊を砲撃し、屬領を劫掠し、負傷者を去勢したり苦めたり、蠟燭の脂をとるために死せる同胞を煮たりするのは、いつも敵ときまつてゐる。

この點に於て更に人類學的考察をもつて來ると、吾々の見解は一層廣くなる。幼兒の戰爭と國家の戰爭との中間の何處かに、原始民族の種族戰爭が這入る。之等の現象を研究して見ると、人類進歩の過程に於て投出の要素が戰爭の敢行に決定的の役目を演ずることが十分に分るのである。先づ第一に吾々の知ることは、野蠻人が所謂アニミズムに依り、外部の世界に靈が存すると信じたことである。卽ち原始人が支配するのに困難な原始衝動を外部に投出したものであり、そして彼は常に之等の危險な惡意ある靈から攻撃される危險の中にゐると自ら信ずるといふことである。勿論、子供も實際に、同じことをする。吾々は亦、首狩の行動は本質的には、世界を同樣にアニミスティックに見ることと密接な關係のある儀式的制度であることを知つてゐる。それ故、種族戰爭は一般に單なる經濟的又は自己保存的の必要ではないと云つても大して言過ぎではなからう。ある衝動を滿足させないと家族的又は種族的分裂の有力な根源となる場合にも、右の種族の戰爭は衝動を外部に向け換へる役に立つ。吾々はこの爭鬪の外面化の中に、生物としての外界順應の一つの樣相をぼんやり乍ら諒解し得る。悲觀的な見解だと諸君は云ふであらうが、實際はさうでない。結局、たとへ若し支那人が彼の家を燃失せしめて燒豚を得たとしても、經驗と反省とを積めば、一層適切な料理法を知るやうになるものである。

投出は心的機制の古い型で、大人の場合には危險な機制となることがあると云つたが、それが全部ではない。多くの緊急の場合の心理機制と同じく、投出とても本能の絶えざる壓迫を處理するには十分でない。腹の空いてゐる人も

始めの内は、食卓の友達に向つて、飢えてゐるのは君等だと云つてゐるかも知れないが、やがて食事があんまり後れると、彼は結局彼自身が飢えてゐることを白狀せざるを得ない。尙また、若しも彼がテーブルクロスを食べて飢餓の苦しみを防がうと試みても、彼はやがてそれでは何となく本質的に滿足を得られないことを認めるであらう。食慾以外の衝動（例へば戀愛衝動のある形）は成程、永い間滿足させないでおくことは出來るが、結局何とかなだめたりすかしたりする人爲的の工夫でその衝動を支配する事が必要である。吾々の觀るところでは、抑壓とは投出を改良したものであるが、それとてもやはり重大な弱點を持つてゐる。何となれば、それは常に成功するものではないからだ。抑壓も投出も原始的なアニミズムの機制もみんな駄目となつた時に、吾々は本能の危機に面するのである。

×

こゝに於て吾々は根本的に重大な發見をする。戰爭と平和の問題許りではなく、文明の全過程を闡明する發見である。この本能の行詰りに面して、心的裝置は一つの新しい機關を生む。それは順應と云ふ傑作を生む。そしてこの順應は最も稱贊すべき經濟的方法で成される。何となれば順應は、エネルギーを——若し積むまゝ積ましておけば凡ゆる精神的及肉體的機能の上に重荷となるべきエネルギーを——使ひ果すからである。

その話は簡單に云へば次の如くである。——新しく生れた子供は原始的な愛の能力と原始的反應傾向（それは大體原始的憎惡と呼んでもよい）とを備へて無限なる幼年期の旅に出發する。原始的の愛と原始的の憎しみとは共に、不斷の失敗に運命づけられてゐるのがその本性である。結局、幼兒は愛の發作でその母を全く呑むことも出來ず、又憎しみの發作で彼女を寸斷することも出來ない。人間を故意に、そして傍觀者たちの眼前で堂々と、咎められる事なく粹碎することが出來るのは、たゞ戰場に於てのみである。幼兒の大部分の原始的衝動は現實に於いては滿足され得ないものである。その直接の結果として、（a）子供の最初の外的對象、兩親への關係は愛憎の混合となり、又（b）之等の對象に對する本能力が滿足されないし、又滿足させることが許されないところから爆發的緊張の危險狀態を生ぜしめることになる。

他方、兩親は、幼兒を實際に保護するものであるために愛と稱贊とを子供から受ける。そして子供は段々に意識的にも無意識的にも兩親の型に自身を模するやうになる。子供の心は不斷の刻印を受ける、と云ふだけでは十分ではない。卽ちその過程は心的嚥下或は心的吸收の一種とでも云へば最もよく記述し得たことになる。ある原始民族に於ては兩親はその死後子供等によつて肉體的に呑込まれるが、同樣今日の兩親も生きてゐる間に心的に嚥下されるのである。能動的な兩親的な心的機能の廳が、此の如くして子供の心に建てられる。そして之は現實の兩親の居ない所で働きをする。同時に兩親は實際、子供の慾望を遂げさせないし、また如何なる場合にも慾望を遂げさせないのは兩親のせいとなる。前にも云つた如く、慾求滿足を妨げられたゝめの憎惡は非常に原始的であつて、たとへ兩親が自分を破壞しようとする子供に、共働して自殺したとしても（そんな事は殆どあるべからざることだが）憎惡は滿足され得ない程である。この果されざる憎惡は、まづ投出によつて扱はれる。それで子供は憎惡を兩親に投出する。從つて兩親は今や、彼等が實際に持つてゐるより以上に憎惡を持ち威嚇する者となる。原始的アニミズムが幼兒に於いて復活して出て來る。世の中には危險な兩親に似た面影やその代理が充滿してゐる。尙、心的吸收或ひは同一化の過程は依然續いてゐる。實はこの過程は慾望の滿たされない事によつて促進される。さてその結果として、子供の心に模倣や同一化の親愛的態度と並んで甚だ反撥的な態度が發展するのである。子供はよい兩親と同じく惡い威嚇する兩親をも、心の中に嚥下する。この不吉な別我 Doppelgänger は、兩親の誇張（投出）された苛酷を現してゐる。こゝに到つて子供の心に新に起る兩親的な機能の廳は子供の自我に對して大體に於いて敵對的である。

子供の原始的エネルギーは現實的の兩親又はそれに類する對象に向けられて失敗し、慾求の滿足が得られないで己れに歸つて來るといふことを吾々は知つたのである。そしてエネルギーのこの逆流は、鬱積の恐れがあるばかりでなく、爆發の恐れもある。併し乍ら、善い兩親と惡い兩親とを心中に引込む事（同一化）が子供になされる時、その極端なものはある目的に使用され得る。善き兩親の取込みは望みなき愛を吸收し、惡しき兩親の取込みは望みなき憎惡を有效に使用する。憎惡の精力は大部分自己穿鑿と禁制に用ひ盡されるからである。簡單に云へば、之等の同一化は

新しい心的組織に形成され、その組織の一部分は攻撃的作用を行ふ。それは衝動を嚴重に檢查して、殆ど凡ゆる原始的本能を禁制し或ひは挫くに到る。この目的のために用ひられる精力は、當人の今は內化されたる原始的サディズムである。換言すれば、この新しい心的機關、卽ち檢查組織（時には、原始的無意識、或は超自我と呼ばれる）は、滿足させられざる攻撃慾の全部をとは云はないが、大部分を用ひ盡すのである。

×

それは本能エネルギーの現實順應の勝利である、そしてその勝利の第一の結果は不安の減少と、愛への力の增加と還境からの愛の報いの增加することである。實は、この組立にも成程弱點はある。多くの原始的順應の如く、それの機能は過度になる傾きがある。それは本能生活を全然痲痺させる所まで行くことさへある。併し大體に於いて順應はうまく行く。そして行政家及外交家双方が屢々濫用する行り方で（卽ち分割し支配する行り方で）作用する。原始的自我が「汝の敵を殺せ」と云ふ時に、無意識の指導者は「若しさうすれば、私はもうお前を愛さないだらう」と云ふ許りではなく、全く峻嚴に「若しもお前が彼等を殺せば私はお前を殺す」と云ふのである。そしてその結果はどつちつかずになつて了ふ。之は公然と好戰的ではないが、平和の促進にも大して骨を折らない一般個人の態度であるやうだ。更に無意識の指導者が「お前の敵を愛さねば、私はお前を殺すだらう」といふ時に、そこに平和宣傳の動機の一つが見える。平和宣傳の動機の凡てとは云はない、何となれば私は二三の主要な要素以上を擧げてゐるやうな顏は出來ないから。

ところで私は、自我が分割及び分配の方法によつてこのやうに外界への攻撃を支配することを、順應の傑作と說明した。そして大體に於てこの說明は正しい。併し環境に何か不都合なことが出來ると、その機制は破られることがある。例へば、能動的に戰爭好きではないが能動的に平和好きでもない普通の人が、ある理想（例へば祖國愛）によつて燃えてゐる場合を假定せよ。更に彼が社會の法則や規定に依つてその祖國の防禦に立つやう、或は十字軍に從ふやう、或ひは「戰を終るための戰」に加るやう促されると假定せよ。これ等の場合には彼は自分では禁制の心はあるの

だが、社會が容認してゐるのだから已むなく屈伏してその全攻撃力をもう一度外部に向けるであらう。併しこの場合には昔の子供時代の敵に向つてではないのだから、彼は戰を憎みはするが緊褌一番してアフガン人やバスート人や支那人や和蘭人やイギリス人やフランス人やドイツ人——或ひは最初に彼の國の外務大臣によつて指命されたものなら何とでも戰ふべく出發しなければならないやうになる。それは確かである。

そこで彼は昔の幼兒時代の攻撃慾を復活させ、戰爭といふ本質的な異常心理を實現したと假定しよう。危機に於ける彼の行動は異つた種類のものであることは當然認められる。學者先生や豫言者や醫者が戰は避けられないと嚴かに宣言したとすると、彼は直ちにその狀勢を診斷し、彼自身の外務大臣を心の子供部屋に閉ぢ込める力を持つてゐる精神療法家を委員に任命し、そして敵國の外交的狂人審査委員と接觸して行くだらう。

さき頃の世界大戰の間に凡ゆる戰鬪國の一般兵士達はみな右に述べたやうなことを幾らかぼんやりと認識した。併し彼等は十分はつきりと見ることが出來なかつた。彼等はやはりぐづ〳〵云はずにやつちまへ、勝てば官軍だと云ふ風に考へてゐるために偏頗になつた。彼等は大體次のやうな風に考へてゐた。——ドイツのカイザーと英國のグレイ卿とフランスのポアンカレー大統領とは何處か村の廣場に急いで行つて各々手に棍棒を持ち、殴り合ひつこをして彼等自身の頭蓋骨の厚さで事を決めたらよささうなものではないかと。結局鬪鷄に對する古い興味が彼等の中に死滅してゐなかつたことを諸君は見るのである。それにも拘らず彼等は明らかに深い心理學的眞理を幾らかぼんやり認識してゐたのである。彼等は世界戰爭は單に家庭事件の擴張に過ぎず、カイザーとグレイとポアンカレーとは單に村の樞助、熊公、八公の子供時代と大して變りはないやうに考へてゐるのである。（中略）

心理學的確信力を持つものにとつては、戰爭廢止への有效なる第一歩は、サディスティックな衝動の本性、その衝動の原始的な形、力と深さ、それの變化及禁制の歴史を完全に探求し、且つ個人的に理解することでなければならない。これを探究し理解すれば、吾々をして吾々自身のサディスティックな慾求を氣付かなくさせてゐるところの所謂「防禦機制」を完全に理解するやうになるであらう。

一

平和運動のとかく煮え切らぬに就いて原因となつてゐる心理的機制の主要なるもの〻大略を述べようと私はこれまで努めて來たから、こゝでは第二次的の原因となつてゐるもの〻一實例を擧げるだけで滿足しなければならない。併し第二次的の源因とは云へ、やはり戰爭防止の客觀的調査に對して不斷の邪魔となつてゐるものである。人は合理的に物を考へる習癖を驚くべき程度につけて來たので、まさかその合理的な考へ方を不合理な目的のために用ひることがあらうとは彼等には信ぜられないと云ふのが自然な程である。ところが相當な量の合理的思想が、確かにこの不合理な目的のために用ひられる。非常に多くの場合に吾々は自身の行動の動機を理論づけたり、系統立てたり、記述したりすることがあるが、それは無意識的な防禦機制によつては十分に隱し切れなかつた原始的衝動を意識的に暗まさうとの目的に外ならないのだ、その粉飾の心理過程は「合理化」又は「理屈付け」rationalization といふ名前がつけてある。多分廿世紀の合理化の最も驚くべき實例は一九一四年の秋の間に行はれた。卽ちヨーロッパ大戰は「戰を根絕するための戰」と云はれた。

それ故、吾々が人間のサディズムを徹底的に研究する大仕事を始めたならば、吾々はどんな口實があらうとも、本質的の材料を廻避するやうな、如何なる企てをも却ける用意を有たねばならない。かくして子供達の玩具の空氣銃遊び、大人の野外の遊戲、社交クラブの將棋やカルタ、討論會の論爭と議論、或ひは美術流派の慘憺たる競爭等からまづ研究し始めるならば、吾々は競爭遊戲の愛好者連からの合理的抗議を默殺する覺悟が必要だ。吾々が人間刑罰の歷史を研究するならば、まづ育兒室で與へられる最初の「めめ！」と云ふおつかない顏付、言葉又は打擲から、下つてはイギリスの學校や刑務所で加へてゐる笞打と頭手架（クビテカセ）、或ひは支那に於て法律上認められる拷問、或ひは原始種族で公認されてゐる人肉嗜食に至る迄、跡づけねばならぬ。その時、此の如き現象は戰爭の現象と關係がないとする凡ゆる社會學的議論に抗議しなければならない。また吾々がマゾヒズムの歷史、凡ゆる國々に於ける宗派の難行苦行、あらゆる種類の感激的な改良宣傳などを探求する時には、こんな事などは戰爭とは何等關係がないと人々は云つて憤

然抗議し、或は理屈で反對して來るであらうが、そんなことに脅かされてはならない。たゞ此の如き心理學觀察の結果が吾々自身の影の如く吾々にとつて近しいものである時には、吾々は自分自身がサディスティックであるから、かう云ふサディスティックな觀察結果にぴつたりした感じを持つのではなからうかとの一層困難な仕事に進むでいゝのである。そして吾々が吾々自身の攻撃的及防禦的憎惡の放出量を計り得る時にのみ、吾々は戰爭の問題を純粹に學問上の又は科學的の論點となることを期待し得るのである。

約言すれば、平和の宣傳と云ふ事には根本的の缺點がある、即ち少くとも精力を見當違ひの方面に致命的に浪費することだとの結論を避けることは困難である。凡ゆる實際的目的のために、平和の支持者は二つの組に分類され得る。經濟論に訴へる所が如何に多くても、倫理的動機によつて論じてゐる人々がある。畢竟するに彼等は、十誡の中で吾々に親しい型になつてゐる無上命法に依憑するのだと云つていゝ。また口先では倫理のために盡してゐるやうに云つてゐるにも拘らず、破壞や剿滅の現象に內的に共鳴して行つてゐる人々もある。彼等に取つては倫理的絕對律は經濟的格言となつてるのだ。——即ち、殺しても得にならぬと。ある者に取つては戰爭は呪咀であり、他の者に取つては戰爭は殺戮の興奮の底拔け騷ぎである。第三の、そして全然違つた見方は、醫學心理學の見方である。——即ち戰爭は人間の諸々の衝動間の葛藤の顯現である。ある困難、ある問題を解決せんとの企てである。大衆的狂氣と云つてもいゝかも知れない。但し、狂氣とはたゞ個人の葛藤を處理しようとの戲曲的企てに過ぎないことを忘れてはならない。心の分裂を防がうとて着手された治療的過程であつたのだが、望みなき分裂に終つたものである事を忘れてはならない。

醫學心理學者の見解を以てすれば、倫理的及經濟的考察に定着して、より深い心理學要素を無視するに至る企ては如何なるものでも精力の見當違ひ的使用である許りではなく、如何なる眞の進歩に對しても妨害である。若しも心理學者が無分別にも格言的の哲學を提出するとすれば、彼は恐らく次の如き事を云ふであらうと思ふ。——即ち、若しも諸君が戰爭を避けようと欲するならば、平和の用意をせよ。平和には戰爭と同じ程激しい緊張がある。諸君自身の

攻撃慾に氣を付けよ、さうすれば國家の攻撃慾は自身で氣を付けるであらう。また若しも應用個人心理學の經驗を一つの命題に結晶させてくれ、萬能藥的心理學が戰爭氣狂になつてゐる民族に提示すべきことを一句で暗示してくれとたつて乞はれるならば、心理學者は多分新しい第六命令の形を借りてかう云ふであらう。——卽ち、汝自身の（無意識的な）サディズムを知れと。（完）

補遺

マルクス・フロイド比較論

先號に於いて私はマルクスとフロイドとを比較研究し、マルクシズム、アナルキズム、帝國主義、ファシズム、超民族國際階級同一化主義、超階級民族同一化主義などの心理的機制に就いて論じたが、そこに云ひ落したことを、とゝに一寸補つておきたい。

我々萬人はナルチスムスと兩親コムプレクスとリビドーとをもたないものはないのであるから、總て社會人としてみな以上の何れの主義にも傾かうとする可能性はあるのだ。その何れかに傾くことを決定するものはその人のコムプレクスと定着とであらうが、外的事情もまたこれを決定する一要素となり得ることは當然である。

國家が隆昌である間は、その勢力が國外に延びてゐるから、その國民の關心は國際的、超民族的となるが、國勢が衰へたり、經濟が左前になつて來たりすると、その關心は國内的、民族的となる。丁度、個人が健康な間はリビドーを外部對象に纏綿し轉嫁愛的であるが、一朝病氣になるとリビドーを内に引揚げてナルチスティッシュとなるのと正に同じである。我々はマクドナルドの變節や、我國の「轉向」流行を難ずる前に現下に於ける世界的非常時の國民的リビドー狀態を理解してやらねばならない。（大槻憲二）

血に關する異常心理

長崎文治

現代科學の洗禮を受けた吾々文化人の心には、血は一見大した感興を齎すものではないやうにも思はれる。唯、科學は生理學的の解釋を以て、血に對する過去の迷妄を打破したゞけである。嘗てあれ程、人間の感情の廣い範圍を占有してゐた血の觀念が、長期に亘つて信仰せられて來た血に對する風習が、僅かの期間の中に、如何に科學の排除力が強いとしても、吾々の精神から完全に抹殺されて了つたとは考へられないことである。吾々の感情に、偶然の機會に伴つて擡頭して來る意味の無い血液觀念が屢々看取される。唯それを吾々の理性は非文化的のものとして抑壓して、意識の奥の方へ追ひ遣つてしまふ。その爲めに、血液に對する感情の強さとか、その信仰風俗の度合ひ等が、文化の高くなるに隨つて薄くなつてゐる。併し文化人だからとて、徹頭徹尾これ等非理性的な信仰風俗や、意味の無い感情が、完全に抑壓されてゐると見做すのは正しくない。抑壓された精神内容は、個人の精神から完全に葬り去られて了ふのではなく、無意識となつて、絶えず其のはけ口を見出さうとしてゐる。そしてこれは、あながちに個人心理の方面に於てのみ爲されるプロセスでは無く、民族心理の一の表はれとしての信仰風俗に於いても爲される。つまり同じカテゴリーが兩者に適用される。此の點からして、理性判斷により無意識領域に追ひ遣られた非合理的な信仰風俗も、それが嘗ては民族意識を貫いて、強い感情を惹起してゐたところからして、無爲に葬り去られてはしまはなかつた。人間の心の底に潜む血に對する感情は、一旦理性監視から脫すると、怒濤の樣な勢を以て原始心理に回歸して行くのである。

そこで吾々は、血に對する原始心理のあらはれとして、『血に狂ふ心理』を病的な精神現象の中に見、『血に對する無氣味さの感情』を常態の精神現象の中に認めたのである。『無氣味さの感情』に就いて何れ稿を改めて論ずるとして、今日は『血に狂ふ心

理』に就いて研究して見る。

『血を見て狂ふ』といふ心理は、動物の或る段階から人間一般に互つて通有なるものである。それが折に觸れ、時に應じて吾々の生活の中へ這入つて來やうとしてゐるが、これに附屬した觀念とか行爲が、總て文化の域を脫してゐる爲めに、その都度意識の奥深く、無意識の領域へ追ひ遣られてしまつてゐるのである。それ故吾々が健全な敎養と正常な習慣との中に置かれてゐる間は、この血に於ける狂氣の狀態は起きないが、若しこの二つの何れかに缺陷が生じた場合には、假令片一方が何んなに健全であつても、この原始的狀態に回歸して行く傾向を阻止する事は出來ない。怨恨が敎養に依る忍耐力を征服して了つた時は、多くの殺傷犯罪の陰慘なる動機を構成し、環境がこの雰圍氣を醸し出した場合に、一は鬪爭の巷に於け狂熱的な勇猛心となり、一は血の觀賞に於ける陶醉狀態を現出する。吾々はこの三つの場合の、血に於ける狂氣を分けて、(一)戰場の狂氣、(二)犯罪の狂氣、(三)觀賞の狂氣とする。この三つの狂氣は文化人にも未開人にも通じて現はれるものである。今これに就いて概觀してみやう。

(一)戰場の狂氣

一般に戰場の狂氣と云つても、こゝでは現代的意味での戰場を指すのみでなく、團體的な肉體鬪爭を行つてゐる場合を廣く言ふのである。この鬪爭の一般的の型は、(一)部族又は氏族相互間の鬪ひ、(二)黨派間の鬪爭、(三)國家と國家との戰爭である。第一のものは、部族を構成してゐた原始社會の人々の鬪ひで、團體的鬪爭の最初の形式である。勿論この外には、同族間にも利害を異にした人々の間の爭ひはあつたにしても、同一トーテムに屬する者同士の殺傷は禁ぜられてゐた爲めに、後に述べる樣な、戰場に於ける公然性は與へられてゐないから、こゝに入れる事は出來ない。又、前に部族、氏族の二つの言葉を用ひたが、これは同一形式の社會を夫々この名前に從つて呼んだだけである。第二は意見を同じふした者同士の集合した團體が、反對派の人々と爭そふものであつて、戰國時代に於けるが如き形式である。第三は現代の所謂戰爭である。そしてこの三つの何れにしても殺傷流血が伴ふ。文明の利器が、化

學的、物理的の方法で、殺傷流血を緩和したとしても、併しそれを完全に無くすることは困難であらう。

戰場の狂氣の特徴は、第一が前述の如き集團性であり、第二は公然性である。戰場は既に公然たる殺傷流血の巷である。こゝでは信仰や道德で許されなかつた行爲が、却つて奬勵され褒賞される。否、必然的に敵を殺傷すべく餘儀なくされてゐるのである。それでなければ、自分が却つて被害を受けるからである。昔の鬪ひは殺すか殺されるかの何れかであつて、その中間は許されなかつた。時代を降るに從つて、それは勝つか負けるかといふ概念に變つて來るが、その中にも殺傷は附き物である。卽ち戰場で敵を殺傷する事は止むを得ぬ、寧ろ當然の事であつた。

戰場で血を見ることによつて勇氣づけられ、一人敵を殺せば、何んな臆病な者でも度胸が据つて來ると一般に云はれてゐる如く、血を見るといふことが何れ程戰士の心をそゝり、捨身的な突擊精神を促すことか、更に「血を流した者は血を流したがる」[註二]といふ心理は、血を血で報ゆる時に覺える滿足としてあらはれて來る。これに就いてはその道の經驗家に訊いてみれば分ることである。訓練の不完全の軍隊が屢々殘虐極まる行爲を敢てするのは單なる群集心理には相違なからうが、そこには血を見ることによつて昂揚せられた感情が原因してゐることを看取しなければならぬ。バルチザン的慘虐は、不規律な統率の下に於いて、血が誘發した群集心理の當然の歸結である。

(二) 犯罪の狂氣

戰場の狂氣の集團的であるに對して、これは個人的である。先のものにあつては、怨恨復讐の念は集團的のものに洗練されて、時には正義といふ意味さへに變つてゐることがある。戰場の狂氣の外向的に勇壯なるに比して、犯罪の狂氣は飽く迄內向的に陰慘である。それ故殺傷流血の過程も、兩者自ら相異がある筈であるが、事實に於て、戰場の狂氣も犯罪の狂氣も、彼等が殺傷流血を行つてゐる間の心理は同一である。そこに次の觀賞の心理の類同性と共に、血に於ける狂氣がある。

犯罪の狂氣の最も良く知られてゐる例は、吾々が芝居等でお馴染みの、佐野次郎左衞門吉原の百人斬りとか、油屋お紺、貢の十人斬り等である。近代に至つては、「妻吉物語」は生々しい事實談を語つて呉れてゐる。犯罪學者は、

精神が健全であると認められる人でも、數人を殺傷する間には漸次意識の溷濁を來して、自己の行爲に就いて反省する事が不可能となる、これは殺人行爲が非常に感情を高潮させるからであるといふ樣に說いてゐるが、私はそこに特に血の興奮性を强調する。これは血に關する異常心理の一般的特質である。

犯罪の狂氣は、「血迷ふ」といふ言葉によつて表現されてゐる如く、こゝでは大抵個人的怨恨の相手が存在することゝ、殺傷に於て相手以外の、關係の無い者に迄危害を及ぼして行く事を特徵とする。こゝに意識の溷濁がある。そして第一の流血に依つて狂氣の第一步が始まり、それから所謂毒を喰らはゞ式に殺害の範圍が薄く廣くなつて行く。遂ひには手當り次第に、無辜の者に迄及ぶのであつて、象徵的の言葉を以てこれを云へば、『血が血を呼ぶ』のである。

(三) 觀賞の狂氣

觀賞を分けて、視覺形式と玩弄形式とする。視覺形式に依る觀賞は、戰爭とか犯罪に於ける狂氣が相手と自分、敵と味方といふ樣に相對的であるに對して、これは主客の關係である。卽ち殺傷流血の鬪爭を客體として眺める主人公がこゝでは介在してゐる。血を觀賞（視覺型で）してエクスタシーに入るのは、明らかにサド・マゾヒスティックである。この他人の苦しみをみて、自ら樂しむといふ行爲は、表面的には道德上許さるべき行爲ではない。併しそれは或る限られた場所に於ては公然と許されてゐる。拳鬪の興行は何處の國でも華やかな觀衆を得てゐる。鬪牛はスペインの傳統的國技である。日本でも鬪犬鬪鷄は嘗ては盛んに好事家達の血を湧き立たせたものである。これ等の興行は表面勝負といふ事に主眼を置いてゐる如くであるが、人間の隱れたる觀賞の心理がそこに働いてゐる。拳鬪場に於けるクライマックスが血の迸る事に依つて煽り立てられるのは、東西軌を同じうする。拳鬪の興味は人々が一般に『血が迸り出た瞬間に、何とも云はれぬ愉快な感じに襲はれる』といふところに表れてゐる。この點に於て女性は正直な告白者である。堂々と名前を揭げて拳鬪に對する自分の興味を明らさまに新聞雜誌上に載せてゐる。彼女等は無意識的にサド・マゾヒスティックな氣持を白狀してゐるのである。勝負そのものには流血は必要ではない。併し勝負に附

隨して流される血は、勝負そのもの丶興味を彌が上にもそゝる。『血が燃える』とか『血が躍る』といふ精神狀態は、こゝから發するのであらう。

次に玩弄形式に依る血の觀賞は、純粹に主客の關係である。卽ちそれは猫が鼠を捕へた時の狀態の如く、客體を殺傷する主人公となつて、流血の快味に浸るのである。これは普通サディズムと云はれてゐて、例のサド公爵といふ、ブロッホ Iwan Bloch 書中の主人公の加虐待性、血の伯爵夫人と云はれたハンガリーのエリザベート・バートリー Elizabeth Bathory の、自己の滿足と若返りの爲めに幾百の子女を犧牲にした殘忍な行狀、彼のジャンダルク軍の一方の將帥として勇名を走せたジーユ・ド・レー元帥 Gilles de Rais が、種々の儀式に名を藉りて無數の小兒を贄の血祭りに上げて自己の殘忍性を滿足させてゐた例、又殺生關白と云はれて、當時の人々に恐れられてゐた秀次の良民に對する殺戮振り等は最も顯著な、自ら手を下して血を見なければ已まぬ底の、血の變態性であつた。

以上の血に對する狂氣の三つの形式は、多少の相違こそあれ、野蠻未開な人種に於ても認められるといふ事は、次に擧げる事例や風習の中から察知する事が出來るし、野蠻未開の人々は、一つの異例なる事實があれば必づこれを神意に迄移して形而上的な說明を附する。血に於ける狂氣に於ても亦同樣である。

血の狂氣に對する未開民族の心理

殺人行爲は、殺人者を狂亂に陷らせることは、未開人にも文明人にも共通である。未開人の多くの信仰風俗の中には、殺した敵の靈魂を恐れる爲めに行ふ儀式とか禁制とかゞ見られるが、それは殺された亡魂の復讐を恐れる觀念から生じてゐる。この信仰風俗の形成にあたつては、二つの動機が彼等の心理に働いてゐるのを見出すことが出來る。一は復讐の豫想であり、他は血の狂氣である。而してこの二者は、彼等の信仰と密接に結合せられて、殺人者が狂亂して敵のみならず、味方に迄危害を及ぼして行くのは、殺された者の亡魂が憑いたからであるとしてゐる。で、吾々はこの一つになつた觀念を分離して、個々の動機から成立つてゐる信仰風俗を見る必要がある。そして前者の復讐の

豫想によるものは後章に讓つて、今こゝでは血の狂氣にのみ就いて見る爲めに、類似の例を區別して擧げてみる。これに就いては、フレーザーの廣汎な蒐集[註二]が、吾々の爲めに非常に役立つ。

「東北印度のルウシャイ族は、敵を殺した者は來世に於て、その犧牲の靈魂の主人公となる爲めの或る儀式を執り行はない限り、その靈魂に憑かれて狂人となると信じてゐる[註三]」。

「北部ロオデシアのアエムバ族は、中央阿弗利加諸部族の全般的な迷信によつて、その血の罪を贖はれない限り、殺人者は狂人となると信じてゐる。戰爭から歸つた戰士は、その夜は彼自身の小屋に眠らず、村のヌサカに寢るのである。その翌日流れに浴して後、醫術師から淨めの藥を塗られて、初めて小屋に歸つて妻との交涉を恢復する事が出來る[註四]」。

殺人者は、何等かの償ひをして相手の亡魂を宥めなければ氣が狂ふといふ斯かる信仰は、明らかに殺傷行爲に伴ふ血の狂亂から聯想されて來たもので、この原因に就いて、原始的な知識は直ちに亡魂と關係づけたのである。亡魂が憑いたといふ言葉は、

「血を見ることに依り、又は血を想像することに依つて起る一時的の發狂狀態に就いて、中央セレベスのベアニ語系ツラヂア土人間に云はれてゐる。」

例がこれを證明する。

「南亞弗利加の、デラゴア灣に沿ふて住むバンツウ族の一であるトンガ族間では、戰場に於て敵を殺すことは無上の名譽ではあるが、その名譽には危險が伴ふのである。彼等は人を殺したり……故にヌルの神秘的にして致命的な影響に左右され、その結果醫術的な手當を受けなければならない。ヌルとは何か？　それは殺された者の靈であつて、その復讐を企てるものである。それは殺人者に憑いて、彼を狂亂せしめる。彼の目はその爲めに腫れて突出し、〝慟〟を起す。彼は正氣を失ひ、眩暈に襲はれ、血に渴いてその家族を襲ひ、槍で以て刺殺して了ふのである」。

といふ例は最も良く血に狂つた狀態を描き出してゐる。

斯くの如く、殺人者が狂亂に陷るといふ事柄は、フレーザーの指摘してゐる如く、未開民族の想像から出た、單な

る物語として片づけてしまふには餘りにその例が多く、その上首尾一貫してゐる。斯かる發狂に關する未開民族の解釋は誤つてゐるとしても、報告される所によれば、實際に於て未開人は敵と衝突した時に、狂暴性と飽くなき渇血性とを帶び、敵に對すると同樣に、味方の者に對しても危害を及ぼして來ることは事實である。これに就いて、フレーザーは精神病學的研究を要求してゐるが、それが果してその對象となり得るかどうかは疑問である。斯學はたゞ現代人の血に對する狂氣の動機に就いて研究を進める事は可能であらうが、血の狂氣そのものは寧ろ人間に本然な原始的なものであるから、無意識心理學によつて闡明されなければならない。

血に狂ふ心理

そこで吾々は今や血に狂ふ心理の觀察に入る。それには吾々は、狂氣の客體としての血そのものと、主體としての心理とに分けて考へる必要がある。血の狂氣は血そのものに依つてのみ起るものではなく、又精神が他の種々な條件を伴はずして陷るものでもない。狂氣を誘發すべき心理的條件が具備されてゐる時に血の刺戟が結合して、獨特の『血に狂ふ』狀態が現はれて來るのである。

血が如何にして、人間又は動物の心理に狂熱的な興奮を起させるか。卽ち血の如何なる要素が狂氣を刺戟するか。これに就いて二つの見方がある。（一）は理化學的刺戟が、血の中に存在して、これによつて狂氣が誘發されるとみるもの、（二）は血を吾々の感覺的對象として、之れを受け容れることによつて興奮を起すとなす感覺的刺戟の說である。第一の理化學的刺戟とは、血液の持つ有效成分が純粹の外的刺戟として、精神に興奮を與へると考へるものであるが、血液そのものに果して刺戟を放射する能力が存在するか何うかといふ事に就いて考へる必要がある。併しこれについては今の所、證明を與へられるべき科學的根據は無い。血液そのものゝ研究は、それは單なる物質に過ぎなく、外的刺戟として間接に身體に影響を及ぼす力の存在は認められる。それ故吾々は、血液が精神に影響を及ぼすのは、主觀的に心的刺戟として感覺から攝取した結果であると認めざるを得ない。狂氣の客體たる血と、主體たる心理

が結合しなくては、血に狂ふ狀態が現はれないとする以上は、その關係は相互的である。それ故純粹なる外的刺戟としての血液の力は考へられない。而して狂氣の客體と主體とが狂氣の發生に於て相互的であると云つたが、それも感覺の上に於てのことであることを忘れてはならぬ。で、こゝに第二の感覺的刺戟として血の作用を見る。感覺的刺戟とは、血液の感覺的要素が五官に取入れられて精神に興奮を起すもので、感覺は視・聽・嗅・味・觸の五つで、外界の刺戟はこの五官を通じて精神に影響を及ぼす。この五つの感覺の中で何れが血の狂氣を惹起させるか、或はこの五覺が全部綜合して影響を與へるのであるかといふことに就いて見なければならぬ。

血と聽覺は全く干渉の無いものである。盲人同志の喧嘩で「血が出た」といふ言葉から狂氣的な行動をとることがあるとしても、それは直接的な刺戟でなく、聯想によるものである。

嗅覺とか味覺は血の腥さを受け入れるが、之れが狂氣の原因になるとは考へられぬ。血の化學的成分が味覺とか嗅覺を刺戟して、狂氣を起させる場合は殆んど無い。却つて未開人の習慣は血を舐めたり、啜つたりする事に依つて狂氣を鎭めるとされてゐるし、又下ニガア族の或る部落では、血の色と匂ひとが狂氣の原因となると考へてゐるが[註七]、それは單なる信仰であり、又は聯想からの說明である。事實に於て、血の味とか臭ひの感覺が無くしてもこの狂氣は起り得るのである。

次に觸覺は、血に對する感じとしては相當の役割を持つが、狂氣への刺戟を受入れる感覺ではない。血に觸れて回避的な、氣味惡さの感情は起るが、その爲めに狂氣の興奮を惹起することは無い。

そこで最後に殘されたのは視覺である。視覺の興奮性については始めから豫想はしてゐたが、今迄他の感覺を見て來たのは、視覺以外の感覺にも、狂氣の原因となるものがあるか何うかを檢討する爲めであつた。その結果、視覺以外の感覺は、直接血の狂氣の原因とはならぬといふ結論を得た。『血を見て狂ふ』と云ふ言葉が明かに、血の狂氣に於ける視覺の重要性を示してゐる。そして視覺の對象として血は赤色である。

血の赤色が狂氣に於ける一の原因を爲すことは、赤色が人間又は動物に感情の興奮を起させるといふ事を見れば思

ひ半ばに過ぐるものがある。最近赤い色が必ずしも感情を昂進せしめるものではないといふ異説があつた。闘牛に用ひる赤布を白布に代えて實施してみた結果、赤い色が感情の興奮を齎らすのでなく、白布を以てしてもこれを動搖させる事によつて牛を怒らせ得ると發表した學者があつたが——その詳細な實驗經過はまだ判然とせぬが——、この實驗のみで果して赤の興奮價値を覆へす事が出來るものであるか何うかは疑はしい。この實驗者達は何れ程赤の興奮性を否定する所の、嚴密な用意を以て實驗に臨んだか、嚴密な實驗に不可缺な要件として、白布と赤布を用ひた場合の被驗物の感情の動きとか、持續時間等を計量する準備を忘れてはならぬし、實驗の日時とか天候とか、被驗物の身心の狀態についての一律性を閑却してはならぬ。そしてその實驗が普遍妥當性を持つものでなくては確實ではない。果して斯かる用意の下に行はれた實驗の結果が何うか。それは兎も角として、實際生活に於て、赤の感情興奮性は幾多の方面に應用されてゐて、これを否定する事實が經驗的に提出されてゐない。吾々が最も手近に見られるのは火である。火の燃える際に起る興奮は誰にも經驗があるであらう。そして火の興奮性は、その動搖性にあるといふ人に、それでは煙の動搖は火よりも盛で大きいのに何故火程感情をそゝらぬか、といふ事を反問すればよい。火の興奮性は明かにその赤と關係がある。更に太陽に就いても、この證明を持つて來る事が出來る。昔は太陽と火とを同一視してゐ、准南子天文訓には「火氣之精者爲日」とある如く、兩者は同一であつた。で、太陽は天上の火であるが故に、希臘神話のプロメシウスの物語が出來、オヂエブウエー印度人の習慣が生じたのである。結局、火が感情の昂揚を齎らすと共に太陽も同樣であり、その同一化は、熱の點からも云ひ得るが、赤い色に依つて多く爲されたのである。そして赤が哲學的に解釋せられて、「赤き血」として誠心を象徴化し、忠誠の人々を「赤子」といふ、「赤き血」は血液魂の思想から來たといふのも一つの解釋ではあらうが、私は我國の古代の靈魂思想から推して、寧ろ火を以て靈魂の本體としたといふ立場を採つて解釋し度い。何となれば、我國の靈魂は「たましひ」と古く云ひ、之れは倭訓栞に隨へば「……玉火の義、しは助語也、古語に靈は火也と觀えたり、云々」。とあり、平田篤胤翁の「靈の眞柱」には、人間の生存に就いて論じ、血魂の說明として、「これにつけて案ふに、タマシヒは玉奇火（たまあやしび）といふこ

れなるか」と云つてゐる如く、靈と火、及び日は同一の系統に屬して、同じ言葉で呼んでゐるのを見ても明らかである。これ故に靈魂を赤いものとし、「赤き血」を以て、自分の眞の魂を示す辭としたのであらう。赤い色が斯くして、吾々の感情を興奮させる過程に就いてみるべきであるが、これは今の所完全な說明が與へられてゐない。心理學的の說明は可成り難かしいことであるし、又この說明なくしても、こゝでは赤の興奮性といふ事實の證明さへあればよいのである。

次に血の狂氣の主體に就いて、卽ち狂氣そのものについてみやう。血の狂氣の特質として吾々は、(一)抑壓感情の爆發、それに伴つて(二)鬪爭本能の解放、及び(三)捨身の感情、を擧げる。この三つが錯綜して、血の狂氣が起るのである。第一の抑壓感情の爆發とは、抑々人間の生活が抑壓の連續であるといふ事は、常識的にも旣に一般に云はれてゐる事である。人間の心的葛藤の最も根本的のものは、自我と超自我の軋轢であり、超自我は自我の中に社會的規範性を植えつけやうとするし、自我はエスの本能的傾向に支配されてゐる。こゝに自我の上の葛藤は、所謂良心と本能との爭ひとなる。そして理性は本能を非社會的のものとして了ふ。併し人間の本能は生命と伴つてあるものであるから、假令一時、理性の强い抑壓力によつて、意識の奥深く、無意識圈內に押し籠められてしまはうとも、不斷の努力は、常にこの抑壓から脫れやうともがいてゐる。文化の高い程本能の抑壓される事は强く、抑壓が强くなる程、文明の不安は深くなる。吾々は文化人の中に多くの神經症者を見、又屢々ジーキルとハイド型の道德人を見る。然るに精神の軋轢の解決と抑壓とに失敗すると、その結果として精神錯亂を惹き起こす。血に於ける狂氣は、血の興奮性によつて、生活の平衡——精神葛藤の漸定的解決——が亂される爲めに生ずる一時的の精神錯亂である。そしてこの精神錯亂に於て誘發される感情は、最も强く抑壓されてゐたところの本能とそれに伴ふ心情である。そして血の狂氣に誘發される心情は、渴血性の行動を伴つて最も强く現はれて來る。こゝに『血が血を呼ぶ』といふ言葉の意味が明らかにされるのである。

渴血性は、言ひ換えれば鬪爭本能である。戰場の場合に於ても、犯罪の場合にも必づ殺傷が伴ふ、又觀賞の狂氣に

於ても玩弄形式のものは勿論、視覺形式の場合にも、殺傷を見る時の精神狀態は、自分が明らかに殺傷する演技中の人物になり切つてゐる。これは演劇等此觀客に見られる同一化の形式である。そして鬪爭は生物の個體保存、及び種族保存を通じての原始的、基本的の本能である。元來鬪爭本能は、文化に對しては非常な寄與を爲したに反して、文化的敎養は、これを野蠻な行動として斥けやうとして、永い間かゝつて之れと鬪つて來た。そして何うやらこの本能を意識の奥深くに抑壓してしまつた。併し抑壓された本能は、その儘おとなしく收まつてしまつたのではない、絶えざる反抗を文化に對して向けてゐる。これに對して超自我の監視は極めて嚴重である。それにも拘はらず、本能的傾向は時々人間の敎養を、不意の形相を以て脅やかす。超自我の監視には起伏があり、意識と伴つて斷續するのであるから、完全な抑壓は實際に於ては不可能である。環境とか、强い情緒は、抑壓された本能の開發に役立つ。それ故、戰場の雰圍氣と劇場の空氣は戰鬪と觀賞の狂氣を釀し出し、强い情緒とサディスティック性向は犯罪的の狂氣を釀し出す。

更に捨身の感情は、血に狂つた鬪爭本能の結果として起つて來る。鬪爭本能は始めは純一に相手を殺傷する形として現はれて來るサディズムの傾向である。普通謂はれてゐるサディズムの傾向には性的の色彩が加味されてゐるが、ここでは明らかには出てゐない。併し精神分析學的に觀て、本能的傾向は快感原則の現實原理（超自我の規律性）に對する反逆であり、エリスに依れば鬪爭は原始的人類及動物の求愛の極めて精髓的要素、否確かに最も屢々現はれる附隨物である。それ故鬪爭に伴ふ、殘忍と生き血は明かに性的である。このサディスティックな殺傷が、漸く進むに從つて意識の溷濁を來し、それが必然的に性的な自己陶醉と結合して、マゾヒスティックな捨身の行動となつて行く。併し實際に於て血の狂氣には、サディズムとマゾヒスムスが個々に現はれるのでは無く鬪爭本能と捨身の感情が一聯となつて、サド・マゾヒスティックな行動として現はれて來るのである。このサド・マゾヒスティックの傾向は一般的なものであつて、純粹にサディスティックな、又マゾヒスティックな者は存在しない。サディストは反面マゾヒスムスの傾向を有し、マゾヒストは亦サディズムスの傾向に裏づけられてゐる。エリスは、この二つのものは同一

人に於ける二方面の顯現であるとしてゐる。このサド・マゾヒズムの傾向を、普通アルゴラニア[註九]といふ術語を以て呼び、サディスティックな方面を能動的アルゴラニア、マゾヒスティックの方面を受動的アルゴラニアと呼び、この外に觀念的アルゴラニアといふ、單に苦痛を與へ、若くは受けることを想起する自己暗示的な想像によつて性的滿足を得る倒錯を加へて三つにしたのである。今、このサド・マゾヒスティックな現象を、血の狂氣の各々についてみやう。

視覺型に依る觀賞の心理は、最も顯著なこの現はれである。卽ち觀衆は演技者に對して同一化を行つてゐるのである。觀衆は演技者の一人々々になり切つてゐる。假令、最負的な偏見を以てゐるとしても、他の一方に關心を持たぬことは無い。勝負は立役者が二人無くては成立し無い。そこに劇等との相異がある。そして觀衆は、勝負に於て力の投射（プロヂエクト）を兩者の間に行ふ、その結果勝利に對して滿足感が湧き、敗退に對して憐憫が生ずる。又、勝負に拘らず、一般に流血に對しては愉悅と同情が起るのである。この二つの感情は相反したもので、それが同一人に於いて兩立して現はれて來るのである。

玩弄型の觀賞の狂氣は、これは確かに犯罪的傾向であるが、こゝに擧げた犯罪の狂氣とは趣きを異にする故、又この玩弄性はその心理が觀賞的である爲めに、特に觀賞の狂氣の中に入れたのである。偖て、こゝでは殺傷する主體と、之れを觀賞する主體との二重の自我が一人の中に見られる。そこに視覺型と一致する所がある。視覺型は演技者の上に自我の同一化を爲すに對して、玩弄型は自我の上に對象（演技者）の同一化を行つてゐる。卽ち前者は感情移入であり、後者は感情受容である。卽ち雙方共に同一化が行はれてゐる。それ故、玩弄型の流血に依つて引出される興奮も視覺型と同一と視る事が出來る。觀賞する自我、觀賞される自我の對立は、視覺型、玩弄型を通じて同じである。

戰場の狂氣に於いて、戰士の行動は純粹にサディスティックに爲される。彼等は勝つといふ事を確信して、負けるといふ事は考へない。負けるといふ觀念は戰鬪心の消滅である。楠公の最後の戰ひに於てさへ、戰略的には勝算が無

いとしても、勤王の氣魄は既に敵を呑んでゐた。そこに七生七戰の言葉が生れて來たのである。こゝには最早負けるといふ考へが毛頭もなく、唯討賊勝算の氣魄があるのみである。戰ひに於ける勇士の心は、殺す事を知つて殺される事は豫想しない。今迄鬱勃として閉ぢ込められてゐた鬪爭本能が戰場では公然と自由に驅馳して、その能動性、加虐性を發揮する。そして抑壓されてゐた感情を敵に向つて吐きかけるのである。斯くして戰場の狂氣は飽く迄能動的であるが、それだけ戰鬪後の被加虐性（マゾヒスムス）は、拂淨の儀式として、殺傷の償ひが嚴格に要求される。凱旋して來た勇士達に課された古代の禁制は、禁慾、隔離等である、更に極端のものになると一般的殺人と同樣である。一般的の殺人に對して行はれる拂淨は、例へば

「北亞米利加のオマハ・インディアン間に於て、その犧牲者の親族の者から命を赦された殺人者は、二年乃至四年に亘る、或種の嚴格な規則を守らなければならない。彼は素足で歩かなければならず、暖かい食物を攝る事も許されず、壁を立てることも、邊りを見廻す事も許されない。如何に暑い時でも、彼はしつかりと衣服を身に着け、首の所でそれを締めてゐなければならない[註十]」で

といふ樣な戒律は、彼等未開人の奔放な行動を束縛して、牢獄に繋がれてゐる樣な苦しさを味はせる。又、

「オレゴン及びワシントンのチヌーク・インディアンの間に於て、人が殺された時には、守護神を有する老人が、殺人者に對する施術を依賴される。老人は石灰を脂肪と混ぜ合せ、それを殺人者の顏に塗布する。彼は杉葉で作つた鉢卷を殺人者に與へ、尙ほ杉葉をその踵・膝・腕などに卷きつける。五日間といふもの、殺人者は水を飮まされない。彼は眠る事も、横になつて休む事も許されない。常に立つてゐなければならないのである。夜になると彼はその邊を歩き廻り、骨で作つた笛を吹き鳴らす。彼は休みなく、「アー・アー」と言つてゐなければならない[註十一]」。

戰場に於て行はれた殺傷は、その公然性の爲めに罪惡では無い筈である。然るにそれをしも亡魂の名の下に、やかましい清めの戒律によつて贖罪を要求する。聽てこの戒律を終る事に依つて、凱旋の勇士として盛なる賞讃が待ち受けてゐる。戰士の辿る途は、殺傷、戒律（苦）、賞讃（樂）である。そして殺傷の中にはその行動はサディスティッ

クであるけれ共、感情の中には、渇血性と捨身といふ二つのものが融合してゐる。更に精神分析學的に、この戰爭の心理を見ればよいが、茲には省略する。

犯罪の場合も、戰場と同樣な心的機構が見られる。唯犯罪は戰爭と動機が異る爲めにその形式は、殺傷、罪惡(苦)受刑(滿足)である。殺傷の場合に匿れてゐた超自我の社會的規範性は、その行爲に就いて裁斷を下すのである。超自我の批判は嚴正で假借する所が無い。そして懲罰は必然的にその行爲に價するだけを課する。罪惡は良心の苛責である、これが懲罰を得る事によつて、自己の行爲の贖ひが爲される。こゝでは犯した行爲に對して等價の行爲が酬いられる。明らかに同一人の上にサディズムスとマゾヒズムスが現はれてゐるのである。

結び

以上の論を要約すると、「血に狂ふ心理」は、動物の或るものと、人間一般とに共通なものである。それが非社會的な要素を多分に有する爲めに、文化の進むに從つて、教養が之れを意識の深層に抑壓してしまつたのである。所が、抑壓は種々の機會に破れる。血の狂氣も、教養の痲痺と環境の誘發とによつて行動の上に現はれて來る。そして一般的に最も多くあらはれるのは、戰場と、犯罪と、觀賞の狂氣である。こゝは抑壓された本能の一時的の休息所ではあるが、血に誘發された感情は、豫想外の激情を以て——今迄意識下に抑壓されて鬱勃としてゐた感情が一時に——人間の行動を占有して了つたのである。血は一般に性慾的な興奮を起させる。それ故、血の狂氣には必づ苦痛と快感とが伴ふ——サド・マゾヒスティックに又觀念的に——苦痛と快感は、エリスに依れば性的感情に本質的なものである。血の狂氣に於ても、苦痛と快感とが存してゐることを吾々は看取して來た。

文明が進むに從つて人間の教養は洗練されて行く筈である。事實、教養は整へられて來た。併しその反面に神經病者や、性格破綻者や、二重人格者の簇出するのは何故であらうか。戰場の狂氣、犯罪の狂氣、及び觀賞の狂氣は現代人の生活に如何なる役割を演じてゐるか、これ等に就いてもまだ論議の餘地はある。唯今は、血の狂氣の心理に就い

て見るだけに留める。

註一、シェークスピア「マクベス」中の一句（坪内博士譯本一〇一頁）

二、J. G. Frazer, "Psyche's Task——A Discourse Concerning the Influence of Superstition on the Growth of Institution 永橋卓介譯「社會制度の發生と原始的信仰」

三、Lieut-Colonel J. Shakespeare : The Kuki-Lushai clans, Journal of the Royal Anthropological Institute XXXIX. (1909) p. 380 ; id., The Lushei Kuki Clans (London, 1912), pp. 78sq

四、J. H. West Sheane : "Wemba Warpaths," Journal of the African Society. No. 41 (October, 1911) pp. 31sq.

五、N. Adriani ca Alb. C. Kruijt : De Bareé-sprekende Toradja's van Midden-Celebes, i (Batavia, 1912) p. 239 参照

六、H. A. Junod : The Life of a South African Tribe, ii. 569.

七、Major A. G. Leonard : The Lower Nigar and its Tribes (London, 1906) pp. 180 181sq 参照

八、オヂュブウェー印度人が、日蝕の時、太陽に向つて火の矢を放つて、これに點穴すると、太陽も明るくなると考へて、行ふ習慣がある。

九、Algolanie, 苦痛を與へ（能働）、又は苦痛を受ける（受働）ことに依つて性的に充實すること。

十、Rev. J. Owen Dorsey : "Omaha Sociology," Thard Annal Report of Bureau of Ethnology (Washington, 1884), p. 369.

十一、Franz Boas : Chinook Texts (Washington, 1894), p. 258.

戰爭神經症とその治療

高水力太郎

世界戰爭の特殊な現象として歐洲諸國の兵士の間に戰爭神經症なるものが多數に勃發して神經學者間の問題となると共に、精神分析學はこれを治療することに依つて、その實力を示す機會を得たことは多くの人々の知るところである。併し、私の考へるところでは、戰爭神經症なるものは往年の世界大戰にのみ特殊な現象ではなく、何時何處の如何なる戰爭に於いても、必ず多少は發現したものに相違ない。現に東洋の某國の戰爭に於いても、幾多の類似の現象が（その大部分は發表せられないが）見られたと云ふことである。

次に私は戰爭神經症に就いて、精神分析學者——特にベルリンの分析學者カール・アーブラハム K. Abraham が一九一八年、九月ブダペストに於いて催された第五回國際精神分析學會に於いて述べた——意見を紹介するであらう。

×

戰時中、官學的神經學者たちは、外傷的神經症の病源を、漸時に心理的見地から見るやうになつた。併し彼等が精神分析的見地から見るやうになつたとは云へ、なほ二つの點に於いて彼等の見地と分析學的見地とは違つてゐた。——即ち、第一に彼等は大抵は、外傷に對する自我衝動のみを眼中においたこと。（無意識衝動を無視したこと。）第二に、彼等は神經症の外的表現のみに拘泥したこと。

平時に於いて、精神分析學が神經症の原因を性にあると論ずると、きまつて舊來の神經學者たちから反駁せられた、

外傷神經症はさうは云へまいと。それと同樣の意見が、戰爭神經症に就いても述べられた。卽ち、戰時の恐怖的外傷に因る神經症がまさか性に原因するとは云へまいと。再度危險な境遇に置かれることの不安、恐怖、年金の欲しいこと、その他それに類したことどもが、この神經症の原因と見做されてゐる。戰時に於いて神經症者が群をなして發生したが、それ等に於いて性的契機が重要な意義を帶びてゐないことは明かであると信ぜられてゐる。

平時に於いてアーブラハムは外傷神經症を調査して見て、他の神經症に於けると同樣、外傷神經症にも性の重要さを認めてはゐたが、まだそれを結論として學界に問ふほどに多數の實例に接してゐなかつたので控へてゐたと云ふ。平時に於ける性的外傷神經症の一例としてアーブラハムは一少女患者の場合を擧げてゐる。彼女は或る色情的な葛藤に苦悶してゐる時に、一寸した電車の出來事に遭遇した。分析して見たところ、その事件が或る程度まで神經症勃發の口實を供してゐることが分つた。症候は問題の葛藤と聯關があつた。外傷の重要さは全然背後に匿れて了つてゐた。その他アーブラハムが扱つた外傷神經症の多くは不能症を惱んでゐたと云ふ。それ等の病氣は何等かの外的傷害を契機として生じたやうに見えるが、その眞の遠因は無意識の性的抵抗に存すると思はれた。

ところが戰爭神經症を調べて見ると、右のアーブラハムの觀察に依つて得た結論と全く一致するものがあつた。それのみならず、戰爭神經症に於いて確實に出て來る症候の或るものは（これ等は平時の外傷性神經症に常々見られたばかりでなく、非外傷性神經症にも見られた）、相當注目に價するものゝ如くに思はれた。と云ふのは、戰時中に見られる症候の複合である。卽ち戰慄、亢奮、焦燥、頭痛、不眠、不安、鬱憂、不能感などの複合した症候である。さう云ふ症候を持てる神經症の二種の型としては、不能の男子と冷感の女子とである。外的現象に於いてそれほど類似が顯著である以上は、內的現象に於いても類似が著しいのであらうと察せざるを得なくなる。外傷が多くの人々の性感に働きかけるのは如何なる意味に於いてかと云ふに、それはその人のリビドーが退行的に變化して行き漸次にナルチスティッシェになつて行くと云ふ意味である。この點に於いてアーブラハムとその師フレェンチーとは全く同じ意見に、偶然ながら一致したとアーブラハムは云つてゐる。併し外傷のためにかう云ふ結果を示したのは、戰爭に從事

した者等の内の一部分であつて、それに依つて見ると個人の特性と云ふことを考慮の内に入れざるを得なくなる。併し我々は從來の神經學者たちよりはこの問題をもつと正確に定義しなければならない。まづ一對の實例に就いて考察して見よう。

戰爭勃發當時に、或る兵士が戰場で傷ついた。それは一九一四年八月十二日の事であつた。彼の傷が完全に癒る前に、彼はひそかに病院を退出して再び戰場に出た。さうして間もなく第二の毀我をし、また數ケ月の後には第三回目の毀我をした。またしても戰場へ出たが、或る日彼は砲彈の破片に打たれて二日の間無意識であつた。これ等四つの外傷の後に、彼は嘗にそれだけの心的打擊を受けたらしい現象を示したが、併し神經症的な容子は一向に示さなかつた。特別に不安らしくもないし、亢奮もしないし、鬱憂でもない。今一人の男は戰場に於いて夜襲の時に穴に陷つたが、別に毀我はしなかつた。併し直ぐに猛烈な神經性の戰慄が襲ふて來た。さうして精神錯亂の狀態を示した。兩者に於いて、どうしてかうした差異が生ずるのであらうか。

一方が重大な外傷を受けてゐるのに大體に於いて健康であり、他方は一寸した出來事のためにこのやうに激しい神經症を示すと云ふはどうしたわけか。これは當人達の過去の歷史を調べ、またその心理を分析して見ると、判明して來る。ところがこゝにきまつて見られる現象は、戰爭神經症者たちは、彼等が戰場で外傷を受ける以前に、既にとかく何かにつけて——殊に性方面で——ヘタをやり易い人間であると云ふことである。彼等の多くは實際生活に於いて自分の役割を果すことの出來ないものが多い。またそれが出來た者でも、あまり積極的な、自發的な力を示すことは少なかつた。彼等の總てに於いて性的活動は低減し、その性慾力（リビドー）は定着のために妨げられてゐた。彼等の多くは戰前に於いて性慾力が弱いか、或は何かの條件の下に於いてのみやうやく力を示すことが出來た。彼等の女性に對する態度は、ナルチスムスの發展段階に於ける性慾力の部分的定着のために、多少とも障害せられてゐた。彼等の性的及び社會的の機能力は、彼等のナルチスムスに多少の讓歩をなすことに依つてのみ發揮せられた。

戰時に於いてこれ等の人々は全然違つた條件の下に置かれ、また異常な要求に直面した。彼等は集團のために自己

を無條件的に犧牲にしなければならない立場に不斷に置かれてあつた。これはつまり一切のナルチスティッシュな特權の放棄を意味してゐた。健康人ならば自分のナルチスムスをそのやうに完全に抑へつけておくことは出來るのである。彼はリビドーの轉嫁タイプに從つて人を愛することが出來るので、全體のために自我を犧牲にすることも不可能でない。神經症的傾向のある人は、その點に於いて健康者のやうな具合には行かない。

このやうな人々は戰地に於いては、單に危險な立場に身を置くと云ふ受動的行動に堪えなければならないばかりでなく、またこれまで思ひも寄らなかつた第二の勤めをも果さねばならない。第二の勤めとは、つまり、兵士が戰場に於いては何人でも人を殺すだけの用意をしてゐなければならないと云ふことである。死ぬ覺悟と共に殺す覺悟をもしてゐなければならないのだ。

神經症的傾向ある人間の弱い性慾力の上に働く今一つの要素は、彼等が男子ばかりと接觸しなければならないことである。正常人の性感ならばそのために何の支障も受けないが、ナルチスス的傾向の强い人に於いては、これが支障となる。同性愛とナルチスムスとの關係は我々によく分つてゐるのであるから、右の事情はこれを解するに我々は困難でない。

さう云ふ條件の下に於いては、從前婦人に對して弱かつた態度は、漸く變つて來る。もし異性に對する態度の弱さが非常に甚だしいと、そのやうな人々に於いて神經症の勃發するためには戰爭的外傷を必ずしも要しないのだ。現にアーブラハムの觀察した或る男は、賜暇を得て家鄕に歸つてから痙攣的發作を起し、不安と鬱憂の徵候を示したので病院へ入れられた。彼は平生から女性的な性格者として知られてゐた。さうして、結婚生活に於いてはやゝ不能に近く、從つていつも嫉妬深かつた。彼が賜暇を得て歸家した時には、彼は妻君との性關係に於いて絕對的に駄目となつた。で、彼の妻君が彼に不義を働くであらうことの不安が昂じ、彼は家を離れ入院してから痙攣發作を持つやうになつた。

そのやうに異性愛的衝動の弱い人々は、その性慾のために一つの支持を必要とする。彼等は屢々その細君（彼等の

リビドーが完全に纏綿せられてゐる細君）に於いてその支持を發見する。或は彼等は自分の性的無力感から自分自身を防禦するために、賣笑婦のところへ行けば自分は無力ではないんだと自分で自分を納得せしめる。であるから彼等は戰時に於いては、自分の動搖する能動力のために不斷に支持を必要とするのだ。彼等は軍隊に於いては屢々重寶な人となり、自分の能動力を戰友の活動の上に支持してゐる。一寸境遇が變り、變つた出來事に遭遇すると、かう云ふ人々に於いては、忽ち平均は破れて以前の弱い能動力は全然受動力となつて了ふ。そこでその受動的傾向は、自我衝動の方面に現れるばかりでなく、また同樣に性的衝動の方面にも現れる。ナルチスムスは勃發する。リビドー轉嫁の能力は消却すると共に、社會や團體のために自己を犧牲にする力も喪失せられる。それどころか、この患者は今や他人から却つて世話をして貰はなくてはならないやうになる。典型的にナルチスティッシュな遣り方で、自分の生命と健康とを不斷に案じる者となるのである。種々な症候の頑强な厚かましい現れ方も全くナルチスティッシュである。大抵の患者はその病苦への屈服の仕方に於いても、全然受動的である。その症候に於いて彼等はその神經症が勃發した境遇での經驗を新たにし、他の人々の同情を求めてゐるのである。

こゝまで考へて來ると、我々は以前に云つたことにも一度考へを向けなければならない。卽ち戰爭神經症患者に於いては、殺すことの不安は殺されることの不安とその意義が同じであると云ふことである。或る部分の症候はたゞこの意味に於いてのみ理解される。或る戰爭神經症患者は戰爭の六年前に嘗て或る神經症に罹つたが、それが戰爭中に再發した。この患者の場合は殊に意味深長で、我々の參考になる。その戰前六年の神經症と云ふのは、その本人が或る日夢を見、その夢の中で人を殺したが、その夢を見てから、腕が慄えるやうになつたのだ。ところが、戰場に於いて白兵戰を演ずるやうになつて、その症候が再發した。ヒステリー的の痙攣發作は、危險な立場や恐怖などのために生ずるばかりでなく、また彼が他に加へんとして加へ得なかつた攻擊的行動がそれ等の發作の內に表現せられることが屢々だ。さう云ふ發作にはまた本人が目上の者と交してゐる言葉が伴ふことが稀でない。活動への衝動が禁壓されてゐるので、それがさう云ふ言葉となつて表れ出るのだ。

大抵の戰爭神經症患者が全然不能であつたり、甚だしく憂鬱であつたり、死の事を考へてばかり居たりすることは何故かと云ふ今一つの說明は、外傷の特殊性から與へられる。多くの神經症的性向者は、外傷のために發病するまでは、彼等のナルチスムスに關係した一つの幻想——自分だけは死なない、殺されないと云ふ信念——に依つて自分を支持して來たのだ。ところが自分が彈に當つて毀我をすると云ふやうなことがあると、この幻想と信念とは忽ち破られてしまふ。獨尊的安全感（ナルチスティッシュ）は無力感と交替し、かくて神經症が勃發する。

如何なる程度まで彼等患者の心理の幼兒性への退行はなされるかと云ふことは、文獻中に示されてゐる種々の場合を見れば分る。アーブラハムの取扱つた或る患者は以前から神經症的であつたが、鑛山の爆發に依つて幼兒性への退行を示した。永い間、彼は恐怖に襲はれた幼兒の如く振舞つた。幾週もの間、彼は何を訊かれてもたゞ『鑛山、破れる』と云ふだけであつた。だから、彼は二歲位の幼兒の物の云ひ方に退行したわけである。

本論の始めに述べた事に對して一見例外と見えることは、次の誠に著しい一實例である。卽ち、以前には健康で、性的にも完全に可能であつた青年が戰場に於いて一時的に激烈な步行困難症に罹り、その上非常に感情が亢奮するやうになつた。砲彈の爆破のために彼は塹壕の內壁に下背部をしたゝか打ちつけた。で、彼は外傷を受け、種々な神經醫者たちに「外傷的ヒステリー」患者として處置されてゐた。患者の記憶に依ると、外傷を受けた直後に於いては、彼は尿と大便とを保留することが出來なかつた。けれども彼は自分の職務の位置を守つてゐた。何となれば彼はその狀態を恐怖の結果であると考へてゐたからである。これ等の症候はその後二三週間の內に漸次に癒えて行つた。然るにその期間中に、彼は自分の性感がすつかり消失したことを氣付いた。始めの內はこの事をあまり重大視しなかつたのである。まさか自分の體力が衰へ不能になつたなどゝは考へられなかつたからである。暇暇を得て歸鄕してゐる間に、この性的不感はなか〳〵根強いものであることを認めざるを得なくなつた。今や神經症は、爆破の心理的印象の結果としてゞなく、外傷に起源を持つ身體的不能への反應として現れた。序ながら云ふが、この神經症は、患者の心が上機嫌で、時としては躁狂的でさへある點に於いて、普通の外傷神經症とは異つてゐる。

この相違は何に基くか、これは特に調べてよく説明を與へなければならない。また肉體に激しい毀我を受けた他の人々もそのやうな心的態度を示して、分析學者たちを驚かせる。例へば、負傷兵の四肢を切斷する病院に於いては、常に非常に陽氣な空氣が漲つてゐる。戰爭の始めに於いてアーブラハムは重傷者の上機嫌狀態を或る出來事に依つて注意するやうになつた。彼は普通病院に於いて四人の兵士を處置しなければならなかつたが、それ等四人は同一砲彈の破裂のために各々その眼に重傷を負ふたのであつた。四人とも既に他の病院に於いて眼球を抉出されてゐた。彼等は少しも消氣てはゐなくて、如何にも呑氣さうに朗かな氣分であつた。彼等は同時に義眼を供給せられたが、その時の場景こそは注意すべきものがあつた。彼等はまるで子供のやうに欣喜雀躍するのであつた。そこにはまた疑ふまでもなく、ナルチスムスへの進行があつた。併しその退行はもつと部分的な性質の退行であつた。彼等患者は眼を抉り出されることに依つて非常に自分の價値が(殊に女性の眼から見ての價値が)低下したことを承知してはゐるのだが、この承知してゐることを彼等は抑壓してゐた。外部から愛を得べき見込がなくなつたので、彼等は自愛を以てそれを補つてゐるのである。肉體の傷いた部分が彼等にとつて色情的帶域としての意義を——以前にはそこにはなかつた意義を——帶びることになつたのである。身體の切りとられた部分がまだそこにあるとの幻覺を彼等は持つが、このことはやはり同樣な原因から說明がつくであらう。

總てこれ等の經驗に徵すると、戰爭神經症は性慾問題を考慮に入れずしては考へられないと云ふ點に於いて一致するやうである。この見解は戰爭中に觀察せられる心的障害に依つて愈々確實なものとなつて來る。この心的障害は一般の心的障害と同樣に、神經症よりももつと容易にその匿れたる觀念內容を呈露する。戰場に於いて勃發した心的障害は——他の觀察者も既に確認してゐる如く——幻想の構成には、たゞ僅かな部分にのみ關係してゐるに過ぎない。併しもしそこに幻想があれば、その幻想には性的內容が顯在してゐるのである。アーブラハムの診た種々の患者に於いては、幻覺は或る部分娛妬のそれであつたり、戰友からの同性愛的追跡のそれであつたりした。アーブラハムはまたこれに關して或る兵士の妄想症類似の病氣の場合を擧げてゐる。この病氣は本人が長い間戰場に勤務してゐて後、

賜暇を得て歸鄉した時に勃發し、その妻に對して不能となつて了つた。そこに判然たる象徴的行爲が見え、またそれ以外の徴象も見えるので、この幻覺の根本的原因としては同性愛的要素が重大な意味を帶びてゐることが指示せられた。また或る別の男は睡眠中に戰友のために病院で性病を感染せられたと云ふ幻覺を持つた。この幻覺の原因は同性愛慾の抑壓の不完全にあることは明かである。

これに關してアーブラハムは今一つの著しい場合を擧げてゐる。卽ち、一九一五年に彼が野外外科病院に勤務してゐた時に、銃丸のためにペニスを傷けられた男が手術を受けてゐた。手術を行つたのは或る有名な外科醫であつたので、首尾よく行つた。ところが二年の後に彼はアーブラハムの野外精神病院にやつて來た。この男は以前には精神的には別に何の變調も示してゐなかつたのに、今度は妄想的な變調を明かに見せてゐた。診問して見ると、ペニスに怪我をしたゝめにそこが全然無感覺になつたと云ふのであつた。性器の男性機能がなくなると共に、精神症が現れると云ふことは兩者の間に密接な關係が存したのである。

戰場で傷ついた人々が扶助料欲しさに病氣に逃込むと云ふことも、神經症の徴候としての種々の事柄に關する只今の考へ方ではあまりよく說明がつかないのである。これは丁度神經症的徴候と同じで、リビドーの變化と關係があるのである。患者は不具にされた肉體や煩つてゐる神經の補償の爲に戰つてゐるやうに外見上見えるだけで、實は神經症者等は自分のリビドーに關する變化の起きてゐることを內的に認識してゐるのだが、そんなことは概して看過されてゐる。彼には非常な損傷を被つたと云ふ感じがしてゐるのだ。併し本人としてはそれは尤な話だ。何故ならば、彼はリビドーを外的對象へ轉嫁する能力を失つてゐるのだから、自分自身にリビードを蓄積し、自己を重要視するやうになつてゐるからである。戰前に或る事故のために怪我をした或る人が云つたさうである。さう云ふ怪我に對してはしか〳〵の補償で澤山だと思つて保險會社と契約したが、さて怪我をして見ると、これくらゐの額ではとても足りないと云ふ感じがしたと。保險金は客觀的にその人の生活を支持するに足るだけで、彼の主觀的の損失感を償ふには足りないのだ。以前には自己を謙虛にすることが出來たが、今は獨尊自愛的な貪慾が擡頭してゐるのだ。性器帶域はそ

の統裁力を喪失し、肛門性感が強くなつて來る。國家が年金を供給するので、愈々この肛門的性格は強調されて來ることは明かだ。

さて、これから治療——殊に精神分析的治療——の問題に就いて述べる。

戰爭の頭初に於いては、人々は戰爭神經症にはあまり注意を拂はず、別に治療は加へずに家鄕へ歸して自然治癒を待つことにしてゐた。併し神經症者が段々に殖えるので、かうはしてゐられないと云ふことになつた。昔ながらの急速療法が用ゐられ、次には積極的治法——殊にカウフマンの方法——が用ゐられた。これ等の療法は多數者を迅速に直すので、始めの程は一寸人々を瞞着したが、併しその療法は效果が永續きせず、それのみならず、そこに或る好ましからぬ現象が生じた。軍醫の有力者たちは、それ故に、あまりに『積極的』な方法を廢して、別の、あまり激しくない方法を求めることの興味を示した。

精神分析はこの必要に應ずることが出來るか？　理論的に云へば、精神分析こそは必要におあつらへ向きのものだと云ふことが出來る。何となれば、精神分析のみがあらゆる方法の中で唯一つ、源因にまで遡ることが出來るものだからである。分析者は既にそれを豪語出來るだけの經驗を積んでゐる。フェレンチーやジムメルやアーブラハムがそれを實驗したが、こゝではアーブラハムの治療經驗を紹介しておかう。彼等分析者たちは戰爭神經症者の處置に就いては極端に用心深くあらねばならなかつた。何となれば、戰前に於ける諸方の文獻や醫師會の講演に於いては、分析者の思想と努力とを甚だ明白に拒否してゐたからである。一九一六年にアーブラハムが戰爭神經症者や精神症者のための野外治療所を設立した時には、彼は一切の强制的治療法を廢し、同樣にまた催眠術やその他の暗示法をも廢し、患者をして覺醒狀態に於いてその無意識病根を解消せしめ、一種の單純な精神分析法に依つて彼等の苦惱の起源と本性とを知悉せしめたのである。アーブラハムは患者をして、彼等が理解せられてをり、完全に緩和せられてをり、且つ病氣が快くなつて行くと云ふ感じを與へることを目的とした。その後、この野外診療所は主として心的疾病のための純粹な觀察所となり、從つてアーブラハムは部分的に治療の經驗を蒐集することが出來るに過ぎなかつた。精神分

析の治療は永くかゝると云ふ批難があるが、アーブラハムの經驗ではそんなことはないと豪語してゐる。その後、カウフマン式の積極的、卽席的療法で治癒された患者は、一度醫師の感化から離れ、戰場の危險にさらされると、再びぶり返して來るのが屢々であつた。精神分析の治療がその效果に於いてもつと永久的であるかどうかは、時間がこれを證明するであらうとアーブラハムは云つてゐる。これに就いて非常に參考になるからとて、彼は自分の扱つた或る神經症者の場合を報告してゐる。彼は十二歲になる男兒の激しい恐怖症（空襲に關する）を數週間で取除くことが出來た。さうしてその治癒は少年が家へ歸つてからも持續し、空襲に曝されてゐても健康人と同じやうであつた。このやうな結果に徵して見ても、精神分析の治療結果は事實上永續きするものであり、現今の治療上の缺陷を補うに足るものであることは明かである。。精神分析は他の方法よりも戰爭神經症の機構を一層深刻に理解し得るものであるから、當然他の方法よりもその治療の效果をも擧げ得るものであらう。（完）

羅馬人ルイシアス・フラミニナスはゴール種征代の執政官であつたが、また同性愛者で、常に美少年を侍らせてゐた。その美少年は當時ローマに行はれた眞劍の擊劍會を連りに見たがつてゐたがなか〳〵その機會がなく、ルイシアスも殘念がつてゐた。或る時彼は美少年と歡喜の宴を張つてゐたところへ、ボイア族の酋長が尋ねて來て保護を乞ふたので、ルイシアスは好い獲物が飛込んだと、從者にこれを慘殺せしめてその末期の苦しみを美少年と共に觀賞したと云ふ。この野蕃なサデイズムと、そのサデイズムが性に關係あることゝ、また長崎氏の所謂「血の觀賞」の一例である點とを注意ありたし。（一記者）

精神分析思出の記

諸岡存

英國の性心理の大家、エリスが『時代科學叢書（コンテンポラリーサイエンス）』といふものを發行した。其第一冊に、ケッヂ氏の『性の進化』（一八八九年）といふ本を出し、自分自身も『男及び女』（一八九四年）といふ本を出して居た。其時分に例の、墺國維那のフロイドはヒステリーや、夢の研究をやつて居た。（一八九三―一九〇六年）そして比斯的里といふ病氣が、色情に深い關係がある事を主張し、後には「汎性說」（フロイドはこの名を承認しないが）と云はれるほどの愛慾說を主張するやうになつた。

併し何れにせよ、當時フロイドは佛國で、ジャネー一派の心理學を研究した上、シャルコーの催眠術の研究にも負ふ處があつたので、相當の根據がある事は、世間でも認めてゐたし、其上フロイドは既に醫學の方面に於いて小兒の神經病を研究してゐたもので、若い時は、顯微鏡的檢査もやつたし、フロイドの金の染色法等は今でも、組織學に殘つてゐる程である。

だから世間の學者も頭ごなしに否定する事はしなかつた。

處が人も知る如く、維那は謂はゞ色情學の發祥の地であつて、色情方面に關するものは、實に此所から出たものが澤山ある。特に有名なのは、クラフトエービングであつて、彼れは、維那大學精神神經病學の教授で最初に『色情精神經病學』といふ本を書いた。この本は精神病患者の、色情の變態を書いたもので、非常に世間を驚かしたものであ

る。日本等でも一度は飜譯された事もあるが、當局の方針で出版を禁止されるの止むなきに到つたやうである。

彼の生理學者で、『若返り法』の研究家スタイナッハ等も、亦維那出で、此所からはこの他多數性に關する科學者が出て來てゐる。此の雰圍氣中にフロイドは育ち、又佛蘭西のジャーネーだの、シャルコー等の影響を受けて、比斯的里の研究やら色情の研究やらをはじめたのである。其後、彼は『夢』の研究に進んで行つた。處が世間では未だ左程注意を拂はないうちに、夙に彼れの所說に目を附けたのが、英國のエリスで、彼は性の心理學者としての立場からして、これを世に紹介した。これによると、フロイドの說は左程無理でないやうに見えた。

自分の知る處では、フロイドの說を最初に英語社會に紹介した人は實に彼れエリスであつた。自分は長崎東山學院卒業（一九〇一年）後、東京上野圖書館通ひを約五年間續けた。此時分エリスの紹介論文を見て、是れは如何にも面白いと思つたので、當時高等師範教授であつた下田次郎先生の主幹された『女子教育』といふ雜誌にこれを紹介した。これが丁度明治三十五六年頃（一九〇二—三年）の事で日本に於ける最初の紹介であつたと思ふ。此時分は實に性の研究勃興時代でフロイドの『夢判斷』（一九〇〇年）、エリスの『性の心理』（第一册が一九〇二年）など出た時であつたのである。又當時自分は、米國古生植物學者で社會學者でもあるウォードの社會學原論などを讀み、其『女性中心說』を紹介したものである。

自分は又幼少の頃から、當時流行の催眠術に興味をもつて居たので、催眠術に關する本をよく讀んだものである。これと密接な關係のあるフロイドの『比斯的里の研究』は自分が未だ醫科大學に這入らぬ前から愛讀してゐた。其後計らずも、醫學を志望して、榊教授の教室に席を置くやうになつてからも、その方面には、特別に注意するやうになつた。

自分は學生時代から、榊教授とは特別なる私的關係からして、學術上の手傳をしてゐたので、教室内にある多數の文獻や、雜誌は其の當時から殆ど見盡してゐた。當時自由主義の榊教授は、新に完全なる精神病學のクリニックを福岡大學で開設される時とて、新しい歐米の學術を輸入するに努められた最中であつた。先生の眞の專門といふのは、

實に『教育病理學』であつて、先生は其研究を終生續けられたものである。『兒童の精神發達の研究』がそれである。

も一つ榊教授が精神病學界に於ける特種の地位は、海外留學中師事せられた先生が、當時大抵の日本留學生の師事したクレーペリン Kräpelin でなくしてチーヘン Ziehen であつた事から來て居る。チーヘンは、人も知る如く他の精神病學者とは違つて醫者であると同時に哲學者であり、又心理學者であつた。其關譯で榊教授の興味も、チーヘン系統といつてよく、純粹心理學及び哲學迄觸れてゐる。そして吾國に於て精神病學の講義中に普通心理學を輸入されたのは、實に九州大學に於ける先生の教室であつた。またヴントの『心理學概論（グルンドリス）』をさへ、思ひ切つて精神病學に輸入されたのである。

又チウリッヒのユングの聯想的診斷法には特に興味をもつて、兒童心理の發達の檢査法に始終用ひられたものである。此れはフロイドの精神分析學に對する間接の關係である。先生の教室の圖書室には、ユング、ブロイエル、フロイド等の論文、又ステーケルの雜誌や、單行本等多數備へ附けてあつた。當時九州大學の精神病學教室は文獻に於て最も豐富なりと評された程である。

精神病學の立場からしても、色情心理學は、極めて大切といふので、其の方面にも充分注意された。當時自分は榊教授に進言した事がある。『精神病醫が從來の如く、精神病の鑑定丈けで滿足するならば、いざ知らず、いやしくも醫學といふ意味では、治療に主きを置く可きである』と。先生は自分の此の進言を諒とせられて、今迄で精神病學界に顧みられなかつた『治療』といふ方面を開拓して行かれた。其の一つの方法として、フロイドの精神分析が輸入されたのである。

自分は、アメリカのアドルフ・マイヤーの主張するやうに、早發性痴呆迄も精神分析で治癒させる事の出來るものとの主張は出來ぬまでも、精神現象の研究に於て、將又或意味に於ての治療法としては、確かに有益である事は今でも堅く信じてゐる。

其處でフロイドのやつた事は、日本でもやつて見度いと考へて自分等は卒先して之を輸入した譯である。自分は先

づ日本文學の異彩である。『源氏物語』に於けるフロイド說の應用を試みた。フロイドのいふ『ムッター・コンプレクス』といふ心理現象を『光源氏』の戀愛描寫中に見出したのである。これは自分が醫科大學生たる當時、半文學的同人雜誌として出してゐた『エニグマ』誌上に發表した。『エニグマ』の同人は今の九大敎授久保猪之吉先生、同よりえ夫人、宮崎燁子夫人、（當時筑紫の女王白蓮女史）それに今東京の佐々木好母君や、九州の河原治作君等であつた。それから間もなく、榊敎授は『性慾研究と精神分析學』といふ本を書かれた。これも其材料は大分自分が手傳つたものである。併し當時は未だ世間が進まなかつた處から、實業之日本社が、これを出版するにも、再三再四書き直して、當局の內檢閱迄受けたといふ位に要心したものであつた。（此出版は自分の倫敦留學中の事である。）

それでも尙ほ當時のものとしては、ずいぶん思ひ切つた著書で、評判になつたさうである。此の著書の中に先生は特別自分の源氏物語に關する研究を世間に紹介する必要あるとして特に紹介された譯である。『エニグマ』の中には此他源氏の『野分』の卷の精神分析も載せてゐる。

今でも暇があつたら、もつと詳しく、源氏物語が天臺宗の思想から這入つて、佛敎の根本思想の上に立つて居る所から、フロイドの思想との關係を調べて見度いと思つてゐる。

此處に附言して置き度いのは、米國のアドルフ・マイヤー氏は精神病學界では勿論一流の大家ではあるが、精神分析の方では熱心なフロイドの崇拜家である。東北大學の丸井敎授が留學中、彼れに師事して其說をうけられたので、今では東北大學精神病學敎室はフロイド學派の日本官學代表の觀がある。爰に注目す可きは、丸井敎授も、內科から轉科した關係上、普通のクレーペリン派とはいさゝか異つた所がある事である。

同敎室からは其の後、最近多數の精神分析學者を出した事は、見のがす事が出來ない。殊に最近佛敎との關係に迄注意を向けられてゐるとの事であるが、それは我國の學術が各方面に於て、獨立の機に向つて居る事を示してゐる。

最後に少しく自分の意見を述べて見度いと思ふのは、自分が倫敦遊學中モット敎授に聽かされた事があるが、その言葉を今尙ほ自分が最も穩當な說として深く記錄してゐる事である。先生は、

『フロイドの說は如何にも今迄輕視されてゐた色情方面の重要さを强調した點に於いて、其功績はいなむ事が出來ない。併し世の中の事はそれ計りでは說明出來ぬ。現に世界戰爭に際して、種々の精神現象が現れたが、その說明としても、勿論色情的說明を要する者も多數あるが、自己保存の本能より說明しなければ說明のつかぬ所が少くない。だから人間は個體保存と、種族保存の二つの本能が相並んで立つもので、一方のみでは決して說明のつくものではない』と。

實に穩當な說だとつく〳〵感じたが、其の後研究を重ねるにつれて、其の說の如何にも當を得てゐる事に思ひあたるのである。

序に又自分は、『精神分析』の分析といふ術語は化學から借用したものである以上、一方に精神を解剖する必要があれば、又他方に綜合の必要もある以上、『精神合成』といふ語も必要であると思ふ。ところが本誌の大槻氏の云ふところに依ると、外國にも私と同意見の人があつたと見え、フロイドは夙にこの問題についてから云つてゐるさうである。

『我々は患者を分析した。それはつまり、それを要素的（エレメンタール）な構成部分に分解することであり、これ等の本能要素を一つ一つ彼の內に指示したことである。さうなれば、我々は、彼がそれ等の要素を新たに、もつとよく構成し直すことに助力となつてやらねばならぬと要求せられることは、固より當然でなからうか。諸君も御存知の通り、實際我々はさう云ふ要求を受けて來たのである。病的精神を分析する以上は、次にはこれを綜合して貰はねばならないと、我々は聞かされて來た。さうして、やがてまたそこへ別の心配も加はつて來て、分析者は無暗に分析するばかりで、あまり綜合と云ふことをやらないと云ふ。精神治療の效果をこの綜合に、云はゞこの解剖に依つてバラ〳〵になつたものを何とか再建設することに、移せよと云ふのである。

併し、諸君よ、この精神綜合に依つて一つの新たな課題が生じたとは、私は信じ得ないのである。いさゝか失禮に亙つても正直に云つて差支へないならば、私はさう云ふ要求は無考へな言葉であると云ひたい。が、私は大人しくかう云つておかう。それはたゞ一つの比較を內容に頓着なく引延したものに過ぎないと、或は（かう云つた方がよければ）一つの名稱を不當に擴充したものに過ぎないと。併し、名稱と云ふものは、單に約束手形に過ぎない。それに類似した他のものと區別するための符徽に過ぎない。プログラム、內容品目、或は定義などではない。さうして比較は比較されたものに唯一點に於いて觸れてをればよいので、

他の總ての點に於いてそれから遠く離れてをつても差支へはないのである。心理は特殊な唯一的な或るものであつて、これを何か他の一つのものと比較してもその性質を的確に定義出來るものではない。精神分析的操作は化學的分析と比較出來るが、併しそれと丁度同じやうなのはまた外科手術との間にも出來るだらうし、或は教育の感化との間にも出來るであらう。化學的分析との比較で、當らぬのは次の一點にある。卽ち、心理に於いて分析は、どうしても統一と聯關の方へ引きづられて行くやうな努力をなしつゝ行はれざるを得ないと云ふ點。一つの特徵を分離させ、一つの本能感情を關係感情の中から遊離させることに成功したとしても、それはそのまゝ孤立してはゐないで、直ちにまた別の關係の中に這入つて行く。化學の分析中に於いても、これと全く同じやうなことは起るのである。化學者が强いて一つの分離をなすと同時に、彼の意志せざる綜合が（材料の親和力が今や自由になつたゝめに）完成せられる。

ところが實はその反對で分析者は綜合されたものを分析してバラ〳〵にするのではないのだ。神經病者は分裂したる、抵抗のために綜合を失つた精神生活を我々に提示するのである。さうして我々がこれを分析し、その抵抗を取除いてゐる間に、この精神生活は共同的になり、我々が自我と呼ぶところの大きな統一を、これまでは自我から分離し、別に結び付き合つてゐた本能感情にまで贈すやうになるのである。で、分析を受けてゐる者に於いて、我々の干渉なしに、自動的に、必至的に、精神綜合はなされるのだ。』（大槻氏譯）

フロイドの云ふところにも、成程一理はあるが、なほ自分もよく研究して見るまで、贊否は保留しておかねばならない。（八・八・二三）

時評

小學教科書の改正に就いて文部當局に質す

大槻憲二

小學校尋常一年國語讀本卷の二の中の「サルトカニ」の話の教材について、文部省では輿論に鑑み愼重研究してゐたが、いよ〳〵今度新たに改正した國語讀本卷の二で「サルトカニ」の話の筋を前とは違つたものにし、十月十日から全國各小學校で一齊に使用せしむる事になつたさうである。改正の主な點を擧げると、

舊讀本に「早クメヲ出セ、出サヌトハサミデハサミキル」とあるのを「早クメヲ出セ、早クメヲ出セ」と改めて脅迫がましい態度を除き、前は猿が青い柿を蟹に投げつけて叩き殺す所を新讀本ではちよつと怪我した程度にとゞめ、小蟹が蜂や臼などの友達の助けによつて親の仇を打つところを、こんどは「サルハタウトウアヤマリマシタ、カニハユルシテヤリマシタ」

と改め、蟹の友達の友情と、猿の反省と蟹の寛大を表示して前の慘虐味を一掃したさうである。私は右の改正に就いて二三の氣付いた點を述べて見たい。右の改正は常識的見地からはまづ結構と云へるだらうが、心理學的見地から見ると、大分問題が殘つてゐる。まづ、

一、仇討の要素は取除かれたが、仇討と云ふ問題は依然殘つてゐる。現に尋常二年の讀本には曾我兄弟の物語が載せられて、仇討を美談として推奬してゐることは矛盾でなからうか。蟹が輕い程度の怪我で濟んだが故に、蟹の膺懲も慘酷なものとならず、謝罪くらゐで「寛大」に濟ませ得たであらうが、もしやはり舊讀本に於けるやうに、致命的の怪我を與へられたのであつたら、小蟹もから寛大にはなれなかつたらう。して見れば、今度の「改正」は單に問題を回避したと云ふだけで、問題の解決にはなつてゐない。現に教師は兒童から私の云つたやうな問題を提出して質問されたならば、返答に困るだらうと思ふ。文部省ではさう云ふ場合に教員たちに何と答辯させる方針であらうか。

二、文部省では一體復讐と云ふことは善と思つてゐるのか、惡と思つてゐるのか。訊いて見たい。もし惡とし

て兒童に教へ込むつもりなら、「曾我物語」も取除かねばなるまい。その代り、その國民が生長した時に、遼東還附の復讐のために立つて某國と戰へと彼等に云ふ事は出來なくなるわけだ。私は生ぬるい道德を兒童に教へ込むことはなほ再考を要すると考へるものだ。

私は復讐心が人を幸福にするとは云はない。併し復讐行爲はともかく復讐心を一概に惡だと教へる事が必ずしも教育の理想とは斷じ難いと考へてゐる。何となれば、他人から不當の惡を加へられて、平然として居よと云ふことは人情の自然に反してゐる。馬鹿か神樣でない以上全然不可能だ。昔時の「曾我」のやうな復讐が今日に流行せぬのは、人間が道德的に進歩して復讐を惡と考へるやうになつたからだと考へるならば、それは人間性をあまりに樂觀し過るものである。それは寧ろ社會が整ひ法律が代つて復讐をしてくれるやうになつたゝめに、個人がそんな暇つぶしなことをする必要がなくなつたからであると考へる方が現實的である。從つて復讐心はなほ個人に於いて存續してゐる。昔時とても、復讐は必ずしも、殺人に對して殺人を以てしたとは云へない。讐（仇）と云ふ感情は個人が非常に不當な損失を與へられてゐると云ふ感情である。この損失を補ふ方法は、相手にもそれに相當する損害を加へると云ふことに依つてのみ遂げられるとは限らない。その損害を補ふてあまりある程の利益が別方面から別の形で這入つて來ても、その損害感は餘程醫せられるものである。例へば、少年時に富める友人から貧故に馬鹿にされた男が、生長して別に金持にならなくとも、何かの高位に就いたとか、精神的大事業を完成したとか、或は相手が第三者に依つてまた不當の損失を加へられたとか、或は自分自身で普通人間の堪え得る以上の苦みを己れに加へた（「恩讐の彼方」の場合のやうに）云ふやうな事に依つても、その復讐感は滿足させられ得る。世に偉大な事業を遺した人の傳記を讀んで見てその發奮の動機がさう云つた怨恨や復讐心に負ふてゐる事の如何に屢々であるかは人々の驚くほどである。かく考へて見ると、人生に於ける復讐心の效用はなか〳〵あなどり難いものがある。小さな復讐心の所有者、例へば電車の中などで誤つて人の足を踏んだ者に對して、故意的にそれを踏返さねば氣がすまないと云つたやうなのは、それは復讐心ではなくて短氣か劣等感である。短氣や劣等感を矯正するは教育家の任と云ふよりは心理療法家の任である。併し短氣や劣等感を料理し得ざるは教育家の恥であるから、今後の教育家は心理療法家を兼ねなければならない。

何れにもせよ、復讐心は人生に嚴存するし、嚴存させ

ても或る意味ではいゝものだと私は考へてゐる。復讐が惡となるのは、右に論じたやうに、短氣や劣等感のせいである。他人に損害を加へたものは、それだけの損害をその相手からか、或は社會からか受けねばならない（復讐されねばならない）と知らしめることは、人間として社會に生きて行く上の、一つの正しい教育法でさへないか。何を苦しんで、サル、カニの復讐的要素を教科書中より抹殺せんとしたのか。而も他面に於いて、曾我兄弟の復讐讃美をそのまゝに殘存せしむるの矛盾を敢てしつゝ……。

私は幼い學童等をして、社會をそれほど美しく、寛大なところとして幻想せしめるやうな欺瞞主義を教育の本義と考へてゐるやうな從來の教育家（のみとは云はず、宗教家や道德家）たちに猛省して貰ふの秋だと考へる。兒童をいたはることゝ、彼等に現實直視の勇を與へざらむとすることゝを混同してはならない。現實は冷嚴である。復讐と攻撃と惡虐と冷淡と利己と欺瞞とは至るところに充滿してゐるが故に、敢然それ等と闘ひ抜いて行けるだけの勇氣ある人間、現實支配の能力ある人間となれと教へる方が、はるかに親切な教育法であると考へてゐる。正義と眞實と誠意とを尊重せよと教へるはよろしい。併しそれ等が現實を完全に支配してゐると幻想せしめることは、教育のやさしき欺瞞にして、結局は彼等を夢想者とならしめる冷酷なる溫情である。

三、舊讀本中に『早クメヲ出セ出サヌトハサミデハサミキル』とあるのを單に『早クメヲ出セ早クメヲ出セ』と改めて「脅迫がましい態度を除いた」とあるが、それぐらゐの脅迫にも堪え得ないほどの軟弱な兒童を、從つて國民を、作る事が文部省の理想であるのだらうか。脅迫に堪える堪えないより脅迫がましいことを云ふのが惡いのだと云ふかも知れないが、それぐらゐの脅迫が何故惡いのだらう。男性は大體虐待性的（サディスティック）なるを自然とする。況んや男兒に於いては一層である。このサディズムを病的に煽動することは好ましからぬが、これを病的に抑壓することは更に弊害がある。これくらゐの脅迫をさへ恐怖することは、文部省當局者自身の心的病根（コムプレクス）を暴露するものである。この場合、分析學的常識を以てすれば、去勢恐怖のコムプレクスであるやうだ。教育家に分析學が必要であると我々が平生主張するのは、その論據實に茲に存する。分析せられざる教育者は常に自己の無意識病理に支配せられて、その兒童を取扱ふやうになるのが必然である。教科書編纂者のコムプレクスがこれまた問題になることを示された點に於いて今度の新讀本は興味があつた。

四、文部省の佐野圖書監修官の某紙記者に語るところに依ると、舊讀本の「サルトカニ」は馬琴の「燕石雜誌」から材料をとり、今度のは「ひなのうけぎ」からとつたさうである。それ故にそれ〴〵據り所があると云ふ點を誇つてゐられるやうだが、もし據り所を問題にするならば、それ等の物語が未だ口から口に傳へられてゐた、記錄以前の形に據るべきものである。國定教科書は必ずしも文學ではない。教科書である。學究者の眞似事のやうにその典據を問題にしたり誇つたりするよりは、その編纂の教育的方針と、教育的方針の心理學的根據とを確立すべきである。それ等の方針と根據とが確立してゐないために、氣まぐれな常識的「輿論」に動かされ、このやうな矛盾した「改正」(?)を敢てしたりするやうになるのである。私は直ちに元通りに再改正せられむことをお勸めしたい。

讀み返して見て、私の言葉が少し激越に過ぎたことを認める。併し文部省當局者諸君よ、私的小感情を以て拙文を讀み給ふこと勿れ。さうして理解せられよ、筆者の動機が、寧ろ主として、何等學的根據のない「輿論」に對する公憤にあつたことを……。勿論、その淺薄な輿論に左右せられる當局者の不甲斐なさに對する公憤も固より否定はせぬが……。「輿論」と云ふのは、多分過般朝日新聞社の催した座談會の事を云ふのであらうが、あの時の「輿論」には、心理學的見地から見て甚だ寒心すべきものが多かつたことを特に附言しておく。(完)

『細い葉蔭への慾望』讀後感

則近保良

本誌第五號を手にした夜、私は、森茉莉さんの『細い葉蔭への慾望』を讀んだ。私はそれを殆んど一氣に讀了して、直ぐに雜誌を置き、スイッチを捻つて床に入つた。併し暗の中で私の心が漸次に外界の靜まりを取込んできたとき、此の感想文を讀んでうけた印象が、象徴的な映像となつて、腦裡に劃然と浮び上つてきたのである。

草木と雨と霧と色彩に就ての名詞やら形容詞が澤山に盛られてある此の感想文全體の感じは、恰も靜かなる小さき森の、青味がゝつた明るさを帶びてゐる。その森は薄明に閉ざされてはゐるが、時折の搖ぎに、ちらちらと張力のある光箭を瞬かせる。その映ろひはまた作者の纖

細な感覺のそれでもあらう。而してさらに、作者から放出されたそのきらめきが、作者の言葉に暗示されて、バチルスのやうな、細かい動きのある影となつて私の腦裡を去來しはじめた。暗い中で私は睡眠を求めて、最初は不機嫌にこれらの想念と爭つた。そのうちにだんだんと私は、此の執拗な想念の蔓りの原因は、私自身の心的狀態に依るのではなく、作者の訴へかけてゐる願望の强さにあるのだと考へられてきた。もつと突込んで皮肉に云へば、讀者に對して無慈悲な位露はな見せびらかしがなされてゐて、それが私をかくまで拘らせてゐるのではないかと思はれたのである。私はそれ故この疑問を確めるために、再び電燈を點ぢねばならなかつた。もう一度頁を繰つて私はそれを讀返した。その後で、私の感じはどうやら確らしい、と私は自分に呟いたものである。私は、森茉莉さんと仰有る方は、たゞ鷗外博士のお孃さんだと云ふことより知つてはゐない。而してこの類の直感は、屢々餘り詳しく知らぬ者に與へられるものであるが、「此の作者は、森林のもつ靜かで豐かな感じを、讀者に印象づけやうとしてゐる。」と唐突りそれに思ひ至つたのである。森の廣告をしてゐる——と常の私なら、分析學をやつてゐる者の冷靜さから皮肉に微笑するのであるが、この時はさうは思はず、氣持のいゝスペクトラムだ、と獨白したものである。

以上の讀後感は精神分析を念頭におかず、單に文學愛好者として私が感じた印象だつたのであるが、その後で私は、自身が非常に抑壓の强いサルチスティッシュな人間であるから、一脈の同感からこの快よさをうけたのであることを自覺した。それで實のところ甚だ橫着な私は此の作品を分析することで、窃かに自己分析をしやうと考へたのである。

×

作品を一讀して直ちに考へられることは、作者の非常に烈しいナルチスムスと父コムプレクスとである。それはまた幼時の印象に宿かりすることで、至る處に「胎內空想」とペニスの「取込み」を示してゐる。明かに作者は、一見何氣ない幼時の印象を語る感想の背後に、透かし繪の如く父のイマゴーを潜ませてゐるのだ。

恐らく本誌の讀者方は、提灯の花への作者の興味に於いて何かの象徵を夙に氣附かれたことであらう。提灯の持つ一の特性（『伸び縮み』すること）は、提灯が、從つてまた提灯の花がファルスの象徵となるに甚だ好都合な類似であるが、作者の場合に於いてこの解釋をあてはめることは尙早であり形式的であるとしても、少くとも花一般は確實にその意味を示すものである。花が一般に性

器の表象であることは、花そのもの〻機能に就て考へれば容易に首肯れることであるが、それは單にヨニをのみ常に象徴するものではなく、屢々リンガムをも表象するものであることを知つておかなければならない。埃及、印度、支那その他の東洋諸國に於ては、蓮はリンガムを表象するものとされてをり、これら偶像教の影響は、百合として基督教美術に輸入されてゐる。即ち『父なる神』のシムボルなのである。聖母マリア、基督、百合——を以て『聖なる家族』の意味が示されてをることは、諸君におかれても既に御承知のこと〻思ふ。これらはその典型的なものであるが、一體に象徴物は或る場合には男性を、他の場合には女性を、ときにはまたその双方を意味する（Überdeterminieren）もので、吾々はそれを、使用されたる種々な場合に應じて正確に見極めることが肝腎である。

話が脇道に外れた。私は筆を戻して作品の吟味にかゝらなければならない。先づ冒頭に次の言葉がある。

『私は銀座を歩いてゐた。晝の町は白つぽい黄色の中に動いてゐた。風はなまぬるく、私の心持もなんとなく物憂かつた。』

作者はかうした心的狀態のときに提灯の花を見出してゐる。作者はこの數行の文章の中から黄色なる字句と、なまぬるくなる形容詞とを抹殺するに苦痛を感じるに相違ない。

惟ふにこの平穏單調な氣分の飽滿からよつて來る懶うさが、胎内生活への一聯の類似を、記憶の中に感じさせてゐたのではなかつたのか。『何となく迫つてくる異樣さを持つた花のむらがりには、どことなく或力があつて私を惹きつけ、』そこに作者を凝乎立停らせたとある。作者は晝の銀座に於て、ゆくりなくもその無意識内に潜む父への思慕を肉體的に味つたのだ。たゞに作者のみではなく、高層するビルディング街のなんとなく輪廓の弛るんだ白晝の喧騒さは、誰をでも不圖もの淋しく、また回顧的にするものではある。が兎も角も作者はその瞬間に、遠い昔の樂しい記憶と戀人を思ひ出してゐたのだ。五八頁下段にも次のやうな述懐がある。

『父との生活の思ひ出を、年月の雲を距てゝ想ひ起してみる時、それは泉の底の物音のやうに、鈍くはあるが、ありありと、私の眼の前に浮んで來る。さうしてその細な、微風のやうな愛撫の思ひ出は私に、暗い中にゆれてゐた白い提灯の花を、ほつきりと想ひ出させる。』（傍點筆者）

而して確かに提灯の花は作者の戀人に違ひなかつた！

作者の胎内空想への執着は、其他にも隨所に幼時の印象として持ち來されてゐる。ツワイライトの花蔭に蹲つて莖と花と雨の中に體ごと入りたく思つた記憶や、西洋

蔦が轡々と壁を匐つて窓に絡まり、ピアノの背面の大きな窓の一つは閉ぢられた仄暗らさうな一室の雰圍氣の中で、蔦の窓を神祕的に感じた印象やは、作者の胎兒的全能の狀態への懷しみに味のある感興を齎らして居ることであらう。讀者は何よりも先づ記憶を綴る作者の、ちりちりと讀み手の皮膚へぢかに觸れてくる情熱的（パッショネート）な筆致に注意せられよ。而して斯樣なパッショネートな回顧文の多くは、幼兒に於て誰でもが味ふところの兩親の執れかへむけられた感傷性（ヴェルトリヒカイト）が、ある契機に於て再活動を促され、他の樣々な願望を伴つて現れてくる結果、强迫的に作られるものゝやうである。

また五七頁下段に於ては

『私は暗い、狹い階段を上つてゐた。私はうれしさで一杯になつて上つて行つたのだ。私の眼の前に暗い中に、父の長靴の拍車が光り、鳴つてゐた。』

と記されてあるが、こゝには腸管出產空想が多少は働いてゐるとも受取られる。作者は「私の眼の前に」と云つて一息切り、急いで「暗い中に」と後を續けてゐる。「私の眼の前に暗い中に」と、此の文章にはコツンと突當る心の凝固物が私には感じられる。そこに、眼の前に、父の長靴の拍車があるのだ——。

『この私の提灯の花への慾望は、一先づ最初に父に向つて轉化をした。』（五六頁上段）

作者は父へのリビドー纏綿を些かも僞らずに述べてゐる。だがこれは一先づでもなく、最初に、でもなかつたのだ。現在（いま）作者にこの慾望が、無意識から意識に遡されて明確（はつきり）と認識されたまでゞある。作者の、父にむけられたリビドー纏綿は、作者の結婚のときまで持續された。

『私はパ、との生活を金のきれいな箱に入れて鍵をかけて心の中に持つてゐたいわ』（以下數行を特に翫味せられよ。）

此處に作者のナルチスムスと父コムプレクスとがその全貌を現はしてゐる。最も頑固に父へ纏綿せられてゐたリビドーが、他方への一轉をすら强く拒否してゐたのはまことに當然であつたと云はねばならない。

父——提灯の花——ペニス。而してペニス取込みの心理過程が、自己破壞的衝動を外的對象へ投出することゝなり、破壞衝動に對する防衛が口唇的羨望のために、母の體內への侵入——卽ち胎內空想を抱かせる一の機緣となつたのであらう。

作者は自身の結婚に言及せられ、その想ひ出を記された後で、再び幼時の追憶に戻り、其處でまことに突然に——

「父は平常言つてゐた。『香等の匂ひをつけたのもいやだ。惡い匂ひは勿論わるい。淸潔で無臭なのがいゝ』と。

——と書て居られる。私は此處に至つて作者に好意的な微笑を送らずにはゐられない。これを特記せられた作者の無意識内には、清潔で無臭（即ち嫁がぬ娘）——香ある匂ひ（結婚したる娘）の聯想があつたのではないだらうか。それは結婚して仕舞つた娘への愛情を堰とめた父に對する辯護であり、また作者自身の後悔であり、父にむけた愛情の技巧的な表白ではないのか。私はこれを書きながら、作者自身がその結婚生活に破局を味はれた原因の一を、此處に嗅ぎ當た思ひでゐる。

×

私は此の作者の同じ動機から綴られた『愛情を止める』「冬柏」第四原第五號）を參考のために讀んでゐた。

この中では、愛情を止めた父を劬り、自分の心に肉に取込まうと、作者は大變熱心な努力を拂つて居る。だが父は娘のひたむきな愛慕に、困つたやうな嬉しいやうな、途方に暮れた顰め面をしてみせてゐる。

『愛情を止める、流出してゐるものをぴつたりと抑へて止めてしまふ、といふ事は、むづかしい事だ。（中略）併し、父がそれを成し遂げたのは父の強さの爲めでは無かつた。父の偉さの爲にではなかつた。自身の心の髓に無感情な空地を持つてゐた父にとつて、ものに對して臟腑もろとも動いて行かない父にとつて、この水道のねぢをひねる事はやさしい事だつたのだ。』（「冬柏」三五八頁）

作者は人間としての父を解つた、と信じた。父の愛は、あはれな愛と云ふやうな愛だつたのだ——と作者は呟く。作者は、自分にとつては苦痛であるべき此の考へ方に、甚だ熱のある叙述を試みてゐる。併し結局これも、自身を殘忍に扱ふことで——云ひ換れば、親しいものにむかつてするあの女特有の逆說的な愛情の表現をもつて、自分を縛つとあやしてゐるものゝやうだ。私にはむしろ、經驗者が一樣に有つてゐる極端を虞れる氣持から、娘の愛をうけきれないでゐる父の神經が感じられる許りだ。

假令ば、此麼想像は許されないものか。

娘のために、と考へて一時的に愛情を無理に堰止める。併し娘はそれを剛情に越えやうと必死になる。今度は恐ろしくなつて父は本心で後退を試みる。娘はそれを追驅けて達せず、ふと立停つて、卑怯と云ふやうな視線を投げて齒軋りする。父親の心が娘の熾烈な愛の前で立竦む——と云ふやうなことが、父と娘、母と息子（此の場合は大抵逆で）の關係に於て屢々あるものだ。始終隙を狙つてゐる娘の眼を身體に感じて、それ故に愈々愛情が硬直して行く、さう云つた父の氣持ではなかつたのか。假令、最初に愛情を止めた無意識的な動機が、エディポス

的な嫉妬と云つた感情からの反撥であつたにせよ、なかつたにせよ、父親はときにまた密かに娘を獨占したいと考へたに相違ない。だが、父はそのデリカな神經の夫に近親姦的な恐怖を無意識に感じて、跫音を盜んでそつと引返すのだ。それでも娘が若し受身に父へむかつてゐたら、此の父の態度は變つてゐたのではないかと私は考へる。その代り或は始めから此麼に愛されなかつたかも知れないが……。

『私には父が、何か魔物のこしらへた煙の爲めに私に近づけないで悲んでゐるやうに見えた。私は冷たい風のやうなたよりない心持でその父を見てゐた。』（冬柏三五二頁）

と作者は父へ自己を投影して、そつと儚な氣に嘆息を洩らしてゐる。作者は徹頭徹尾ナルチスティッシュな愛で父を繋がうと欲してゐる。（父が亦苦だナルチスティッシュであつた。）それが距離を二人の間に生じさせたのだ。

私自身此の二つの作品を讀んで、恐ろしいまでに自己愛的な作者の愛し方、愛されんと希ふ心持に凄まじさを感じてゐる。

×

作者は結婚後に於ける父との關係に於て非常に煩悶されたやうである。その苦しみも私には幾分か想像出來る。が勿論、現在では作者にとつて、その關係に於ける懷疑だけは尠くとも氷解されてをることゝ私は信ずる。

また作者は母との同一化（これはその胎內空想の中に幽かながらみえてゐる）に據つて、父を自身の子供に（夫に）したいと欲してゐる。これは救助コムプレクスを有つた男が、女を母に（妻に）しようと無意識に願望してゐるのと形式に於て同一である。それはさらに作者の胎內空想を樣々に發展させることゝもなつた。（前揭、作者が結婚後父との記憶を金の綺麗な箱に仕舞つておきたいと云つた言葉、參照。）

だが作者にとつても亦、現實は常に苛酷であり、幻滅に滿ちてゐた。而も作者の只管に愛すべき人は既に幽明境を異にしてゐる。作者にとつて父に代るべき人は絕對に無いのだ。だから作者は悲痛に叫んで居る。

『それは特別な人間でなくてはならない。世間からみて特別な人間でなくても私から見て、特殊な人間でなければならないのだ。』

森林太郎は作者にとつて、然り、本統に『特別な人間』であつたのだ。

いま、作者は再び『森』の姓に復されて居られる。それは作者にとつて、淋しくとも幾分の慰藉であらう。だが、恐らくは提灯の花の仄白く咲いてをるであらうその

森の木蔭にあつて、此の後の作者は果して何を描き、何を語らむとするのであらうか——。分析は作者の私的生活に觸れる事は已むを得ないが、私はこの分析に於いて非常に無遠慮であつたことを作者に陳謝しておく。（完）

久米氏の「ハムレット」全曲演出に就いて

松居桃多郎

凡、沙翁位世界中の文學者達に愛され且憎まれた人はあるまい。一時は彼のイブセンを先鋒として反沙翁熱が世界中に蔓延した事もあつた。殊に流行の尖端のみを進みたがる日本の文學者は忽これに雷同して沙翁時代後れ論を振廻した人も多かつたのに、最近突然如何に中央公論の御威光に依るにしても、猫も杓子も沙翁禮讃とはどうした譯だらう？

近頃流行の轉向の問題は、本誌の十月號に大槻憲二氏の解說が揭載されてゐるから、再此處に繰返すのは止すが、築地小劇場は左翼の劇場だとの誤解（と彼等は云つてゐる）をとく爲に（卽ち父への陽性轉嫁を表明する爲に）、此頃になつて突然日本の文學者達から陽性轉嫁の對象に祭上げられた沙翁の作品をその上演脚本として擇んだのは面白い。結果に於いては九月末大隈講堂に於ける新春座の『ハムレット』と競演の如き形となつて……。

このハムレットの演出を囑された久米正雄氏が青年時代（文藝家としての嬰兒時代）に初めて見た新劇は、帝劇の五階から見た土肥氏東儀氏等のハムレットであつたと云ふ。久米氏の言葉から察すると、當時文學的には未だ智識も淺く、云はゞ藝術的抑壓前期にあつた久米氏の單純な腦裏に映じた印象は、舞臺の演技が「遠く谷底に展開」されてゐた事、そしてそれ以來沙翁劇であれだけ感激した演出は見ないと今尙信じてゐる程に、その演技を「全知全能」の物と感じた事である。而も之が導火線となつて一時は久米氏の演劇愛好熱を煽りたて、遂には大學の卒業論文として「ドラマタージイ・オブ・ハムレット」なる一文を書くに至つたと云ふ。

其後に至つて久米氏はハムレットの飜譯迄もやつてゐる。そして今度はハムレットの全曲演出と、久米氏は常に沙翁を陽性轉嫁の對象としてゐるが、就中今度の全曲演出卽ち一場面もカットしたくなかつたと云ふ事は、如何に戲曲ハムレットに對して幼兒的偏愛を感じてゐるか

と云ふ何よりの證據である。併し久米氏は母なる「ハムレット」を熱愛するの餘り、之に近寄らんとする凡ての權威者（父）を忌避する氣味がある。都新聞で氏に皮肉を云つた者があつた時に、氏はその反駁の中に「そんな惡口などはよして寧ろ自分等を援助でもしてくれないか」と云ふ意味の事を云つてをられ、又中央公論では「その衆智を集め、後援を擔うて、私は敢て其衝に當つた」と如何にも度量の廣い所を見せてはゐられるが、それと同時に「今日本で坪內、林、河竹、上山の諸氏を除いては、自分の右に出るものはあるまい」とか「もとを正せば立派な演出專門家であり、殊にハムレットに就いては相當な專門的研究家である」等と獨尊自愛的（ナルチスティック）な力み方をしてゐられるのは少々例の微苦笑ものである。

併し大槪氏の分類法に從へば、久米氏のこの態度は寧ろ無政府主義——卽ちハムレットに關する所有權威の端的な否定と云ふ事になる。振返つて見ると氏は嘗て沙翁の飜譯の權威たる坪內博士を無視して新しい飜譯を公表した。「若氣の過ちで、坪內先生の譯本を、餘りに坪內臭が濃過ぎるなどゝ、非難したものだ」と自分でも云つてゐられるが、決して「若氣の過ち」などと云ふ簡單な原因からでない證據には、今日でも少しも氏のエディポス・コムプレクスは昇華されてはゐない。氏は「先づ第一に私はハムレットの精神を新解釋はしない。」とか、「是を實際何等かの意味で、新演出を爲し得れば、一躍吾々も世界的演出家の水準を抜きうるのだが、その抱負は？　私には無い」。などゝ新しい方面の權威を先づ拒否しておいて、次には古來の名優の型などにも依らず寧ろ現代向の演出をするやうに云つてをられる。又日々新聞の記者に向つても「坪內式の能がゝりの演出ではなく、自方のは世界一流の獨特な物だ」と云ふ意味の事を豪語されてゐる。

斯の如く今度の築地小劇場のハムレット公演は、それ自體が「ハムレット」の筋書を辿つてゐる。演出家久米正雄氏がハムレットとすれば、戲曲「ハムレット」は彼の母ガーツルードであり、之に接近する多くの權威は叔父王クローディヤスであり、ボローニヤスであり、ローゼンクランツ、ギルデンスターンに當る。全曲演出と云ふ所に存する久米氏の「ハムレット」に對する熱情は認めるが、その度が餘りに高く、所謂「子供と母との感傷關係だけに滿足せんとした」所に悲劇の原因が伏在する事を否定する譯には行かない。千八百九十四年にF・R・ベンソンが演じた完全なノー・カットのハムレットが、如何に有意義な物であつたかはシドネイ・リーが捧げてゐる絶大な讃辭を見ても分るが、名優であり名演出家で

あり、沙翁劇專門研究家であり、沙翁劇專門劇團の組織者であるベンソンが戯曲「ハムレット」を愛するの餘り敢て全曲上演を行つた時の心理と、今度の久米氏が築地の爲に行はれる全曲演出に就いての無意識心理との間には大きな隔りがありはしないだらうか？

久米氏の場合のみならず、今日の日本の新劇運動なる物には餘りに幼兒的心理特質が——端的に云へばエディポス・コムプレクス的要素が——多すぎはしないだらうか？　此頃は「新劇」とか「新演出」とか「新しい」とか云つて「新」の字が附かなければ存在價値が無いやうに持囃されてゐるが、「舊」の字に對するこの反逆兒は往々にして箸にも棒にもかゝらぬ不勉强なのらくら息子の場合がある。取分け藝術の方面に於てそれが甚しい。『抑々「新しい」とは、古來の物の蘊奥を極め、その長所と短所を的確に區別出來るやうになつてから、さて其短所を自分の工夫で補ひ、之で完全無缺だとなつた物の事を云ふので、今の若い者の云ふやうな意味のは、昔は「物を知らない」と云つたものだ』と、嘗て或先輩からお小言を食つた事があつたが、今の世の中には何と「物を知らない」新人の多い事だらう。充分に研究した結果敢然として立つて「舊」と戰ふのなら兎も角も、最初から之を回避して自分勝手な獨尊自愛（ナルチスティツシュ）的な空中樓閣に立籠るのは却つて人類の向上進歩を妨ぐる結果となりはしないだらうか。

今や世上には沙翁復興などゝ云ふ呼聲高く、此處當分は沙翁は世人の陽性轉嫁の對象となるであらうが、それと同時に幾多の沙翁研究の權威者が陰性轉嫁の被害を蒙つたり、餘りに獨尊自愛（ナルチスティツシュ）的な「新」演出等が續出したりする事であらう。併し考へ直して見れば、『自分のは世界一流の獨特なものだ』と云ふやうな常識外れのした豪語も、或は近頃では通俗小説家で通つてゐる氏の畑違ひの演出家としての劣等感の反動構成（術語でなく云へばひけ目を感じてゐるものゝ空威張）としての意味もあることを思へば、さう咎めるには當らぬことかも知れないが、客觀的に見てはやはり一寸默過し難い言葉である。

（完）

大槻憲二氏の時評「小學教科書の改正に就いて文部當局に質す」は十月十九日、二十日兩日に亙り、都新聞學藝欄に掲載されたものでありますが、こゝに同紙の了解を得て轉載いたしました。

資料

戰場に現れる健忘症

長谷川誠也

ヨーロッパ大戰は、心理學、殊に變態心理の研究に、幾多の材料を提供した。なんしろ幾百萬の人が、生死の境界線に立つて、緊張した生活を遂つたのだから、平時の生活には、容易に見られない奇異な、變則な心理狀態が、諸處に現れたのは當然のことである。

イギリスの女流作家、レベカ・ウェストの作に『一軍人の歸省』（一九一八年出版）と題するのがある。長篇ではなく、また、文學として評價すれば、平凡な作であるが、變態心理を、新らしく取扱つた所に興味がある。その筋は、或士官が、戰場において、健忘症となつたがために、本國へ送還され、種々の治療を受けたが、なか〳〵全治しなかつた。彼は、全然過去を忘れてしまひ、いかに努力しても、往事を回想し得ないのだ。彼はその家庭をすら忘れてゐるのだ。彼の夫人も、愛兒も、親戚も、親友も、昔の戀人も、家屋も、什器も、彼にとつては、みな新らしいもので、いづれも彼の過去を呼び起させるだけの力はなかつた。彼の病狀は、記憶を失つてゐるといふだけで、その他には、なんの異常もないのだ。ところが、或日、昔の戀人が、子供の玩具を彼に見せた。これは彼が、曾て愛兒に買つてやつた物であつたのだ。この玩具が彼の記憶回想の端緒となつて、健忘症は根治されたと。

大戰當時、かやうな健忘症の患者は、相當に多かつたらしい。ウィリアム・マクドウガルの取扱つた患者中には、ウェストの小說の士官の病狀と殆んど全く同じいのがある。

この患者は一兵士であり、砲彈爆裂のために、突然健忘症となつてしまつたのだ、彼の推理力も、行動も、談話も、普通人と何等異なるところはなかつたが、たゞ、過去を全然忘却し、自身の姓名も、所屬聯隊も、家庭も回想されない、また、女房があるのか、ないのか、それすら記憶されてゐないのであつた。マクドウガルは、この患者を世話するやうになつた時、これは時を俟つより外に、治療の方法はないと考へ、當人に向つては、追々

恢復するからと言つて安心させて置くだけに留めておいた。その後數日、熱帶地方から送還された數患者が、この病院に收容され、彼等は持ち來つた日除兜を、ベッドの側に懸けた。その夕刻、健忘症の患者は、病院の廊下を步いてゐたが、新入患者の病室を覗いて日除兜を見ると、感奮したやうな樣子となり、マクドウガルを連れ來つて、かの兜を指さした。治療者は、直ちにこの患者はインドに居たのだらうと思ひつき、自ら憶ひだせるだけ、インドにおけるイギリス軍營地の名を語りもし、書きもして、患者の注意を引いて見たところ、彼の感興は愈よ昂進し、突如として健忘症は除かれ、彼がインドにおける從軍、次いでフランスに轉戰した模樣が、審かに語られた。その後の靜養中、この病氣の痕は全く無くなつたので、彼は再び戰地に赴いたと。

マクドウガルは、なほ同樣な例を擧げてゐる。これもこの心理學者が手がけた患者で、塹壕から、イギリスの病院へ送られた者である。

彼は西部カナダから從軍を志願した者で、農民である。彼が病院に送られて來た時には、前記の患者と略ぼ同樣な狀態であつた。彼の談話には不健全な所もなく、簡單な物語を讀んで能く理解し、簡單な算術には間違ひもなかつた。しかし、カナダの事情を訊くと、そこへ往くには三日かかると言ふこと以外には、何事をも語り得ず、また、農場に生活してゐると言ふことだけは語るけれども、その農場の樣子は、全く判からず、たゞ其處に多數の人家が無いといふことだけを記憶してゐるのだ。さうして、事物に關する認識には不正確な點があつた。驢馬の繪を見て馬と言ひ、狐の繪を見て、犬のやうだが違ふと言ひ、ライオンに對しても同樣、熊については返答なく、蛙を變な物と見、牛の角を耳だと言ひ、ジャクドー（からすの一種）を認識せず、その羽翼は、腕でもあらうかと言ふのであつた。なほ、日々の新聞に揭載される戰爭の寫眞だけは、見るに堪へない樣子であつた。

この患者は、マクドウガルの看護の下に來るまで收容されてゐた病院で、若い婦人と親密な間柄となつたことがあり、その記憶は喪失されかつた。なほ、他の一婦人の寫眞をポケットに入れてゐたが、その婦人の何物であるかは記憶してゐず、たゞ、これを見るのが好きだと語るたけであつた。

マクドウガルは、この患者の健忘症は、相當長い期間に亙つてゐるものと見て、催眠術を應用した。この術の暗示によつて、彼の語つた光景は、夢想の斷片のやうであつたが、注意すべき二つのものがあつた。一つは、若い一婦人の出て來る光景であり、他は、二人の者が塹壕

で負傷し、血まみれになつてゐる光景であつた。催眠術は、この二光景の外に、彼には妻と子供一人ある事とを引き出し得ただけで、他に有利な材料は現れなかつた。マクドウガルは、催眠術を用ゐた後、幾許もなく、彼に向つて、彼が記憶を回復し得ない理由は、何にか恐ろしい事を經驗したからだと說明したところ、彼は「そんな事を記憶しないで無事にゆけないものでせうか」と言つたので、治療者は「いや、それはいけない。恐ろしい事を想起するのは、絶對に必要です。あなたは、それらに直面しなければなりません。さもなければ病氣は決してなほりません。早ければ早いだけ結構です」と力强く說いた。數分の後、患者は「私は機關銃兵のことを話しはしたらうか」と言ひ出し、次いで塹壕戰の光景が、綿々として想起された。彼は地面に——この會話は病院の庭で行はれたので——陣地の模樣を描きながら、戰場の有樣を語ること十五分に及び、回想し得たことを悅ぶ樣子は、明らかに見えた。マクドウガルは、この時、戰場談を中止させ、さらに故鄕の事を回想させようと思つて「今度は、あなたの家のことを話して下さい」と言つたところ、患者は三十秒ほど躊躇し、なんとなく苦悶する樣子が見えたが、遂にカナダにおける生活を想起し得て物語つた。彼が健忘症となつたのは、激烈な砲彈戰の後で、戰鬪中、彼は戰友が塹壕の一角で負傷したのを見、救はなければならぬと思つて、勤めることは勤めたが、その時、恐怖と嫌忌との感情のために氣分が惡くなり、ふら〳〵になつたさうだ。健忘症は、この事あつて後に起こつたのだ。なほ、病中の彼の握力を試驗した記錄は四十キロ——普通の人の記錄は百キロ——であつたが、記憶恢復後一時間內は九十キロ、その後、幾許もなく百五十キロになつたさうだ。

もう一つ、マクドウガルの取扱つた患者の例を紹介する。これは前記の二例とは、やゝ趣を異にするものである。

B軍曹は、性格も立派、相當の教育を受け、かつ利口であつた。彼はフランスの戰場に出征中、妻が特に譴責さるべき性質の不貞の罪を犯かしてゐることを聞いたので、休暇を請願して歸國し、不貞の事實を調査して離婚の手續を取ることにした。この時、彼は自由の身であるのを幸ひに、往年の戀人との交際を溫めた。彼が、この婦人と結婚しなかつたのは、全く誤解があつたからで、決して彼女を心底から嫌つたわけではなかつたばかりでなく、今の妻と結婚したのは、愛情からといふよりは、むしろ先の女に見せつけてやる氣が、主もな動機であつたのだ。

彼は戰地に戻つた後、數ケ月目に、所謂「砲彈・震蕩」——自己の近くに砲彈が爆裂したために起こる種々の痴呆症のことで、激戰痴呆症といふ譯字もあるが、感服しないから、上記の直譯語を假りに使用する——この病に罹かつたのだ。彼の所屬の一隊が、慘憺たる砲彈戰に活躍してゐた時、一巨彈が、彼の近くで炸發した。彼は全くの失心狀態にはならなかつたけれども、それ以來、行動が亂れ、言語が異樣になつたので、本國へ送還された。外見上、彼には普通人と異る所はなかつたが、過去の或期間の記憶が、全く喪失してゐた。卽ち開戰前數ケ月の頃、彼が多少失意であつた時から、病院船を去つて岸壁に足をかけた時に至るまでの間の記憶が全然缺けてしまつたのだ。勿論、大戰のことは知らず、カーキー色の軍服を着てゐる自分の姿を見て驚いてゐるほどであつた。

彼は記憶喪失以前のことは、何事をも隱さず、明瞭に語つた。そこで、彼の親戚朋友は、手紙または會見によつて、彼の家庭の複雜な事情や、從軍中の經歷などを漸次に說明した。なほ、最初の戀人との關係を復活され、結婚をも約束された。また、戰爭の初期において、彼の弟が戰死したことを聞かされて、大いに悲んだ。——會て彼は弟の戰死を聞いて悲歎にくれたのであつたが、今は全くその記憶がないのである。——そこで、彼は一日も早く離婚して、先の戀人と結婚したいと切望したが、離婚訴訟の理由となるべき事件の記憶が喪失してゐるので、これを實行することはできなかつた。彼は今後の從軍を嫌つてはゐなかつた。また、戰場の怖ろしさの憶念もなかつた。

記憶本復のために、種々の手段が講ぜられた。彼の家や、出征演習の場所へ連れて往つたり、あるひは、彼が罹病前、戰地から親戚友人へ送つた手紙を見せたりした。しかし何等の效果もなかつた。或時、看護者は、この病狀を說明してやつたところ、彼は非常におもしろく感じたのだ。そこで、マクドウガルは催眠術を應用して見たところ、さま〴〵な過去の事柄を語つたけれども、健忘症になつてから後の事では、彼が乘つた病院船の模樣の幾許かを明瞭に語るだけであつた。さらに幾回、この治療法を試みた後に、マクドウガルは、別に見る所があつたのである。これは單純な意識分裂（もしくは脫離）ではなく、頗る强烈な抑壓に由るものであると。この抑壓の力は、催眠術應用中に現れる慾望、卽ち速かに本復して、離婚し、改めて結婚したいといふ慾望の隆起を壓迫するほどで强烈であつた。さうして、彼は、强健な體質と性格であるにも似合はず、烈しい頭痛と疲勞とに惱むのであつた。

マクドウガルは相當の期間、種々試探する所があつたけれども、抑壓力の何物であるかは不分明であつた。その後、B軍曹は、從軍以前の職業（軍務でないもの）に就いたが、記憶が本復してゐないから、離婚を爲し得なかつた。除隊されてから一年の後、彼はマクドウガルを訪うた。この頃、抑壓はやゝ緩んだやうに見えた。入院中の彼は夢を見なかつた、見たかも知れないが、これを記憶してゐなかつた。然るに今日では、戰場の夢に惱まされ、時には、短い間ではあるが、突然昏睡狀態になることもあるのだ。最近、彼は、往日の主人であり、今日また主人とする其陸軍大佐に接近してゐる。この事は、彼の從軍生活を回想させなかつたけれども、深い處に脫落した記憶に何等かの變動を起こさせたらしい。そこでマクドウガルは、今こそ催眠術を用ゐべき時であると思つて、これを試みたところ、直ちに效果があらはれ、喪失された記憶は、全く回復され、しかも覺醒時においてさへ、任意にこれを回想し得るやうになつた。おもふに從軍嫌厭といふ潛在意識が抑壓の主たる力であつたのだらう。さうして、この力の弛緩は、一年間の安全な市民生活と言ふことにも因らうが、一そう有力なことは、一年といふ時の經過が、彼の家庭事情に由來する苦痛の感情を弱めたことであつたらう。

以上の三件は、マクドウガルが、意識分裂の例として揭げた數項のうちから選んだのである。意識分裂、言ひ換へれば、意識の流れの一部分が脫落もしくは分離する過程は、一人の全人格の全く變換する形となつて現れることもあり、あるひは或期間の不能症となることもある。マクドウガルは、意識分裂と抑壓とは別物であると主張してゐる。果してさうであるか、また若しさうであるとすれば、兩者の關係はどうであるか。これは實にデリケートの問題であつて、いかに詳密な說明を聞かされたところで、なか〳〵容易にわれ〳〵の頭には入らぬものだ。これを適切に解釋することは、われ〳〵自身が、多くの實例を取扱つて見た後でなければ爲し得まい。だから、ここには、これに關して何事をも言はず、たゞ、マクドウガルの結論だけを紹介して置くことにする。

意識分裂といふ過程の特徵は、ヒステリー的不整調であり、この分裂無しの心理葛藤及び抑壓の特徵は、神經衰弱型の不整調である。人は外向的か、內向的か、いづれかの性質に因つて、無理な努力、心理葛藤、感情の震蕩などの場合に、どちらかの型の患者となる。外向性の者は、意識分裂的即ち不整調のヒステリー型となり易く、內向性の者は、神經衰弱型となる傾きがあると。かやうな心理過程につき、マクドウガルは、その著『變態

心理學綱要』中に、特に一章を設けて詳密に說述してゐる。筆者は、改めてこれを紹介する機會を得たいと思ふ。（完）

維新非常時と世直し運動

田村榮太郎

慶應二年德川幕府の長州藩征討の失敗は甚だしく權威を失墜した。邦人が支配の强壓の減退を感受した事は勿論であるが、在留外人も稍同一であつた事は、英國公使館書記サトーが、三年七月西鄕隆盛に「此度長州征討の樣、誠に柔弱の次第にて、彼の一國さへ不二破得一幕府、迚も日本を制御可レ致道理も無レ之」と話した事によつても明白である。將軍家茂歿して慶喜將軍職を襲ふたが、旗本からも豚一と綽名で呼ばれた者で、この人によつて權威を復活する事は不可能であつた。であるから會津藩主も慶喜の襲職には反對してゐた。德川幕府討滅を目的とする薩長の合流は、この幕府權威の失墜期の三年五月に成立したが、九月十五日大久保利通は島津久光の命を

啣んで、長藩品川彌二郎等と長藩に向ひ、二十一日には後藤象二郎は平和的な慶喜の政權返還建白書を持つて高知を發し、十月三日その建白書を幕府に提出し、六日には大久保と品川が岩倉村の中御門を訪問して岩倉具視とも會見し、八日には討幕趣意書を提出し、十四日には討幕密勅の請書を大久保、西鄕、廣澤、品川等が出した。この頃から京都を中心に伊勢の御札降りが初まつた、御札降りを八月からと記したものがあるが、當時の出版物には「慶應三年十月中旬より、諸神佛御降臨町名付」、又は「慶應三年卯年十月吉日、泰平の驗として、神々の降臨し給ふを左に印す」などゝあつて、十月から降初めたのが正しい。

伊勢太神宮の神符が降るといふことや伊勢踊や伊勢參宮、殊に御蔭參り拔參りは古い歷史があり、慶應三年に初まつたものでないが、その以前に於けるものは、主として凶作を豐作に轉じやうとする願望に基因するもので、御蔭參りなどや伊勢踊は、凶作の後に盛んになる、伊勢神符は御蔭參りに隨伴して降る、寧ろ神符降下によつて御蔭參りが初まる。著名な例は天保元年の凶作の時で、阿波の所々に御札が降つた、何者かゞ神符に團子又は油揚げを取附けて高い山の上に置き、鳥類に啄み去らせたのだといふ噂が當時專らであつたが、二百萬餘の伊

勢參宮者が諸國から出た。又其後の天保飢饉の後には京都で豐年踊があつた。示羊記に「此一兩日上中下京之輩、各着ニ綾羅錦繡一躍狂、不レ分ニ晝夜一、皆稱云、躍レ〳〵、不レ躍者損、負ナヨ〳〵云々、其群或以レ千數レ之、躍ニ行合一無ニ口論一相互躍過、前代未聞」とある。慶應三年十月の御札降りと踊は、不作のためこの前例を襲ふたものではあるが、幕府權威の衰退によつて、衰退の程度に比例して擡頭した處の民衆の勢力がこれに合し、富豪階級に對する貧民階級の鬪爭「世直し」「打毀し」の變形となつたのである。著名な世直しの例を擧げれば、室町末期の德政一揆に類するものゝ輕微なものと云へる。然してこの御札を降らせた主謀者は、長州藩の品川彌二郎だといふ事であるが、品川の性格や、トコトンヤレ節の作者である事や、前述の討幕の行動などを綜合すると、品川と信じていゝやうに思ふ、だがその目的は王政復古の前景氣程度の茶目氣分からであつたと考へられる。從つてその範圍も狹く、時日も餘り長くはなかつたやうだが、動搖を利用して、民衆が降らせ初めてから、諸所に傳はつて範圍も廣くなり、降る物も伊勢の神符ばかりでなく種々な物も降り、降る日も一箇所でも相違するに至つた。神符の降る家は必ず富豪であつて、貧民の家には全く降らない。神符の降つた家では、土足で上られてもいゝやうに疊は裏返しにし、神符は神殿を建立し、赤飯を拵へ酒は菰被りに柄杓を添へて置き、「よいぢやないか〳〵」と踊り込む者には御馳走をするが、それが三四日から七日間續く、終つて神送りには金欄、繻子、縮緬などで衣服其他を作り、男は女裝、女は男裝の假裝行列で大騷をする。少しく與へて多くの富を獲るといふブルヂョアのお賽錢的迷信を、プロレタリアが巧みに利用したもので、民衆の均產的な運動と見られるものである。當時の民衆意識を知り得る落首を見ると、京阪の落首は頗る排江戸的であり、江戸の落首は排京都的であるが、この御札降りも京阪に最も盛んで、離れるに從つて漸次稀薄となつてゐる、江戸でも降つたが殆ど問題にならなかつた、中山道は木曾、東海道は大井川附近迄は盛んであつたやうだが、何處も同年末で終つた、朝廷から禁止令の出て、地方の官吏が壓迫した關係もある。御札が降ると述べたが、勿論降つたのではなく、夜中に屋根とか庭とかに置いてあつたのだ。伊勢の神符には長方形と劍形、その他出雲大神、金色の大黑像などもある、伊勢の神符の品切の場合に、他の物を代用したやうだ。

御札降りの頃は、幕威が全く地に落ちたといふ程ではなかつたが、朝廷の征討軍が幕府領を沒收し初めてからは、幕威は全く地に落ちて仕舞つた。殊に幕府領（旗本

領も含む）は、地方には更に兵備がなく、隣藩の兵備によつて秩序を保つてゐたのが、諸藩は恭順の名によつて降伏し、幕府領に何事が起つても拱手傍觀するに至つたから、全く無政府狀態に陷つた。幕府領内の富豪の財産は、幕威によつて保たれてゐた事は勿論であるが、こゝに至つて財産を保護するものを失ひ、この富豪と利害相反する民衆は、過去現在に於て蒙りつゝある苦痛を排除し、將來の生活を安定せんとした。その苦痛とする處の經濟的壓迫は、主として質地質品によるものである。富豪の財産を減少せしめると云ふ點に於て、「よいぢやないか」と軌を一にし、共に「世直し」とも云つてゐた。然し同じ世直しでも、後者は破壞を伴ふものであるが故に「打毀し」とも云つた。この打毀しの例を數例擧げて見る、右の通り貧民に共通する處の階級鬪爭ではあるがそれ〴〵の地方によつて異色もある。

慶應四年（明治元年）二月、征東軍の一隊東山道先鋒總督岩倉具定の一行が中山道を信濃に進んだ時、その二月二十三日夜に上野國多胡郡吉井宿在に近領の農民が集合し打毀しを初めた。其地方は幕府領、旗本領、定府大名の吉井領とが複雜に入込んでゐる處である。二十六日まで「打毀し」によつて、質地質品等を返却させたが、打毀しの範圍は政治的及び經濟的利害關係ある町村に限り、それ以外の地には踏出さなかつた。この吉井附近の農民蜂起が第一聲となつて、近隣へ波及して行つた。集合の口實は幕府の農兵過重にあつたが、行動は全く異つてゐた。同月下旬中山道板鼻宿附近に蜂起した打毀し團の集合の口實は、初め幕府郡代の菲政にあつたが、矢張これも「常に貪慾な大家に金穀を施させ、なほ債務者には返金せず借用證書品物を返附さする」と云ふ處に落附いて仕舞つた。三月八日東山道先鋒總督一行は西上州高崎宿に到着し、高崎藩主大河內輝聲は迎へて恭順の意を表し、裝銃彈藥及び一萬兩を獻じた。此時東上州に隣接する下野國梁田宿で征討軍と幕府脫走兵とは戰鬪を開始し、九日には脫走兵の敗走となつたが、その直後幕府領の農民が蜂起して打毀しを初めた。十二日東上州新田山田兩郡の貧農蜂起した。兩郡の富豪を襲ひ、桐生宿に迫らんとしたゝめ、桐生宿では七百兩を近村に差出して其難を免れた。續いて起つた勢多郡の打毀し團は、水沼村富豪を襲はんとしたが、早くも之れを知つた富豪は、近鄉十八ヶ村民の貸金を半減、質物は本主に返す約束をして、債務のある貧農を味方として防衞し得た。其他諸處にも打毀しがあつたが、三月東山道總督守執事の名を以て、上野、武藏兩國に「何分朝敵を鎭撫仕らぬ內は御政事向御行はれがたく候所、此節を幸として無賴の惡徒共

諸民を欺き徒黨を結び、無罪の富豪へ押入、金銀を奪ひ取り、或は難問を申掛候趣、以の外の事に候」と達した頃には、大體大荒しは濟んでゐたが、これによつて鎭靜したのではなく、その村限りに於て深刻になつて居たやうだ。これについては、最後に一例を擧げて置く。次に越後、岩代の打毀し及び一揆を略述する。

三月十五日北陸道鎭撫兼征討總督高倉永祐の一行が越後高田に到着したが、五月十九日征討軍は、戰鬪の結果長岡を占領し、長岡軍は同國加茂に退却した。この二十八日長岡領に打毀しが初まり、七月頃まで動搖してゐた。八月三日三根山、黒川兩藩、四日三日市藩は征討軍に降伏したが、村松藩は藩論二派に分れて、一部分は會桑藩兵と合して會津に走つた、時に領民蜂越したが、單なる打毀しではなく、大庄屋等村吏の交代をも要求してゐる。征討軍の攻撃に屈して會津若松城に降旗の立つたのは、九月二十二日の事であつたが、十月十五日に北會津郡荒井村附近の農民蜂起し、十六、十七日には全領民の蜂起を見た。男子は十五歳以上六十歳まで出で、其數は大小の組によつて數百人乃至千人以上に達し、各々打鐘太鼓等を鳴らして出動し、其組の鄕頭（大庄屋の類）を始め各村肝煎質店に亂入し、家財を持出して打破り、質地は無償返還させた、又自から村役人を改選したが、「德政」と大書した幕旗を押立て活動したのもある。楢原組の議定書によれば「世直し義一組切に相定」「名主役下鄕一谷惣立替」、「質物は田地は格別、外品は當年より無利足五ヶ年賦」、「貸金は當辰年より無利足十ヶ年賦」等見へてゐる、これは十月二十八日の議定である。この頃に磐城にも起り、續いて陸奥にも波及した。

最後に村々に於て、富豪に對する策が深刻になつて行つたかといふ事も見ねばならぬが、この資料は現在では頗る乏しい。上野多胡郡黒熊村の例を述べれば、打毀しの後ち、村民は屢々協議會を開き、富豪の處分を進めて行つたが、結局は强慾な富豪の財産を沒收して、一家族を村外に追放すると決議するに至つた。然し僧侶の仲裁で當人だけの追放と變更し、又更に當人が坊主になつて謝罪するといふことで落着し、村民一同の前で頭を剃られた、質地、質品、貸金は、勿論この前に無償で返還した。以上述べた打毀しは、白熱化せぬ限りは、全て夜間覆面で出動した。以上によつて、國家權力の强弱が、民衆運動に非常に影響を及ぼすものであることが理解し得るであらう。（終）

維新非常時に於ける神符降下事件や、それに續く狂熱的な伊勢詣りと、現代非常時に於ける種々の殺伐な事情やその反面の陽氣らしい東京音頭の狂熱的流行とを心理學的に比較研究

して見ることは、社會の動きに關心を持つ皆人にとつて緊要な問題でなければならない。（編輯者）

X 考

小野田幸雄

これから私の述べんとする事は、一つの參考資料であつて、まだ纏つた結論を得てゐる物ではないと云ふ事を豫めお斷りしておく。併し、そこから何か重大な眞理の發見への示唆があるかも知れない事を、僥倖するものである。

英語や佛語の單語に於て語根の根尾にXなる字を持つ、即ち語根の根尾が ks なる音に終る一團の語がある事を、吾々は見出すであらう。それ等の語と云ふのは、即ち——

〔英〕

〔ax〕（斧）　axle（軸）　〔ox〕（牡牛）
box（拳闘する）　coxal（臀の）　doxy（情婦）
fix（定着せしむ）〔fox〕（狐）　juxtapose（接置す）
lax（弛き）　luxation（脱臼）　lux（美麗）
matrix（子宮）　maxim（格言）　mix（混ぜ合す）
next（次の）　〔nix〕（水魔）　pax（接吻牌）
〔pixy〕（小仙人）〔pox〕（黴毒）　sex（性）
tax（税）　〔text〕（原本）　〔toxic〕（毒の）
vex（困らす）　vixen（ガミガミ女）〔wax〕（蠟）
〔yex〕（しやくり）proxy（委任状）　plexus（神經血管叢）
等々

〔佛〕

axe（軸）　boxe（脊闘）　〔dix〕（十）
faxer（定着さす）laxatif（下劑）　〔lexique〕（語集）
luxe（榮華）　maxime（格言）　mixte（混合の）
rixe（喧嘩）　sexe（性）　〔six〕（六）
taxer（定價を附す）〔texte〕（原本）　vexer（怒らす）
flextion（屈曲）等々

〔羅〕　texere（織る）等

此處に不思議な事は、此等の中、括弧したものを除けば他は總て其の内面に fix, fixer の意を持つてゐるが如くに思はれる事である。と云ふのは私ばかりの感じであらうか。即ち先づ第一に fix, fixer 其の語がXに終つてゐる事を見る。axle の本義は「車軸」であるから、兩端に車輪を fikse〔エス語。fix, fixer と同意。エスペラン

ティストである私は今後も屢々便宜上エス語を用ひます。」するものと解する事が出來る。axle の變じた axis（軸線）なる語が複數的な形をしてゐる事は、此の論を裏書きするものではあるまいか。

次に、box の bo は「打つ」即ち bati の意であらう。さすれば「拳闘」と云ふスボルトは互にくつ付き合つて打ち合ふ事、として解し得られる。coxal の al は形容詞表示の接尾字であるから之を除けば、「腰」の意は cox にある。ラテン語では「腰」は coxa, そしてこの co は英語の with ラテン語の cum エス語の kun であるから、cox とは胴と足とを繋ぐ部分と説明する事が出來る。漢字の「腰」の「要」が「カナメ」である點もこの論の一些證となるであらう。doxy の y は獨逸語の -chen, -lein 等と同じく愛稱接尾字であり、do は dos〔西語〕due〔伊語〕duo〔羅語〕du〔エス語〕即ち「二」の意であるから、それに X の付いた doxy の眞意は自づと明白である。

iuxtapose の juxta はラテン語の jungere（繋ぐ）の變じた junxta から來たものであり、pose は同じくラテン語の ponere（置く）の變じた posui から來たものであるから、此の場合は X のみに fiksi の意があるとは云へぬが、又一方より考へる時、かゝる fiksi の意を多分に有する語に特に X が保存されてゐる事は一考に價するであらう。次は lax であるが、一體 lr と云ふ音は極めて滑らかな、柔い、優美な感じを與へる音であるが、その爲でもあらうか、語頭に la を持つ語には、平な、柔な、從つて優しい意のものが多い樣である。例へば label（肌着）lad（若者）lady（淑女）lake（湖）lamb（小羊）land（土地）lap（膝）lawn（芝生）lay（置く）lazy（怠惰な）等〔以上英語〕lado（ブリキ）lameno（薄板）lano（羊毛）langa（舌）lanugo（産毛）larga（幅廣き）lato（板）等〔以上エス語〕斯樣に見て來ると lax が「滑かに柔かにくつ付く」即ち「弛き」であると云ふ説明も決して牽强附會の言ではあるまい。laxatif は腹を弛ます藥。母音 a o u には互換性があるから、luxation の lux は lax と同一と看做し得られる。實に「脫臼」とは骨が外れ弛む事なのである。

lux の la は lumière〔佛〕、lume〔伊〕、lumo〔エス〕の lu、illumination〔英〕の lumin の lu、即ち〔光〕の意である。「美麗、榮華、贅澤」とは「光が付いてゐる」と云ふ事に他ならぬ。次に、matrix は matri が mater（母）〔羅〕であるから特に説明するまでもない。此の語には亦、「鑄型、模型、紙型」等の意があるが何れも「子宮」の轉義に過ぎぬ。數學の術語のマトリック

スもこの「型」からの第二段の轉義。maxim の ma は magnus（大きな）〔羅〕の ma とみれば亦 fiksi の意がある様に思へる。

さて、次は mix であるが、此の語はラテン語では miscere、伊太利語では mescolare で ks の音は丁度その反對の sk の音と替つてゐる。これは實を云へば sk の方が元でそれがXと變じたものなのである。斯様に見て來ると mix の原語 miscere の mis は英語の mistake（誤る）の mis と同系統のものと看做し得られる。實に mix と mistake とは其の本質に於ては同じ事なのだ。「脱線・混線」と云ふ語を見られよ。斯くして mix が語源的には misc であるにせよ、其の意義の深部内面に於て fiksi の意を有する事は容易に看取されるであらう。next、pax に fiksi の義のある事は説明の要もあるまい。rixe の ri は re- と同じく反覆の意であるから boxe と同様な解釋法でよからう。

次に sex と云ふ抽象的概念は、かなり高等な解し難い概念で、從て seksajo（sexual commerce 性交）なる具體的概念よりは後のものに屬する。即ち云ひ換へれば、人は「性」と云ふ抽象的な語より直ちに「性交」なる具體的概念を連想する、或は「性」なるを語「性交」と同意語に用ひると云ふ事である。故にこれが fiksi なる意を有する事は改めて説くまでもない。英語の tax、佛語の taxe 從つてその動詞なる trxer に fiksi の意ある事も明か。ve! は悲しみの感歎詞であるから、それにXが付いて vex となるに不思議はない。處が此處に vexen、vexer なる vel とは正に正反對なる語がある、がこれは例のアンバウヴラードを以て説明されるものであらう。單語の形態に表れるアンバウヴラード、即ちアンビヴレンツに就いては後日亦稿を改めて論ずる事にする。

flextion は「ゆるやかに柔かに付く」の意であらう。實際fl に始まる語にはゆるやかな、柔かな、ふわ〳〵した感じの語が多い。例へば、flageoler（よろめく）flagorner（媚ぶ）flairer（嗅ぐ）flamber（燃ゆ）flâner（ぶらつく）flasque（ぐにゃぐにゃせる）flétrir（枯らす）fleur（花）fleuve（流れ）flocon（薄片）florir（榮ゆ）flot（潮）flotter（浮く）flûte（笛）等〔以上佛語〕

又 pro は「前」或は「第一」等の義であるから、それにXが付いて「委任狀」となる理も、又 pl は「平滑」の義であるから、それに x が付いて「神經血管叢」となる理も自づから理解し得られる。texere は絲と絲とを互にくつ付け合ふ事として説明出來ないであらうか。

さて、私は余りに言語學的な問題に浮き身を俏し過ぎた様だ。然しこれも總てはxが fiksi の意を有すると云

ふ事の證明をしたかつたばかりである。此處に序ながら猶一つの大きな、この論に對する裏書きを書き止めて置かう。と云ふのは外でもない、此等xに終る動詞が總てfix, fixen と同樣他動詞になつてゐると云ふ事實である。(英語は多く自他動兩樣に使ひ分けるので都合が惡いが、佛伊西エス語等に於ては正しい。)

斯樣にxに fiksi の意が根强く食ひ付いてゐるのは一體如何なる譯であらうか。此處で吾々はXなる文字の形に注意する必要がある。そも〳〵このXなる字はギリシヤ文字χ(khi)から來たものであり、χは「カイ」「キ」等と發音される。(但Xの音は ks はより來たのであらうが。)そして又吾々は此處に「カイ」と發音するところのギリシヤ語 kai を見出す。而も kai は英語の and であり、從て十(プラス)の意である。見られよ、十はXを四十五度だけ回轉させた形なる事を。いや强ひて回轉など云ふまどろつこしい事をさせるまでもない、同じ數同志の十の記號、卽ち乘法記號×もある。一體此等一連の記號の不可思議なる關係は、吾々の無意識面に於て如何なる意味を持つであらうか。それは fiksi かそれとも又?

この疑問に答へる前に私は、雜誌「犯罪科學」第一卷第二號所載の丸木砂土氏稿、「春の基督」の一節を引用しやう。卽ち同誌第六十一頁に

「十字架は、耶蘇キリストの象徵であり、キリスト敎の旗印であることは、誰も知る通りだ。

ところがこの十字架が古代の性器崇拜の象徵に過ぎないとするキリスト抹殺論も、すでに古くから世に行はれてゐる。日本でも幸德秋水が眞つ先にこの說を紹介してゐる。先づ十字架の縱の柱は、太陽であり、男性である。橫の棒は地面であり、女性である。(キリスト敎はこれを以て、縱の棒はキリストの處刑の時に縛りつけられた柱であり、橫の棒は死および復活を意味するものと解してゐる)然し十字架を以て單に男性に對する崇拜のみに考へるのは誤りであらう。女性である橫の一本も考慮に入れなければなるまい。そこで十字架はもつと男女交錯した象徵に解するのが、妥當であらう。十字架の一種には鉤形のものがあつて、日本でもある神社の紋になつてゐるが、これは火の形ださうである。卽ち縱の一本と橫の一本とが、互に揉み擦り合つて、そこに火を生じたと解す人がある。火は萬物の源だ。生々發淵にそこに一切のものを生じる男女の情火であらう。

してみると十字架は、一切の源の形であり、その前には、あらゆる穢れも卑さも惡もない、公明なる天地の正しき形である。恥ることなき男女の姿の表象である。決して多くのキリスト抹殺論者の唱へる如き、單なる異物崇拜には止らない。

一方から考へると、キリストを縛りつけた一本の柱は男性

の表徴として、女性の象徴である土の中に打ち込まれてゐる。云々」

丸木氏も云ふ通り、十字架性器象徴論には、精神分析家も直ちに左袒する譯にはゆくまいが――キリストなる人物の存在と、その十字架上悶死說が眞なる限りに於て十字架は矢張り刑具の十字架と見るが無難――然し此處に吾々の見遁してならぬ事は、縱横二本の棒の交合を見て常に直ちに男女兩性を想像し、以て性交を空想するに至る人間無意識心理の機構である。げに本誌第四號に於て、岩倉氏の譯されたクラインパウルの言にもある如く人間は「棒を見ても穴を見てもその事に考へ及ぼさずには居られぬと云ふ誠に困つたもの。」であるのだ。（自然語名詞の男女性分類の鍵は實に此處に存する。）

又、丸木氏の云はれる「十字架の一種の釣形のもの」とは卍（マンジ）の事であらう。これはトーテムの名殘ではないかと云ふ說がある。獸類交合構圖の模様化されたものと見る時、此處に亦吾々は性的空想の無意識界を見出す。情炎と見るも亦結果は同じである。谷崎氏の名篇卍を見られよ。

さて、いよいよ此處で以前の＋×に復る時が來た。プラスとは二個のものをくつ付けて一つにすると云ふ樣な意味合ひであり、掛けるとはこのプラスなる操作の連續的なるものゝ謂である。何れにしても、その奥に陰陽男女兩性に關する無意識空想が潜んでゐやうとは、＋×の發明者ヴィエタもよもや氣付きはしなかつたであらう。

斯くして＋×十卍（巴もこの類）等一群の眞意を解し得た吾々はXが一種のトーテムの如くに取扱はれ、sexに用ひられ、從つてxの如き意を有するに至つたのではあるまいかと、考へざるを得なくなるのである。Xが？の同意記號として用ひられるのも、單にXが方程式の未知數記號であるからとの理由ばかりではあるまい。單にその意味のみならばYでもZでもよい譯だ。これを「習慣」とか「約束」とかを以て辯駁しやうとも、猶未だしである。何故に「習慣」として特にXが用ひられ、YやZが除外されたかを考へねばならぬ。斯くして思ひ此處に至る時、性的空想の如何に根深いものであるかをしみじみと感ぜずにはをられない。

（附言）　大空の象徴的意義に就て

本誌前號に於て則近氏が、大空の象徴的意義に關し、それが父と云ふ基本的象徴以外に、ある場合には物體をも抱擁する球體と云ふ意味に於て、子宮をも象徴することがあるのではなからうか、と疑問の矢を向けて居られるので、此處にいさゝか證明の意味に於て、單語學上よ

りこの説の正當なる事を說明して見やうと思ふ。

先づ漢字の「空」なる文字の構造に注意の眼を向ける必要がある。啓成社の「大字典」にも

〔字源〕形聲。竅(あな)也。故に穴冠。轉じてムナシキ義。工(コウ)は音符。

とある如く、全く「空」は「穴」なのである。穴が女性々殖器の象徴である事は精神分析學のイロハであるから、大空が子宮を象徴す事はこの一事を以てしても證明が付くであらう。從て、之を以てすれば、男性々殖器の象徴なる飛行機、飛行船の大空に飛ぶと云ふ事の、性交象徴なる理が一層明白に領けるのである。

一體「穴」なる文字の意義は、と云ふと、

〔字源〕會意形聲。ウと八の合字、上窒のと。ウは家、八は開けて入る義を示す。且つ八の音符。轉じて廣くアナの義とす。文字構成上冠となりて穴冠(あなかんむり)といふ。穴の字を取る字は多く深遠なる義、又窺ひ見る等の義をもつ。

と「大字典」にはあるが、精神分析的に云へばウは性殖器であり、八は性殖口であるのだ。

次に「空」は西洋語では如何と云ふに、佛の ciel 伊西の cielo 等が何れも男性名詞である中に、ラテン語の caelum 露西亞語の nebo が中性名詞である事は非常に注意すべき事であると思ふ。

又、「空」は「ソラ」であると共に「クウ」であり「あく」でもある。「クウ」や「あく」は正に穴の本質だ。次に揭げる一連のエスペラントの單語の形態と意義とは、此等の關係を一層明かに物語つてゐる様に思へる。

女性象徴の語——kavo (穴), kovi (孵す), kuvo (大桶), vaki (空いてゐる), veki (目覺ます), fako (區劃) paki (包む) 等

男性象徴の語——kabo (岬), kapo (頭), kubo (立方體), beko (嘴), piki (刺す) 等 (完)

(一〇六頁末より)

この文化的政治的侵略の競爭は、所謂帝國主義運動となり、これによつて卷き起こされる戰爭を避けんとして、『民族自決主義』が唱へられたが、これも自決國家の分立となり、却つて戰爭の危機を醸し出す様になつた。即ち民族意識は社會結合を單位とする平和的の、又は武力的の鬪爭狀態の意義であつて、近代に於ける民族意識は資本主義的組織それ自體の行動に要求されたもので、こゝに戰爭の危機を胎んでゐることを論じ、最後に軍事組織の成立と發展を氏一流の自由な論法で說いてゐる。(完)

エマスンの戰爭論

大槻憲二

米國の大哲エマスン R. W. Emerson (1803—1882) の論文は一時わが國に於いて非常に廣く讀まれたが、現今の青年たちはあまり讀む機會を持たないやうである。併し現今アメリカに於いてはエマスンの思想を再吟味しようとする傾向が著しいらしく、筆者も二三その方面の著書を丸善に於いて瞥見した。こゝに紹介する『戰爭論』は一八三八年ボストンに於ける講演であるが、その公刊せられたのは一八四八年である。この論文はその「國際會議の提案」(一〇二頁上)を試みてゐる點に於いてウイルソン大統領の思想上の先驅として意味が見られないことはない。勿論、ウイルスンの思想には或はカントの平和論やその他も影響を及ぼしたことであらうが、歴史的關係をエマスンとウィルスンとの間に求めることは一つの興味ある題目を提供する。況んや米國と國際聯盟との兩者に特別の關心を有する現代日本の我々國民は一層の興味をこれに寄せざるを得ない。

エマスンの戰爭論には、彼の哲學者としての特徴が、やはり遺憾なく現れてゐるが、まづその

一、理想主義、觀念主義者らしい口吻は、「思想それ自身は時代である。……」(九七頁上)以下の條、「萬國の歴史が賢者に與ふる……」(九八頁)云々の條、「いづれの日か諸士は或人の頭に宿る或る思ひ切つた思想……」(九八頁下)云々の條などに認められる。

二、從つてそこには英雄主義的色彩が見られる。例へば、「戰爭の魅力が……」(一〇一頁)の條に於ける如き……。個人主義的色彩が見られる。例へば「この事は議論では駄目だ。……」(一〇一頁)以下の條に見られる。實に華々しき個人主義の哲學である。併してこの個人主義は萬人に共通するものを特に明日に、强烈に表現し得るものと云ふ思想であつて、一般人と沒交渉とは見てゐない。

三、從つてそこには自助主義と自給自足主義とが認められる。戰爭を以て自助と(九四頁三行以下)と自足(一〇一頁十二行以下)との自然精神の人間的顯現と見てゐる。實に『自恃論』の筆者らしい口吻である。

四、さうしてこのやうな素晴らしい個人と觀念とは「神と自然」(一〇〇頁末)との顯現であつて、つまり、神と自然と人間とは三位一體をなすとの汎神論である。

要するに彼は人間の攻擊慾と戰爭とを或る意味で是認してゐるが、戰爭の愚蒙に就いての觀念が既に人類に於いて生じた以上、やがてその觀念の力に依つて戰爭の絶滅される日は遠くないとの樂觀的な結論に到達してゐる。觀念は物質生活

に依つて決定されると說くマルクシズムから見れば、正にブルヂョア哲學の典型であるかも知れないが、併し觀念を以て單なる上部構造として了ふことは、改造運動（觀念運動）の無意味を承認することになつて、結局自家撞着である。觀念は物質に依つて生れたが、併し觀念は現實を變へ得る限りに於いて變へる力を有する。それでなければ觀念はそれの發生の意義がない。その意味に於いて我々はエマスンの戰爭論に於いてなほ再吟味すべきものゝ存することを豫想する。原論文はまだ邦譯がないから、こゝにその大部分の譯を掲げて見る。フロイドやグラヅーの戰爭論と比較して一層興味がある。（以上譯者）

×

近世哲學の好んで研究するところは、人類發達の歩みを指示し、一人の心に生起した思想が若干の少數者に傳はり漸次一般に擴充し受容されて遂に既成の法則と制度とを打破しつゝ自ら世界に流布して新時代の出現となるに到る、其の跡を見守る事であつた。かくの如く歴史的に、一般的に、眺めて來ると、大抵の事柄はこれを近くに、或は只それ一つだけを見た時とは自ら異なる面目を示すものである。さうして殊に戰爭がそれである。戰爭と云ふものは今日では正氣の人間にとつては漸く傳染性の精神病だと考へられつゝあるが、而もそれがコレラかインフルエンザのやうに其處此處に勃發して、人間の內臟の代りに其の頭腦を感染せしむるのである。併しこれを遠い過去に、社會の未だ幼稚であつた時代に於て望見すると、連續する事件の一部分として其の處にあつて必然であるやうに見えるのである。

歴史研究者は上代年紀に於ける夥しい流血——神の名に於てする流血すらも亦一時的豫備的段階であつて、文化を促進したる事實渺渺たるものあるを知るに及んで、かゝる事實を諦める事も寧ろ速かなのである。戰爭は智力を育て、意志を活動に促し、體質を完全にし、危急なる瞬間に於いて人々をして否應もなく、その全力を出さしむるのである。凡て己れの規準に據らしめ、其の戰時的道德を押しつけ、斷じてまやかしものを容赦せず、全社會を震盪して遂にそが獨特の引力の指定する地點にすべてを引きつけねばやまないのである。卽ち分別と先見との價値を認むるに速に、かくてユーリシスはアキレスの次に位する事となる。戰場馳驅の間に錬り加へた勇氣と膽力とを具へた選良の主導者等は、仁惠、愛想、生活の豪華等の新たなる功績に依つて互に頭角を表はさうと勵み合ひ、下民亦その長上に倣ふのである。

戰爭も已に技術となつた強大な種族は、四隣を攻略して己れの技術と長所とを彼等に教へ傳へる。新たな版圖、

同族人員の增大、利害關係の擴大等は、また新たなる美質と能力とを喚起し、かくてこの民族は長大の歩みを運ぶ事となる。而して、結局多くの進歩のなし遂げられた時、そが總ての智慧と技術の祕義とはその攻略に依つて傳播せらるる。プルタークはその小論「アレクサンダーの運命に就いて」の中に、アレクサンダーの東方攻略を以つて歷史中最も光輝あり且つ面白い頁だと云つてゐるが、彼は己れの意見に就いて十分の理由を與へてゐる事も承認せざるを得ない。アレクサンダーの東方攻略は分立してゐた希臘諸國を一つの大なる利害關係に繫ぎ、其等の各政治家等より成る顧問會に對し一層該博なる公共的精神を注入するの効果があつた。このために希臘人の藝術と言語と哲學とは、波斯、アツシリア、印度等の痴鈍にして野蠻なる國民間に傳へられ農業民の學藝は牧人獵者の間に紹介されたのである。シシアン人、波斯人等は慘虐放肆なる常習より離れて一層開化せる生活法に就き、また初めて結婚の神聖を知る事となつた。都市を起すこと七十に及び、希臘の習俗と仁慈なる法律とを亞細亞の上に布き、反目する國と國を一法典の下に統合した。人類の諸民族は乃ち茲に相會し、初めの程は衝突してゐたのが後には相和ぎ通商し、遂には互に婚姻を交すに至つたのである。後代の軍事的運動にして同樣の好結果を生んだのを示すは極めて容易であらう。

かゝる種類の事を考へて見ると我々も戰爭なるものゝ性質と役目に就て自ら眞實なる見解を有ち得るやうになる。卽ち我等は戰爭が總て歷史の題目であり、最も著しい人物等にとつて主要なる事業であつたばかりか、現今に於ても世の中の半ばは、殆んど總ての青年と無智なる人々とは、これを喜んでゐる事を知る。且つ戰爭が異種族間に、また同種族間に於て個人の間に、常に盛んであるところでは、野獸性の默劇となつてそれは絕えず我等に示されてゐるのである。顯微鏡下に寫し出せば一滴の水の中に浮游し鬪爭する極微の搏噬者小分子の殺戮の小場面は展開する。而してこの小地球はやがて大地球の忠實なる縮圖たるに外ならぬ。

かく凡そ戰爭なるものが下低級なる種より上人間に至る迄見られると云ふは、そも何を意味するのであらうか。自然が胸中深く藏する偉大にして慈み厚き原則を、戰爭は明かに含んでゐるのではなからうか。その原則とは何であるか——曰く自助である。自然は自助の本能に生命を與へてゐる。卽ち生存と抵抗と自由と支配への努力であり、不斷なる自己擁護の確立である。而していづれの生物にとつても是等の事柄は非常に貴重なものであるが故に、生命を堵してもかゝる目的のためには彼等も絕え

ず力を盡くすのである。

併しかゝる原則はあらゆる生物の素質に必ず織込まれてはゐるが、要するに一本能たのに過ぎないのであつて、最初の者或は第一の者とも云ひ得るけれども、他本能の出現につれて直ちに變異し支配され、その力は有用無害なる高き道程に轉向し、かくてその窮極の意圖の何であつたかは明白となり、遂にその恐ろしき爪牙は拔取らるゝ事となる。自助の本能は甚だ早くから戰爭の野獸的形式を取つて顯はれ、他本能が未だ幼く暗弱あつた時代から漸次發達するに連れてこの本能も纔かにかゝる形を保留してゐたに過ぎない。爭鬪の如きは人類の愚かしい、幼稚な部分である。懶惰にして空虛なる心は、刺戟を求め、恰も總て子供等が猫を殺す如きである。牛攻め、鬪鷄、拳鬪試合の如きは、獸性ばかりが發達した一部社會の仕事である。わが國でも智的精神的機能の未だ敎化を受けざる地方に於ては、人々の夢中になつて語り合ふところは笞打である。誰が試合をやつたか、何方が打たれたか等と云つてゐる。人間でも小供でも野獸でも何によらず話してゐる者等の興味を牽く唯一の特質は好戰性と云ふ事である。それはどう云ふ譯であらうか。つまり彼等が男らしい活動や德に就いて他に何等の考へも持たず、忍耐と不撓の心と貞操と眞理の到達とを知らないからである。彼等を導いて敎養ある人士の間に交へ、人間理性の上に懸る大問題に就いて究め合ふ會話を聞かしめるがいゝ、彼等は敎會内に入つて來た印度人のやうに緘默し鎖沈するであらう。

戰爭に對して同感を持つと云ふのは幼稚な一時的な狀態であるのは、何よりも明かである。道德的感情は固より商賣、學問その他何によらず交際を促すものは相依り相助けて、これを打倒すのである。猶その上に商賣は人々をして互に顏を見しめ、海を超え或は山を超えて來たこの敵人も彼等同樣の人間であつて彼等の如く笑つたり悲しんだり愛したり恐れたりするのだと云ふ事を双方に知らしめ、また學問藝術、殊に宗敎は結合の紐を編みかくして戰爭は兄弟殺しのやうに見えて來る。否それに相違はないのである。總て歷史は我等の已に述べた如く、戰爭の描寫であるとともに、また實に戰爭の衰微と減少との記錄である。既に十一二世紀の頃、伊太利の都市は膨脹して強大となり人口も增加し、地方の豪族に命じて慘虐の府たる王城の備へを解き、來つて都府に住ましめた程である。法王等は宗敎的大年回祝典を宣し、その間一切の兵事は基督敎國内に停止せられ人々をして息ぬきの暇を與へたのは實に永遠の譽である。今日に於ける海運の如く必要だと嘗て思惟されてゐた毒害と苦役の使用

も文明の增進によつて廢止さるる事となつた。而して最后に、戰術は——一切の彈藥と軍法とともに——萬人の認むる如く戰鬪の度數と慘酷さとを減少したのである。

是等總ての事柄の爲めに戰爭は着々として下り坂に向ひ來り、我等は古代の獸的鬪爭を讀み知つて驚き呆れるばかりである。エリザベス朝時代に於てもたゞ歐洲の近海以外海賊は殆んど遍く行亙つてゐて、諺にも「水平線の彼方に平和はない」と云ひ、海賊の取引に舟出する水夫等は「掠められねば金目にならぬ」と云つてゐる。一五八八年には、當時の良き基督教信者として名高かつたカヱンヂッシュは世界一週の航海から歸つた時にハンスドン卿に宛てゝ次のやうに書き送つた。——「一五八八年九月、畏くも全能の神の許しに依つて私は世界の全圓を一週する事が出來ました。その間マジェランの地峽に入り、ブエナ・エスペランサ岬に依つて歸つて來ました。私は凡そ基督教信者に依つて發見された世界の總ての富源ならば何處でもそれを見屆けるなり或はそれに就いて多少の智識を獲しました。私はチリー、ペルー、新スペインの沿岸を航行して到るところで大いに荒しました。私は大小十九艘の船を燒き沈めました。私は上陸するところでは總て町や村を燒き荒しました。さうして海邊で見付からなければ私は隨分澤山な財寶を盜みました。私にとつて一番儲けになつたのはカリフォルニヤで取つた國王の巨船でした。云々」而も良善なるカヱンヂッシュは冒頭に於て誇りかに「畏くも全能の神の許しに依つて」と云つてゐる。

かゝる事實に對して我等は恥辱を覺えると云ふのは慥かに我等が多少の進歩をなしてゐるからである。總ての歷史は戰爭の——極めて遲々たるものであるが——衰微である。社會の今迄に得たる總てはせい〳〵衰微であつて、戰爭正義說は今なほ殘つてゐる。

幾時代の間（何となれば思想は時代の中に働き廣汎なる人間社會を躍動せしむるものであるから）人間種類は人間たらんとする彼等の努力のかゝる最初の野獸的形式の暴虐制下（テラニー）に——と私は云つて見やう——歩んで來たのであつた。卽ち彼等は幾時代の間、虎や鮫や、前記水滴中の獰猛部族の如き下等動物の本性を多く共有してゐた。彼等はかゝる形の善と惡とを殆んど總てとり竭した。彼等はその最惡の敵すらも望み得る程に迄も、固くこの墮落に執着してゐた。併し總ての事に終りある如くこれも亦終りがある。より善きものゝ永劫なる發芽は、かゝる粗暴にして卑しい表皮の下に實際掩はれゐた新しい力と新しい本能とを開展し、崇高なる問題は地球上のさま〴〵な隅角に於て、多くの幸福な魂を奮起させたのであ

る。憎しみのみあつて、愛は何故に存在し得ないか。愛はそれ丈の役に或はそれ以上の役に立たないものであらうか。戰爭のみあつて平和は存在し得ないのであらうか。

かゝる思想は何人の發明でもない、サンピエールのでもなければルソーのでもない。人間靈性に於ける一般的な潮の湧起である——湧起して最高に達し最も純潔にして素朴なる魂の內に於てそれは初めて判然たるものとなる。故に彼等は豫め我等にそれを告げたのであるが、我等も總て直にそれを見るやうになる。今やそれは極めて明白となり社會一般の思想となつてゐる。社會はこれを基礎としてその上に築かれる。それを說き明かし、定義するもの、その明白さの程度はとり〳〵に、またその實現の手段方法はそれ〳〵見る者の明智に應じて告げられてゐる。

思想それ自身は時代である。思想が少數の人々にとつて祈願と待望と共同と論義の題目となる程明白なるものとなつたと云ふ事、これ樞要なる事實である。已にこの事があれば、これに續く事實も亦少くないであらう。廻轉變革は逆行はせぬ。一度現れたる星は、地平線上にその半身を認むる者半球上に只一人に過ぎずとするも、昇り昇つて遂ひに他の多數者に見られるやうになり、萬人の眼の中天に迄登攀する。であるから、如何に久しく人々が平和の出現を信ぜざらむとするかは大した問題ではない。戰爭は已に片脚を突込んでゐる。それで平和の普遍はその確實なること文明の野蠻を克服するが如く、自由政府の封建制度を倒すが如くである。我々にとつて問題は「何時頃か」と云ふ事のみである。

平和案が多數の有識者にとつて空想的と思はるる事、多くの人達にとつて寧ろ嗤ふべきである事、眞摯善良なる者等はこの實際上の困難の極度なるに困憊せしめらるる事——これ等は實に自然である。彼等は云ふ、「こんな世の中は憐れな退屈なものだ。とてもいゝ事が出て來さうもない。平和だつて？　何、我々だつてみんな今平和ではないか。併し若し外國が無暗に我々の商業を妨げたり掠めたり、或はもつと甚だしく、沿岸に上陸して奪掠と殺戮とを行ふならば、君だつて我々に靜乎として殺されたり掠められたりしてゐろとは云ふまい。君は時世を知らぬ。君は人間の德性を買被つてゐる。成程靜穩は今や町に畑に眠つてゐる、お蔭で車の行くにも護りは要らず、農家は錠前を下すに及ばない。けれどもそれは萬人の完全な諒解に基く事だ、鐵砲と絞首索と獄舍とは背後に控へて何時でもこれを亂す者を懲戒しやうとしてゐる。君はかう云う事をみな忘れてゐる。勿論君の云ふやうなのが一等賢い考へだとは誰しも認めてゐる、若し世

界が皆教會で、萬人が善人で擧つてこの規則を採用するに一致したならばだ。併し一國だけが單獨でそれをやらうとするなぞは、どうかしてゐる」と。

まづ第一に我々の答へるところは、平和案が一般に得策であり永久に結構なものだと云ふ事は認めておき乍ら目下の世界の實狀を單に尊重するやうな反對說は、あまり問題としないと云ふ事である。最善なるものは眞實なるものでなければならない。さうして眞實なるものは——卽ち人間の內質の奥底に於て適合し喜ばれるものは——結局一切の障害と反對とを克服するにきまつてゐる。現在社會の享受してゐる善にして嘗ては此れのやうに問題だと云はれ、或は空想視されなかつたものは一つとしてない。人間の眞實なる利害と感興とはやがて彼等の要求となり確乎たる目標となるの傾向を持つてゐる。

併し更に又、萬國の歷史が賢者に與ふるところの敎訓は、信賴すべきは思想であつて境遇や事情ではないと云ふ事である。我々は皆、帆走軍艦（フリゲート）や帆桁や軍港や砲台島や造兵廠や屯田兵等を眺めつゝ大きくなつて來た。何處の外國でもいゝ、その所錄を一覽して見ると、英帝國、ロシア、イタリ、フランス等の尨大な殖民制度下に現在武裝しゐる者が幾千幾萬の數に上る事が分る。さうして地球上の平和は何たる高價の代償に依て維持されてゐるかを知つて驚嘆する。砲隊、艦隊、石造要塞、塹壕、築堤などの尨大な設置、哨兵の間斷なき巡邏、翩翻たる國旗、起床喇叭、消燈號砲、軍樂、行進曲の演奏、海陸軍歌の高唱等は嚴乎たる實在事と思はれ、十指に足らざる平和論者の薄弱な反對の聲などには、幾世紀を經るとも負かされさうにもない。

斯の如く常に我々は事物の外觀に威かされて、その全體の價値も奥底では我等の心の狀態に存するのだと云ふ事を觀破しないのである。かゝる忌まはしい軍備設置を樹立したのも實は一つの思想であつて、これを解滅せしむるものも亦一つの思想でなければならぬ。

いづれの日か諸士は或人の頭に宿る或る思ひ切つた空想を、或は秘めたる誓ひの世空事を聞かされる事があらう。一二年の後に再び來て見たまへ、堅固なる木材と煉瓦と漆灰とから成る大家屋の建立されてゐるのを見せられるであらう。百台の印刷機が百萬の紙片を印刷しつつある所を、或は人馬車輪がそのために奔走轉廻しつゝある所を見せられるであらう。かくの如く多大な物體が相團結して一人間の妄想を實施しつゝあるのである。かう云ふ事は毎日毎年我等の周圍に起るのであるが、思想は多く半ばに足らず、屢々軟弱なる虛言、片々たる政略、投機等を以てせらるゝのである。これを養ふ事よろしきを

得るならば、其等の物も無に歸する前になほ三四年の命脈をつなぎ得るであらう。併し一度眞理が現はれると——例へば西海に陸ありとなす一コロンブスの機智に依る認識の如く、勿論その思想を抱いた者は彼のみであつて他は總て嘲笑したが——忽ち船舶は建造され、船隊は編成され、スペイン、英國の各半はこれに靡き、殖民地は州は、國は、樹立され、忽ちにして半球は人を以て滿たされるのである。

我等はそれ〴〵の自由と能力とに應じて身の周りを取圍むのが常であつて、船であらうと書物であらうと大砲であらうと教會であらうと、兎に角其處は我等の眞の姿の物に於ける反映である。常備軍、造兵廠、陣營、絞首臺等は決して人に屬するものではない。其等は、今人類が奈邊に在るか、如何に惡逆放肆な氣持ちを具へてゐるか、何たる醜い隣人であるか、如何にその愛念が停止してゐるか、如何に低く彼の希望が惰眠してゐるか、等と云ふ事を示すべき索引たるに過ぎない。兵器藏と火藥庫とを建てたものは貧婪と憎惡とだ、打戰く唇と冷やゝかな憎しみの眼とだ。

併し人間の內なる些細の變化も、その境涯を變更するのは固よりである。彼の思想の些細な增大も、その感情の些少な和らぎも、他の人に對つて違つて來る。例へば彼が人間の魂に對する優しい親切に、感動し得るならばだ、さうしてまた萬人は別個の己れである事を感ずるやうになり、左右兩手の共に働くやうに彼等萬人に仲間入りするやうならばである。かゝる感情の昇り行くに連れて、外的事物は最も著しき變化を呈して來る。天幕は打毀され、軍艦は岸邊に朽ち、武器は錆び腐り、大砲は街頭の標柱となり、鎗は漁夫等の魚扠(もり)となり、進軍する聯隊は移住の隊商となり、ウォーバッシュやミズーリの泉に於ける平和的の開拓者となる。さうなるのが當然だから、さうなるであらう。銃砲劍戟はまづその見てくれがしののさばりから少しづゝ引込むやうになるに違ひない。それからお仲間の道具たちのみを引具して（執行官の絞首臺が今丁度さうであるやうに）全く隱遁して了ふに違ひない。それから最後に、丁度今日毒殺や拷問の道具がさうであるやうに、珍物の博物館へ納入されるのだ。

平和問題の一般人心の前に擧げられて以來、その正當にして有利なる事を確言するものは多少重みある反對に會した事は自然である。其內には屢々物數奇な人が——冬の夜長に田舍者が頭の固さを試めすため解かうとしさうな算術問題に類した樣な道德問題もあつた。主なる云草はかうであつた——善かれ惡かれ此の原則を採入れて終りまでやりぬけば矛盾の結果にぶつつかるか、或はま

た若し君が「此處までだ、是よりは先はいけない」と云ふやうな勝手次第な制限を與へやうとするのならば、そのやうな原則は棄てゝ了つて、攻撃戰を罪惡とし防守戰を正義とする萬人常識の制限に從ふべきか、どちらかたと。又かう云ふのもあつた——若し君が一切戰爭には赴かぬと云ふならば徹頭徹尾さうし給へ、山賊に會つても我家に於ても、一切自己防衛をやつてはならぬ。そこまで押通せるか。君の金庫は打壞され君の妻子は君の眼前で凌辱され或は殺されても、君はこの原則に固執してゐられるか。若し君がゐられると云ふならば君は强盜や殺人者を歡迎するものたるに過ぎぬ。そんな事になれば少數の殘忍なる兇漢のために良民は忽ち屠殺されて了ふ。

極端な平和說の行きつくところを假想して、その矛盾を示したこの攻撃に答へて、私は、かかる推論があまりに事實の一面のみを考量してゐることを云ひたい。卽ち平和論者の受働的方面をのみ、默從をのみ見て、その活動を見る事を忘れてゐる。併し恐らく單に掠奪と殺戮を被る事に目的や喜悅を感じて平和や博愛の理想を抱いたものはなかつたと云つてもよからう。人は何等かの能働的な目的、或はそれに似た動機、燃ゆるやうな愛なくしては、殉教の精神にまで立到る事はない。戈を採り戰を宣するほど頭の中に狂氣の殘つてゐないまでに道德的敎養の高まつた國民があるならば、それこそは愛と慈(なさ)けとを有ち、眞實な、偉大な、而して有爲なる國民である。さう云ふ國の事はもつと知りたいものである。併し、彼等は屹度、兩手をふらふらさせて茫然自衛を怠つてゐるやうな事はあるまいと思ふ。彼等は愛と譽れと眞理の人々であり、無限なる勤勞の人々であり、その感化は地の果にまで及ぶ人々であり、その一瞥一言は名譽と汚辱の宣告を與へ、いかなる力もその精氣と折伏の前にひるまぬものはない。平和說を抱いた國のあつた時、それによつて氣を惡くする國はなかつた事は慥かであらう。それどころか萬人は心の奥底にそれを喜び、兇暴賤劣な者すらもやはりさうである。この國に對して大刀をとるとも利あらず、人類はこゝに避難の隱れ家を得、彼等にとつて涙であり祝福であるのだ。

第二に、それが個人的行動に就いて極端な困難な場合に關する限りでは、私はさう云ふ場合は善良な正しい人々には殆んど或は斷じてないと云ふ事を云ひたい。であるから、私はさう云ふ危機に際しては何をなすべきかを語る程に用心深くはない。語るどころか全く知る事すらない。賢者は或る極端な事件の場合に如何に振舞ふべきかを豫め決定して、彼等の未來に於ける生存と行動とを束縛するやうな事はない。その時は自然と神とが敎へて

くれる。

そこで問題は自ら起つて來る。人心の此の新しき精進欣求に實と形とを與ふる方法如何。思想より事物に移すべき方法如何。

この事は輿論では駄目だ。個々人の意見、個々人の信念、個々人の切なる眞摯なる愛によつてのみ行へるのだ。何となれば、この理想實現への唯一の希望は洞察のいや增し行く事に存するからである。この希望の外にも一つ望ましいことは、これに伴ふべきは、教養ある人が内心の經驗と瞑想に於いて自發的に己れをかく教へる事である。——即ち、今や神は汝が動物の狀態から人間の狀態に移り入るべき時であると云つてゐる、また人間を破り裂いた惡魔に人間から離れる事を命じてゐる、人間も新なる衣を纏ひ己が心を正して歩み出でねばならぬと宣つてゐる……と。

次にまた平和主義は恐怖によつて實施さるゝものでもない。それは臆病によつては決して守護する事も實現する事も出來ない。總て偉大なる事は偉大なる精神に於てのみなさるゝ。戰爭はその魅力を失ひ平和は人にとつて尊重すべきものとなるに先立つて、戰爭に於て現はれた男らしさは平和の事に移し用ひられねばならぬ。

戰爭の魅力が、總て大砲の砲口を通じて、またそれに劣らぬ數多の攻圍の轟ろきを通じて、その他都市の劫掠、騎兵の試合、大軍の衝撃等を通じて示す一つの事がある。——即ち人間は己れの行爲に對して、財産と健康と生命とを以つて責任を負ふべきものだとの遍き信念である、また人は國家に庇護を求むべからず、何物をも望むべからず、自ら國家たり王國たるべし、他を怖れず、政府が彼の道に於て投與する機會と便益とは快く利用し、併し何物をも怖れず、たとひ政府、法律、條令等は壞滅に歸すとも、爲めに少しも力を失はぬとの遍き信念を示す、何となれば彼は己れの正になすべきところを他に求むるの要はないからである。

この自給自養が戰爭の魅力である、何となればこの自給自養こそは我等の人間てふ觀念において本質をなすものであるからである。併し別個の時代は來る、より眞なる宗教と人倫とは開かれる、かくて人は主義原則の統治下に身を置くのである。眞理と愛と自由の下僕として群衆の波に身動ぎもせぬ人間を見る。主義の人——即ち喇叭の吹奏、人爵勳位、護衛の隊伍等はなくとも、よし世人はその身の行動を顧る事はなくとも、人を恃まず私かに信ずるところを孤獨の中に歩調をそろへ結果如何を顧慮するなき人は何物に對するともたぢろぐものでないと私は考へる。彼は己れの自由を妥協し、己れの信念を抑

壓するに肯かふ程ならば、寧ろ門前に絞殺さるゝ方を望むであらう。私は最早わが耳朶に姦すしき數々の名を尊ぶ事をすまい。主義原則の人こそよりよき門閥とより強き意慾の君侯である。

平和を望む心は怯惰ではない。もし平和が贅澤家や臆病者のために守護され保有されやうとしてゐるならば、其れはまやかしもので、平和は卑劣だ。戰爭の方がましだ、平和は破らるべだ。平和を支持するのならば、それは英雄と同じ高さに達し、即ち己れの生活は己れに處致し、如何なる瞬間にでもそれを己れの主義原則に當はめ而も英雄よりは一歩を進めて他人の生命を求めないやうな、さう云ふ勇ましい人達によつてなされねばならぬ。またその智的洞察或はその道義的高揚に依つて己れの内的價値の認識に到達し、人間を羊同然に取扱ふ如き懶惰なる主義に依つて救ふ程に財産や己れの肉體は充分に善いものでないと考へるやうになつた人々に依つてなされねばならない。

この慈悲と神聖の目的がどう云ふ風に、或はまた如何なる機關によつて、實現さるるか、と云ふ事は問ふところではない。現在の我々の社會組織や事件の經路が向ふところのものは「國際會議」の提案であるのは疑ふまでもない。併し一たび人心にして主義原則の統治を待つやうになるならば、その意志發表の樣式は容易に發見されるのである。凡そかゝる企ての初められるならば、時と處とを問はず必ず其處には最も高き好適の途はある。希望の涙もてかゝる惠の種の畦中に蒔かるゝは人知らぬ片隅ではなく、封建の歐洲ではなく、謀叛なくては進歩の難き世に遲れたる屬領地に於てではなく、神と人間との物なるこの廣汎なるアメリカに於てである、森林は今や初めて開かれ、或は漸く開かれんとし、抑壓と罪業に滿てるあらゆる隅々よりの移民の流れを迎ふるこの綠地に於てである。一家族や少數人でなく人類全般が、こゝに何が起きるだらうかと云つてゐるに相違ないこのアメリカに於て、吾人は借問する、あるべきものは果して戰爭か或は平和かと。

現代日本諸家の戰爭論

長崎文治

本誌本號には外國人の戰爭論の紹介や批評は多く揭げられてあるが日本人の戰爭論は少いので、それをも問題にしたい

と思つたところ、幸にして理想社編輯發行の「戰爭論」（一九三三年）があつて、內に學界、陸海軍、評論壇等各方面の人々の論が輯めてあるから、これを採上げれば、簡單に濟むわけである。併し私に與へられた紙面は少いので、これ等總てを分析學的に批評するわけには行かない。たゞその論旨の大要を紹介し、本誌讀者の參考とするに止めた。本稿を時評欄に入れなかつた所以である。

×

小泉丹氏の『戰爭の原始的形態』は、相當に充實した生物學的見地からの論文である。先づ戰爭を、（一）相對抗する集團が、（二）統制下に、（三）意志的に、（四）武器を用ひてするところの鬪爭であると定義して、この原始的の形態を出來るたけ文化を遡つた所に見やうとするのが、この論文の眼目である。そこで第一に、吾々に最も鬪爭の多いと思はれてゐる野獸の生活に就いて觀察を行つた結果、割合に兇暴性が無く、却つて相互扶助的に統一のとれた集團を形づくつてゐる。唯、彼等は生命の不安の場合とか生活に必要な場合にのみ鬪爭するのである。そして、戰爭の起源は、生活に必要なる食餌を得る爲めに行ふ狩獵に由來してゐ、鬪爭が物件の私有の發達によつて深刻となつたといふ一般論を支持する。これに依つて、第二に人類の過去の時代に戰爭の始源を求め人類に戰爭と稱すべきものゝ現はれたのは青銅時代であるが、それ迄に至る過程を各期に亘つて考察して、一般に人類は好鬪的でもなく、又それかと云つて絕對に和平的でもない、唯殘忍及鬪爭行爲に赴き易い自然的性向を有してゐると觀、舊石器時代は、未だ激烈な鬪爭時代ではなく、主として個人或は小集團の遭遇戰であつた。新石器時代に入つて、知能が進み、生活程度が高まり、農耕、飼育が始まり、遊牧生活も起り、人口も增加して來て漸次種族の別が生じて來るに從つて、利害の鬪爭は相當激しくはなつたが、併しこの時代も、土地の侵入、家畜、婦女の掠奪に多少集團的の鬪爭があつた位で、未だ戰爭と稱すべき程のものではなかつた。然るに銅時代より青銅時代に亘つて集團意識が益々明瞭になつて來ると同時に、武器の發達が極めて躍進的になつて來、そこに征服慾は自づと生じて來たのであると說いてゐる。更に第三に現存野蠻人に就いて經緯に考察してゐるのは極めて妥當的である。

×

杉森孝次郎氏の『戰爭の倫理』は土田杏村氏も朝日新聞讀書欄で言つてゐた如く、例に依つて直覺力の銳さを示してゐる。それだけに或る人々からは、何を云つてゐるのか分らぬ、といふ非難を受ける餘地も亦充分にある。

この論文は、寧ろ感想風の論文と稱すべく、一全體として組織立つてはゐない。第一と第二とには、戰爭は個人的利己主義の否定で、全體の利害の爲めに個人の福祉は省みられないことを說き、第三に戰爭は、味方同志及び敵同士の協力を要求して來る點に於て、社會性があると說く、第四に。科學時代は、戰爭を强化し且擴大した、併し又それは遂に戰爭の不適地であるといふ事を說く。第五に、現代に於ける戰爭の可能性はナショナリズムに依るものである。ナショナリズムは現代政治の外延を決定する主力で、これを「條件とする國家を保存する現代に於ても、その國是即立國の原則は、進步的見地からして國際に妥當するものであることを正しいとする。そして正しく、自由なる世界國家への意志がその國家に內在する事を正且善なりとし、それ故國際主義及世界主義の發達は、唯物的に必然であり唯心的に必要であると見、世界が事實上ナショナリズム及人種主義の如きものを頑守する間は、正しき政治を行ふ爲めに戰爭は避ける事が出來ないとする說である。第六は、戰爭の心理的基礎が鬪爭本能にあると一應は言はれるが、併しそれは獨立に存在するのではない。必要と云ふ生活々動の條件が附加する事によつて生起される。又鬪爭本能は、スポーツ精神に依つて淨化される事は望ましき、倫理的價値あることであると述べてゐる。最後に『軍職と原則』を、例の難解な文章で論じてゐる。

×

中柴末純氏の『戰爭の哲學的意義』は、純粹に軍人の觀方を代表してゐるものであつて、『まこと』とか、『まごゝろ』を中心とした思索は、一の信念であつて、神道（かむながら）の精神を貫いてゐる寧ろ形而上學であり、『戰爭哲學』である。それ故にこれに對しては兎角の批評を述ぶべき筋合のものではない。氏は戰爭を『まこと』の衝突であり、二國が『まこと』を爭ひ、『まこと』の通ぜざる時武器を以て相爭ふ、これが戰爭であるとする。かゝる觀方からすると、まことの絕對性への論證が必要となり、それは自ら辯證法的展開を以て證明されるものであるが、氏は、これ迄論及してゐない。更に、『戰爭』の字の解釋は、この世界に於てのみ許され得べき獨斷である。

×

匝瑳胤次氏の『戰爭と科學』は科學の進步と戰爭への契機を、資本主義經濟機構の下に於ける器械化と、產業の發達に歸して、併しこれからの戰爭は、國內產業の總動員を以てしなければならぬから簡單に起るものではないが、一旦起つたならば極めて大規模な戰爭と、それに依つて生ずる慘禍、打擊は想像を絕するものがあらうと

述べ、最も廉價な平和保障としての國防は忽にする事は出來ないと云つてゐる。そして精鋭な最新式武器、進歩せる戰術の概觀を示して、その一端を知らせやうとしてゐる。

×

平田晋策氏の『わが兵術書の序言』は、クラウゼヴィッツの名著『戰爭論』の「戰爭は强力手段を以て行ふ政治の延長である」といふ原理を、最近我軍の軍事行動に照して、久しく政治と隔離せられてゐた軍人意識が、國策の遂行といふ思想として現はれて來てゐるといふ事を以て說明し、『政治的鬪爭者』の役割を、現代の軍人に課さうとしてゐる。そしてこれが最も妥當であることを日露戰爭の例にとつて、これは極めて、クラウゼヴィッツの戰爭法則に適合した戰術であつたと、米國海軍の兵術教官パイ大佐の言葉を藉りて述べてゐる。そして更に戰爭の指揮者の資格に迄論及して、膽力、體力、知力の三つを主なる條件として擧げ、就中、膽力を以て最重要のものとして、種々の實例を以て說いてゐる。最後に、近代の戰爭には、優秀な指揮官に、强大なる兵力が伴ふ事に依つて、軍の强味が增すことを强調して、論を結んでゐる。

×

馬込健之助氏の『クラウゼヴィッツの戰爭理論について』といふ論文は、主として、『戰爭は暴力の無限界的行使』であるといふ命題に就いて批判してゐる。クラウゼヴィッツは、戰爭を二箇人間の決鬪に還元してゐるが、これは明らかに觀念論的な考へ方で、戰爭は社會の土臺の上に生じたものであつて、社會から抽出した個人の決鬪と比較する事は誤りである（併し、實際に於ては、戰爭が在つた場合は、この觀方が甚だ都合よく民衆を昂奮と熱狂の中に卷き込んでしまふ。）而して、クラウゼヴィッツ自身も、絶對的に觀念論を守つてゐるのではない。「戰爭は他の手段を用ふる所の政治的關係の繼續に過ぎぬ」として、戰爭と政治には特別の倫理はないことを述べてゐる。併し乍ら更に亦、彼は戰爭には、『特別の文法』即ち、それ自身獨立した一個の技術があることを主張してゐる。これに對しても、氏は、この『特別の文法』も、政治關係の上に依存してゐるといふ事を種々な方面から論じてゐる。即ちこの論文は、クラウゼヴィッツの戰爭理論を檢討し乍ら、戰爭は政治の延長であると同時に、戰爭のもつ『特別の方法』が又社會進化と密接不離であることを見て、戰爭と政治との聯關の全面的把握を爲したのであつた。

×

正木千冬氏の『現代戰爭論』は、大衆が、經濟と戰爭との相關々係に就て、正しき戰爭の理解を爲す事が、世界を破局から救ふ唯一の途である事を述べたものである。而して、その爲めに歐洲大戰爭を一轉機として、變化發達して來た兵器及戰術を窺ふ要ありとして、機關銃、砲兵、戰車、飛行機、毒ガス、動力エネルギー、兵力材料の變化等を擧げて、一々進歩の跡を辿つてゐる。そして斯かる兵器の發明は、「社會の生産力、技術の一定發達段階から來るが、それが一旦軍隊に採用されるや否や、今度は武器が戰爭の決定者であり、戰爭の經濟的負擔の賦課者となる」と云つて、世界大戰の莫大なる戰費を、十九世紀以降の、他の戰爭と比較し、武器製造の爲めに行はれた國內産業の統制、從つて勞働力の强制、公債の累積等等、特異な戰事統制經濟を形づくつたのは、最高發展段階の獨占資本主義を示したものであると說いてゐる。最後に、これは、戰爭技術の進化を齎し、兵卒材料の變化を要求して、特殊技術者を必前とし、而して以後の戰爭は、機械軍團の戰爭となり、これは更に國內の勤勞大衆に武器の生産力を要求する故に、戰爭はピラミッド形に於て、僅少な機械軍團と、之れに補給を爲す國內大衆に依つて、戰爭は形づくられる。それ故に將來の戰爭は、ピラミッドの下部構造、卽ち國內大衆を擊破する事に依つて成功を收める事が出來る。この進化は、明らかに辯證法が敎へる處の、「發展が否定の條件である」といふ法則に當てはまると結論してゐる。

×

長谷川如是閑氏の『戰爭論』は、戰爭は一定の社會組織の發達を條件とし、その組織の發展過程に於て起る鬪爭であるとして、生物學的の、食糧や人口や性の問題から起る、所謂『生の鬪爭』と區別してゐる。（之れは總ての執筆者の等しく肯定してゐる所である。）而して、稍發達した人類社會に於ては生物學的の鬪爭は有り得ない。假令、或個人の意志によつて戰爭が起されたと見える場合と雖も、その背後には一定の社會組織の要求が働いてゐるのである。されば人類の戰爭は高度の社會組織形態（資本主義）を維持する爲めの鬪爭であると論證し次に戰爭發生の條件としての生産組織に論及して、一方の社會の生産組織が他方の社會の手段となる爲めには、必然的に戰爭が要求される。卽ち人類社會の戰爭は、生産組織の發達及それに基く社會的交通によつて、一定の經濟的發達を見た場合に生起する現象であると。それ故資本主義時代の戰爭は、被侵略國を資本主義的に開發する文化的及政治的手段を先驅とし、戰爭は之れが拒否された時の手段として繼起されるのであり、（九一頁末へ）

講座

材料的象徴と機能的象徴と

田内長太郎

前號の本欄に於いて私は象徴一般に關する講義を試み、最後に無意識作用に因る（卽ち抑壓の加はつた）象徴と、前意識に因る象徴とを區別し、アーネスト・ジョーンズが前者を象徴と呼び後者を「隱喩（メタファー）」又は「記號（エムブレム）」（J・C・フリウゲルと共に）「暗號（クリプト）」と云ふ名稱を以て呼ぶのが適當であらうと云ふことを提議しておいた。併し名稱は何れにもせよ、無意識な象徴と前意識的なそれとを區別することは大切である。……と云ふところで前講を終つておいた。

ところで、われ〳〵は暗號と云ふ名稱を用ふるにせよ、ジョーンズの所謂眞の「象徴」と云ふ語を用ふるにせよ、そこには一種類以上あることを認めざるを得ない。特に「材料的」象徴と「機能的」象徴とを區別する必要があるやうである。「材料的」象徴は有形又は外的の事物及び事件を取扱ふが（今まで述べたところの暗號はすべて、この種類に屬する）、「機能的」象徴は心の狀態及び傾向を表現する。これらの心の狀態及び傾向は、一時的性質のものであることもあるし、極端な場合には、殆ど瞬間的の性質のものであることもある（例へば、與へられた問題を解かうとする企圖だとか、眠りから覺醒狀態へ移る過程だとか）、あるひはまた、そんなに一時的性質でなくもつと安定した性質を帶びることもあらう。この場合には、象徴は心の恒久的、抽象的な特徴を示すやうに見える。例へば、本能、道德的の統制力、幼兒的な物の考へ方へ歸らうとする傾向、等。

さうした「機能的」象徴が生ずるといふことでは、概して意見が一致してゐる。だが、それらのもつ重要さを「材料的」象徴のそれと比較するに及んで、正統の精神分析學者達と或種の他の心理學者達との間に、大なる意見の相違が生ずる。この相違はフロイドの學派と以前に彼の追隨者であつたユング「Jung」のそれとの間におけるが如く、特に截然としてゐる。ハーバート・ジルベラー Herbert Silberer が案出した特殊な手法によつてまづそれが發見せられると、ユングはこれ幸ひと機能的象徴を

逃亡手段に利用した。卽ちフロイドの摘發した無意識の（ユングにとつては怪異な、不快な）、肉慾や幼兒性から逃げ出す手段にしたのであつた。その機能的象徵は間もなく彼の探究における興味の眞の中心となつた。そして彼の學的體系の特徵の多くは、その機能的象徵に關して出來たのである。ユングは、患者の個々の具體的な願望（特殊な人物または事物に對する願望）の研究はやらないで、一般的な心的傾向の象徵的表示を——とりわけ、リビドオの象徵を——至る處で探しはじめた。この「リビドオ」"libdo" といふ名辭は、フロイドがあらゆる多種多樣のすがたであらはれてゐる性的衝動を指して、終始一貫使用してゐたのだつた。（このリビドオの概念についてはまた稿を改めて述べるであらう）。その語がユングによつて心の創造力の總計を指すまでに擴げられた。かくしてそれはベルグソン派の活力 élan vital といふ名辭と多かれ少かれ同義語となつて來たのである。かうなると實際、具體的の性的動機についての力點を頗る弱めることになつた、そのかはり非常に廣い、やゝ神祕的な普遍的なものとなつた。卽ち哲學化した。この哲學化は精神分析學者達にとつて、人間の心にある性的要素の性質及びその重要さに對する粒々辛苦のあげ句獲得した洞察の殆ど全部を放棄することを意味すると思はれたのである。

ある具體的な、屢々繰返される例を取つてみよう。幾らか變裝した形で、息子の父殺し、及び、母親に對する息子のラヴを畫く神話や夢は無數にある——時をりこのテーマは、有名なエディポス神話におけるが如く、比較的おほぴらに表現されてゐることがある。ユング派の傳統に隨ふ多くの人々は、さうしたテーマの主たる重要意義が、原始的な、不都合な、不道德な傾向（卽ち「原罪」）を克服しようとする爭鬪の象徵としてのうちに存すると云ふ。フロイドにしても、それらの意義は或場合には十分に可能であると考へた。だが、第二義的な、比較的皮相的な作業だと考へたであらう。併しこの作業のために、その背後にひそんでゐる「材料的」象徵——父親に對する息子のありのまゝの憎惡、及び母親に向つたありのまゝの近親相姦的な願望——をわれ〳〵は忘れるわけには行かないのだ。フロイドには、その解析心理學者（ユング）達の機能的解釋が、初期のある一派の神話學者達の解釋と殆ど同じやうな意義をもつてゐるやうに思へる。——その神話學者達は當時流行してゐた空漠たる考へ方に從つて、エディポスのライオス王殺しは日出の闇黑に對する勝利であり、またヨカスタとの近親相姦的結婚は日沒に際して海もしくは大地へ太陽の沈み行く

やうに見えることだと解釋したものである。神話學者もユング派もともに、もつと重要意義ある、單純な、文字通りの意味に解釋するのが不快だからそれを回避しようとするのが斯る解釋の主な動機となつてゐると分析學者等は考へるのである。精神分析學者達が後年のユングの仕事の多くに、極めて愼重な疑ひの目を注いで來たのはそれがゆゑである。と言つて、その初期時代において、彼が精神分析學自體に多大の價値ある貢獻をしたこと、特に言語聯想の試驗の可能に對する彼の洞察によつて、また或種の早發性癡呆症患者に彼が率先して精神分析を應用したことによつて多大の貢獻をしたといふことに就いては彼等も齊しく認めてゐるのである。

方法及び視野における兩派の差異は時が經つにつれて擴がつて來るばかりで、兩者の近年の發達では、精神分析學と解析心理學とはお互が殆ど獨立した狀態にまで進んで來てゐる。ゆゑにわれ〳〵は、ユングの心理學の一層新らしい特色——例へば、心理的型（タイプ）に對する彼の苦心の說の如き——の吟味はしなくてもよからう。それといふのも、その說は後日になつて重要なものと分るかも知れないが、目下のところ、如何なる意味からも、精神分析學の所産とも、また精神分析的學說の特色とも考へられないからである。しかしながら、ユングの心理學には、象徴論に關係し前以て言及する價値のある點がまだ一つある。ユングは、アードラー Adler とちがつて、今なほ無意識の概念を利用して止めないのだ。しかしながら、彼の考へるところによると、その無意識は全部が全部個人の事柄ではない。その「個人的無意識」のほかに、またその上に、各個人は「集合的無意識」の分配を受けてゐる。そしてこの集合的無意識においては、單にその形式のみならず、內容もまた遺傳によつて決定せられるのである。この見解には、今日では多くの人から放棄せられてゐる、舊式の「生得」觀念の說が這入つてゐる。すなはち、われ〳〵の遺傳性は、一般的傾向、性癖及び才幹に限られはしないで、觀念そのものまでも或程度まで傳へ移されるといふことをそれは意味してゐるのである。もしもわれ〳〵がこの教義を受容し得るとすれば、さもない場合の困難な問題——一體何故に或種の想念がしよつちゆう無意識のうちに現れるか、また何故に象徴が殆ど何時も同じ意味を持つてゐるか——は無論片附いてくれるであらう。事實、或種の「最初の空想」"Primal Phantasies"（例へば、兩親の性交の洩れ聽きの如き空想もしくは去勢空想）の頻發と相似には、フロイド自身も非常に驚かされて、その結果、それらの空想は個々人自身の經驗といふ考方では說明しきれないと、彼も考へだ

してゐるやうである。しかし、他の多くの精神分析學者は、やはり次のやうな論據で、當面のその一樣性を說明しようとしてゐる、——それは人間生活の條件が同一であり、また基本的な本能の活動も同一であるから、すべての人間は共通した興味や希望や恐怖を必然的に奥深く藏してゐるといふのである。

民俗藝術の性的象徵

奥本島田

私の故鄉は新舞鶴の近郊で志樂村字泉源寺と云ふ處であるが、秋の實りが收穫される頃、氏神の祭りが行はれる。豐年にはこの村には盛大な催し物をし、にぎやかにお祭りが行はれる。その催し物の中に「杓子舞」といふ次の樣な舞がある。

「舞臺の一方から素足で頬かむりの男が着物をしりからげをなし、フンドシの處まで見せて出て來る。この男は擂鉢のレンギを兩手で陰莖の處に持つてゐる。數人のハヤシ手は横笛を吹いて（「杓子舞」といふはやし）、此の現れて來た男がレンギ（擂木）を上下に動かすのに合はせてゐると、やがて村の娘風をした女が美しい着物に赤いタスキをかけ、手拭を姉さんかぶりにして手に平たい杓子を持つて他の一方から現はれる。そして受身の態度ではづかしさうに男のレンギに對手して舞を舞ふ。始めは遠ざかつてゐるが笛の調子に合はせて次第に接近しつゝ（杓子でレンギの先をたまにコスツタリ、ヒツカイタリしながら）遠ざかつたり、接したりして終には接して娘の出た方へ二人共押入つてしまふ。男が押し入れる。笛も止む。役者は男女とも面を被つてゐる。

こゝに現れてゐる總ての象徵は甚だ露骨であるから一々說明を加へるまでもなからう。（完）

精神分析語彙（五）

一、高處恐怖症——高い場所に登ることを恐怖する症。さう云ふ傾向の人は却つて高處から投身するやうなことが多い。恐怖は墜落願望の抑壓のために生ずると解せられる。墜落願望は精神的墮落願望の象徵的意義を帶びる場合が多いと解釋される。

一、口唇時期——性感と心理の發達は乳兒が母の乳房を口唇に含んだ時期に第一期を示す。これを口唇時期と云ふ。次に乳汁の消化されて尿道に至りその粘膜を刺戟し、尿道期を

劃すると云はれてゐる。

一、肛門性感――尿道期の次は肛門期である。この期に於いて肛門の粘膜を刺戟して、肛門性感は發達する。この期に定着あるものは、所謂肛門性格者となり、主我的、潔癖、虐待的の三大特徴をその性格に於いて有すると、論ぜられてゐる。

一、肛門帶域――肛門に於ける性感區域を云ふ。

一、個人心理學――アードラーの自我中心の心理學を云ふ。宛も無意識中心のフロイド學を精神分析學と呼ぶ如く……。

一、固着――また「定着」とも云ふ。定着の條參照。

一、コンステラチオン――直譯すれば、「觀念の星座」とも云ふべきか。それ自身としては何の關係もない數個の觀念が無意識的に一定の聯絡を與へられてゐること。丁度、天空にある種々の、それ自身無關係な星の群に、何々座と云ふ名を我々が勝手に與へてゐるのと似てゐる。

一、互讓――妥協とも云ふ。相葛藤する二つ以上の心理要素が相互に妥協した形で意識面に表れることに依り、相互が半分宛の滿足を得ること。

一、催眠術――精神分析は催眠術の母胎から出たと云つてもいゝ。併しこの子は無意識取扱に於いてその母と共通性を有するが、その暗示法を排棄した點に於いて、鬼つ子である。（未完）

（一一三頁末から）

「併し先生の云はれる事は多少、官僚的に響きますよ。例へば先生の仰有る患者の抵抗と尿の色とは密接な關係があるとか、其の他種々の生理的反應を云々されたり、大槻氏の云ふ「勘」を殊更曲解されるのは、先生が分析學を此の勘に依つて曖昧な文學的なものにされる事を恐れる以上のものがあると云ふ事です。そのやうな誤解をした新聞批評家はゐたが、專門外の人ならともかく……。が、先生の場合は、醫學のゾマティシな理論に對するひけ目から、醫學と分析學との妥協構成のやうなものを主張してゐられると云ふ事です。」と。是は記者の分析だ。が、博士は之に直答せずに、斯學の研究者は、凡て小我を捨てゝ協力しなくてはならない事、研究所に對しては及ぶ限り醫者としての援助を吝まない事等を云はれた。辭去ぜんとして立ち上る前に、もう一度記者の本能を喚起して、室を見廻す。ガッチリしたデスク。其の上の患者のカード。ソファ。書物棚。椅子。廣さは十疊程であらうか？　所で妙なものがある。博士の背に當る壁面の戸袋のやうな出張りの上に、矢を番へた子供の人形が立つてゐる。これは露骨に性目的を象徴してゐる。患者が抵抗期にある時に、あの人形の事で頭が一ぱいにならなければよいがと、記者は要らぬ心配をしながら診療所を出た。

（寫眞は診療室内の古澤氏）

探訪

(二)

古澤博士の診療所

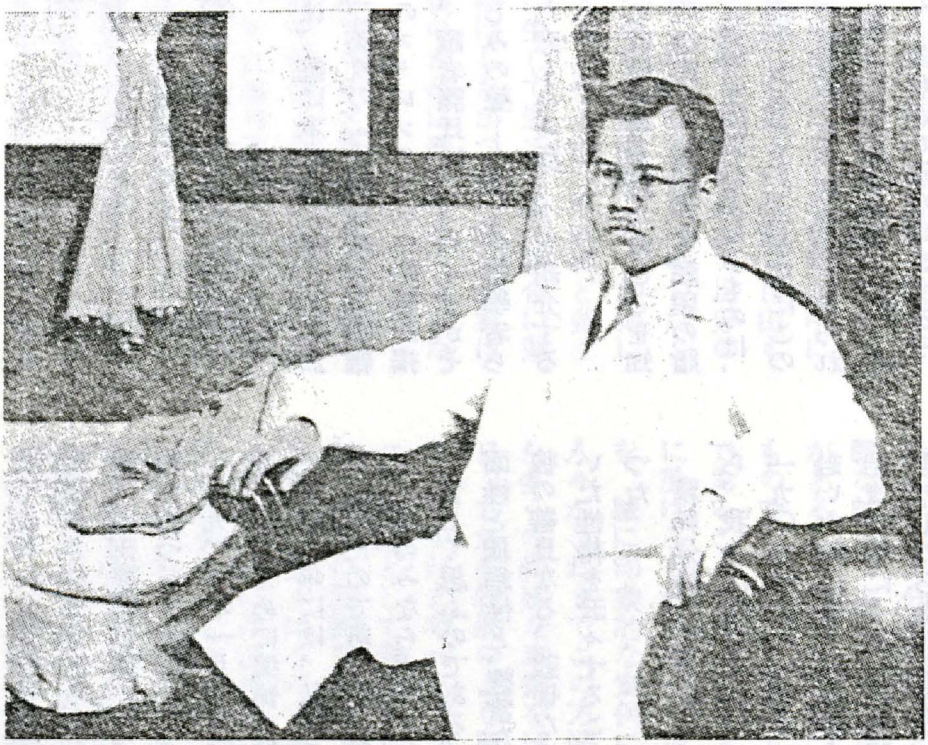
「精神分析」の記者が、精神分析診療所の探訪記事を取らうと云ふのだ。だから、讀者諸君には此の記事が精神分析學の提灯持ちに終始するのだらうと思ひ込まれる危險性があるやうだ。お提灯では何にもならない。探訪は先づ對手の虚を衝く事が大切なのだ。が、これは大變難しい。考へても見るがいい。相手とする古澤博士は十年近くの分析治療(プラクシス)の經驗家でゐられるから、大概の訊問法は、そのからくりを一から十まで知り盡してゐられる。虚を衝くにも、すきがあるまい。が、記者は健氣にも、此の分析の玄人(ヴエタラン)を訊問で立往生させる積りで、プランを練つてから、さて豫め電話で聞ひ合せて置いて出掛けた。

目蒲電鐵の田園調布で降りる。降りると直ぐに、驛の向ひの食糧品屋で尋ねると、店の主人は仔細に記者を睨め廻してから親切に道を敎へてくれる。必つと記者を患者と見立て、內心、お若いのに御氣の毒だ位に思つたのだらう。云はれた通り、坂を下りて今度は登ると、右手がもう診療所だ。平家建の瀟洒たる文化住宅で、餘り高くない屋根の爲か、親しみ易い感じだ。

ステーケル氏は、治療期中に分析士の家に轉嫁愛(ユーベルトラーグニングスリーベ)を起す患者に屢々出會ふ事を報告してゐる。だから、患者を逃さぬ爲には、分析士は滅多に轉居する事が出來ないと云ふ。さう云ふ傾向のある患者に代つて、記者が此の家を見ると、中々わるくないのだ。嚴めしい醫院や病院の類ひとは餘程趣きを異にしてゐる。構式張つた所がなく玄關が開放してあるから、劣等感の強い方々がベルの前で考へ込む必要がない。番犬が玄關先に控へてゐないから、犬フォビィの方々も安心なものだし、廊下も格別長過ぎたり、廣過ぎたりしないから、臨場恐怖症の方々も、孤獨感を起さずに、獨りで訪問出來やうと云ふもの。ビルディングに、文明の重壓を感じるやうな神經質な方々は、此の家が人間の形に相應しく作られてゐるだけでも、大層美しいと思ひ込む事だらう。ベルを押すと同時に博士が出て來られて、記者を書齋兼應接間に通される。

「大槻君の努力には、大變感謝して居るものです。」第一に、博士は斯う言はれる。博士はエネルギッシな血色のよい顏つきで、日曜日だからであらう、筋骨の張つた體をユッタリ着物に包んでゐる。眼鏡の奥に光つてゐる、眼の凝視力の強さはマニッシな程で、記者は聯想的に寧ろ、好奇心の強い小兒の執拗な瞠視とか、原始人の恐れる兇眼と云つたものをさへ考へた程だ。學者に於いてより、政治家、宗敎家に多い、是が非でも納得させずに置かないと云ふ激しい意志や、苦行者的(アスケティシ)な努力家の忍耐と云つたものが露はに見える。語氣は一層確信に充ちてゐて、

學者流の正則な口調で諄々と語る。語ると云ふより、証明すると云ふ方が似合ふ。詰り、博士は分析治療が實際上如何に著しい効力を發揮するかを、豊富な經驗、材料、記錄に依て、極めて懇切に說くのである。聽いてゐる內に、記者は次第に安心し始めた故であらう、折角立てたプランを何處かへ紛失した。何故なら、博士のフロイド說の解釋は、「精神分析」記者のと全く一致するからである。これは甚だ當然のやうで、極めて稀有な事實なのだ。例へば諸君——いや脫線致しては申わけがないから止める。が、記者は半面大いに失望せざるを得なかつた。之では新しい角度から、鋭い批判を加へて、此の診療所長を讀者諸君に紹介する事は出來ない。分析治療の有効な事なら今更改めて証明を要しない。が、もう晩い。博士は記者に向つて、フロイド說を完全に論証してしまつた。訊問どころではない。洒落のナッハフラーゲめすと、博士は記者に訊問の餘地を與へずに、完全に自由聯想に終始させてしまつたのだ。博士は記者の內に、精神分析學への社會的抵抗を假想して居た爲に正攻法をとつたのかも知れない。が、どうも之は一種の逆抵抗らしい所がある。



最後の五分間に、記者が早急に質問したところ次のやうに答へられた。

「分析學の大衆化は非常に困難であるが、重要な問題で、丸井博士が歸朝されたならば分析士の大量的養成が問題になりませう。現在の所では、時間と金の關係で、分析の恩惠に浴せるのは中流以上の極く少數者に限られてゐます。これは殘念なことです。」

「非常に意外なのは、性的疾患の爲に診療を受けに來る患者のない事で、斯う云ふ人等は反つて當てのならない新聞廣告に釣られるのでせう。多いのは姙娠後のヒステリイ性の輕い憂鬱症です。成績を最もよく擧げてゐるのは、强迫神經症で、早い時は二ヶ月位で終了します。」

「非醫者分析」（ライエン・アナリーゼ）は危險だと云ふ博士に記者は云つた。（一一二頁下段に續く）

內外彙報

フェレンチーへのフロイドの弔辭

フレンチー博士の長逝に就いては、既に本誌八月號誌上に於いて報道したが、最近着の獨文及び英文の『國際精神分析學雜誌』には、何れも巻頭にフロイドのフェレンチーへの弔辭が掲げてある。こゝにそれを全譯して、讀者諸氏に、フロイドがその逝ける高弟への恩師としての悲しみの聲——併し分析學者らしく個人的感情を昇華させて了つた悲しみの聲——を紹介するであらう。

『吾人は經驗に依つて單なる願望には何の費も懸らぬことを知つてゐるので、人みなはふんだんに心からの熱烈なる願望の贈答をやつてゐるのである。就中、これ等の願望の尤なるものは、長生きをしてゐて下さいと云ふ願望である。ところが正にこの願望のアムビファレンツは、東洋の有名なる小話の内に見られる。或るトルコ王は二人の賢者をして星を占はせたところ、その内の一人はかう云つた。『陛下よ、御幸福でゐらせまするぞ。星の面には、御親戚の總ての方々がお亡くなり遊ばすのを陛下が御覽なさるであらうと記されてあります』と。この賢者は直ちに處刑された。今一人の賢者はかう云つた。『陛下よ、御幸福でゐられまするぞ。星の面には陛下が御親戚の何方様よりも長生きされるであらうと記されてあります。』と。その賢者は澤山の御褒美を頂いた。實は二人とも同じ願望充足を口にしたのであつたのだが……。

一九二六年一月には私は我等の忘れられぬ友カール・アーブラハムのために追悼の辭を述べねばならなかつた。その三年前一九二三年には、私はフェレンチーの爲に五十年誕生祝賀の辭を述べたのであつた。然るに今日僅か十年の後に、私はアーブラハムのみならずフェレンチーよりも長生きをしたことを知つて苦しく思ふのである。彼の誕生祝賀の辭の中には私は彼の多面性と獨創性と、豐富な才能とを公然賞揚することは出來たが、彼の善良なる、親切な、總て人生の重要な意義あることには向いた性格を云々することは、友人として氣がさして云ひにくかつた。

精神分析と云ふ新しい科學の故に彼が私の許に來始めてから、我々は相互に多くのものを分け前するやうになつた。私が一九〇九年にマサチウセッツのウスターに紀念講演を乞はれて赴いた時には、私は彼も一緒に行つてはと誘ふた。毎朝講演の始まる前に、我々は大學校庭を共々に逍遙した。その日には何を話したらよからうかと私は尋ねるのであつた。すると彼は私のために要領を書き付けてくれたので、私はそれに依つて半時間の後にお話をしたのであつた。私の「五講」はこのやうにして彼の助力に負うてゐるのである。その後、間もなく、一九一

〇年にはニュルンベルリに學會が開かれた。その時、私は彼に勸めて、豫々我々が計畫してゐたやうに、分析者の團體を國際學會にすることを提案せしめた。この案は通過し、多少の改删を經て、なほ今日そのまゝ行はれてゐる。その後數年、我々は毎年の暑中休暇をイタリーに過し、後年私の名又は彼の名の下に公にされた論文の幾つかはその間に相互に交した會話の中に形をなしたのであつた。世界大戰勃發して我々の運動の自由も終りとなつた時に、彼はその期間を利用して私に就いて自分の分析を始めた。が、やがて彼が軍務に呼ばれることになつたゝめにこれも中絶したが、併し後になつてまた繼續した。如何にもしつくりと互に頼り合つてゐると云ふ感じが、それほど多くの共通的な體驗に依つて我々の間に生じて居て、彼が割合に遲く結婚した時にも、その感じは動搖はしなかつた。彼の妻君はなか〳〵感心な人であるが、今日彼のために喪を行ふことゝなつた。

十年前、英獨文の『國際雜誌』がフェレンチーのために五十歲の誕辰を祝ふ意味に於いて特輯號を發行した時には、彼の大低の著書は既に公刊せられてゐた。それ等の著書に依つてあらゆる分析者は彼の研究者となつてゐたのだ。併し彼の最も輝かしい研究成果、最も豊富なる思想はまだ發表されないでゐた。私はそれをよく知つてゐたので、祝辭の手紙の文末にその研究を私の手許に送つてくれるやうに書き添へてやつた。やがて一九二四年に、彼の「性慾研究」"Versuch einer Genitaltheorie"が出版された。この小著は精神分析學的と云ふよりは、寧ろ生物學的の研究である。精神分析に依つて得た見地や發見を性的過程の生物學に、否、廣く身體生活一般に、適用したもので、恐らく精神分析の適用としては從來なさられなかつたほどの大膽な試みである。中心思想としては、本能には自己保存的性質がある、外的障害に依つて失はれた狀態を恢復せんと努力するものであることを強調してゐる。象徵は非常に關係の古いものであることを示すものとして認識せられた。心理的特徵が身體に於ける古代的變化の痕跡を如何に保存してゐるものであるかを、誠に印象的な實例に依りて證明した。この書を讀むものは人々がこれまでこの方面に於いて全然氣付くことの出來なかつた多くの特殊な事實を理解することが出來るやうになつたと信じ、また生物學のより廣汎な範圍に深い洞察を持ち得るやうになりさうだと考へるやうになる。今日に於いてはまだ信賴し得べき認識として受容せられ得ざるものと、一種の科學的想像に依つて將來の認識を豫想するものとを區別せんとすることは無駄である。我々はこの小著を閉づると共に、かう云ふのである。これは一度には決められない。やがてまた暫くたつて讀み直して見ようと。これは私一人の感ずるところではないのだ。何れの日か、フェレンチーの豫言したやうに「生物分析學（ビオアナリーゼ）」が擡頭するやうになるかも知れない。その時には「性慾研究」はその出發點となるわけである。

このやうに立派な仕事を完成した後に、君は漸次に我々の仲

間から離れて行つた。アメリカに於ける一期の仕事を終へて歸國して後に、彼は段々一人で退いて仕事をするやうになつた。彼はそれまでは分析學界の仕事と云ふと、何でも先立ちになつて働いたものであつたが……。卽ち我々は、彼が唯一つの問題に沒頭してゐることを知つたのである。患者を治療し健全にしてやることの必要が緊急になつて來たのだ。今日の我々の治療法ではまだ到達し得べからざる目標を、彼は恐らく目指したのであらう。盡くることなき溫情の泉から、彼には確信が生じたのである——幼時から愛情に飢えてゐる患者に十分の愛を與へたならば、一般に思つてゐるより以上の事を爲し得るとの確信が……。で、彼は精神分析の範圍內に於いてこれを如何にして實施すべきかを發見しようと思つたのだが、多分それでは分析者仲間に贊成されまいと思つて、自分の方法が成功するまで離れてゐたらしいのである。彼の選んだ道は何處に導いて行つたであらうかは、我々には分らない。彼はそれを最後まで突きとめるに至らずして他界したからである。漸次に重い肉體破壞の過程が彼に現れて來た。この過程は彼の生命の上に既に幾年もの間、暗い蔭を投げてゐた。彼は六十歲になる直前に惡性の貧血病を惱んだ。斯學の歷史に於いて彼が忘れられ事があらうとは信ぜられない。

獨文「國際雜誌」第三冊

一、フェレンチーへの弔辭（フロイド）——右に飜譯紹介したもの、原文。

一、フェレンチーへの弔辭（P・フェーデルン）——六月十四日ギイン學界に於ける追悼會席上にての弔辭の全文。

一、男根期研究（ジョーンズ）——一九三二年九月ギイスバーデンに於ける第十二回國際精神分析學總會に於いて述べられた講演を更に敷衍したもの。さきに、英文國際雜誌に發表せられたが、今後はE・ホムブルガーに依つて獨譯せられたもの。婦人の性心理的發展段階上の一時期への精到なる研究。

一、躁鬱狀態の心理（ヘレーネ・ドイチ）——ギイスバーデンに於ける講演。

一、膣の非認（在シカゴ。カーレン・ホルナイ）——婦人に特有なる性器的不安の問題に關する一研究。英文國際雜誌第二冊に發表せられた論文。

一、女性問題に就いて（ベルリンのJ・L・ド・グロート）——女性心理に對する精到な研究論文である。

一、陰核自慰と男性器嫉妬（ブダペストのF・ハン・ケンデ）——一九三二年五月ハンガリ學會に於ける講演。

一、自我本能の色情的要素に關する二つの覺書（ブダペストのミカエル・バリント）——「順應力と被教育力」と、「身體的起源及び心理的起源の身體的病氣」の二章より成る。

一、早發性痴呆症者の視覺的錯覺（在仙臺、古澤）——十九歲

になる早發性痴呆症患者のさま〴〵の興味あるコムプレクスを分析し、殊にその視覺的錯覺研究してゐる。邦人にして同誌に寄稿したるは、氏を以て最初とする。

英文「國際雜誌」第三册

一、フロイドのフェレンチーへの弔辭（英譯）

一、心理的主題の二重表現の問題（在ギイン、イェーケルス）、——夢に於いても、神經症候に於いても、幾度も反覆される行り損ひに於いても、一つの主題が二つの表現を得てゐることを論じたもの。既に「イマゴー」誌本年度第一號上に發表せられたものゝ飜譯である。

一、遊戲（芝居）現實及び攻擊慾（在ロンドン、MNシャル）——戲曲の心理分析としてなか〳〵面白い論文である。

一、分析新技法（在ベルリン、ライク）——フロイドが「非醫者の分析可否の問題」てふ大論文を書いたのはライクの分析辯護のためであつた。その人が分析技法を論ずるは、我々に興味がある。ライクは分析時に於ける分析者の「驚駭」の必要を主張してゐる。既製の知識を以て臨まず、虛心坦懷にして患者の心につれて分析者の無意識から湧上り來る自家經驗との一致としての「驚駭」の重要を說いてゐる。

一、超自我と性（在ギイン、ギッテルス）——男性と女性との區別又は性別の拒否に於いて超自我が如何に大きな役割を果してゐるかを論じたもの。

一、ユダヤ教の儀式の分析研究（在ロンドン、イーダー）

一、自殺の精神分析的研究（在カンサス、メニンガー）自殺心理の組織的な研究である。自殺流行のわが國現今、紹介の必要ある好論文である。

印度に於ける斯學の進步

印度に於いては一九二二年一月に精神分析學會等が創立せられて以來、斯學への興味は漸次に增進した。斯學が性慾を問題にするが故に被る誤解と抵抗とは、餘程少くなつて來た。ダッカ、ミゾーン、及びブンジャブの各大學に於いては斯學の講座が設けられ、爾來それにつれて斯學は愈々弘通されてゐた。尤も、一九二二年以前にも、カルクッタに於いて既に大學の講座は設けられてはゐたが……。また精神衞生の運動、靑年期犯罪者の研究、發育の遲れてゐる兒童の精神の取扱や教育などにも應用せられてゐる。バークリ・ヒル及びマイティス兩氏がこれ等の方面に於ける努力は特に刮目すべきものがある。父兄、保護者、教育家たちは診療所の助力を乞ひ、ボーズ博士はカルクッタ大學の心理學研究室を開放してその求めに應じた。精神衞生協會は、それ自身の診療所を設立したいと目論んでゐるが、設立の上は醫科大學の病院にゐる患者たちを引受けることになつてゐる。大學心理學部の助力を待つて、協會は、精神分析學

知識の如何に必要であるかを、廣く一般の親達や教師たちに徹底させた。それに就いてはカルクッタに於ける印度博物館に毎年催される健康展覽會と連絡をとることにしてあるのである。

毎年、印度學術總會の心理學部に於いては、精神分析學的主題の講演がなされる。ラホールに於いては印度精神分析學會員、フォルマン・クリスチャン・カリッヂのバルス・ラム教授が、またパトナに於いては他の會員ランヂン・チャンドラ・ハルダー教授が講演や執筆に依つて、斯學のために非常な功績を擧げた、SCミトラ博士とMNバネルヂ氏とはカルクッタ放送局のラヂオに依つて精神分析學の話を試た。ミトラ博士は「一九三二年の哲學總會」の心理學部の部長就任挨拶に於て、「感情の新說への一つの示唆」と題する講演を試み、その內で感情の精神分析學的見解に基く新研究を公にした。この論文はやがて「印度心理學雜誌」の「ヴント號」誌上に揭げられるであらう。——書記長バネルヂ稿。（獨文國際雜誌より譯出。）

最近國內事實

☆ 本研究所關係者高崎能樹氏は九月二十八日YMCA、幼兒教育研究會にて「永遠の母」の題下に講演。その論旨の大要は朝日新聞家庭欄にて紹介せらる。

☆ 田內長太郎氏は十月十四日、東京帝大講堂に催されたる日本英文學會本年度例會に於いて、『ハクスリのカウンター・ポイント・カウンターに就いて』研究發表。

☆ 『二重人格の文藝』（作品十月號）大槻憲二稿。

☆ 『飲食心理學』（糧友十月號）同氏稿。

☆ 『一切の文學はエディポスに通ず』（反響十月號）同氏稿。

☆ フロイド原著『異常性慾の分析』（アルス）林　譯。

☆ 松居桃多郎作分析歌劇『一角仙人』は、寶塚劇場に十月中上演。

☆ 日本心理學會編輯『心理學論文集』第四輯（岩波）——精神分析關係文獻は、不安の精神分析（早坂長一郎）、赤面恐怖の精神分析學的一考察（山村道雄）、妄想形成の精神分析（木村廉吉）。その他共同題目として「無意識の問題」が取上げられ、小山鞆繪、高橋穰、千葉胤成、丸井淸泰、小宮豐隆、滕本正晃の四氏執筆。なほ、本研究所客員塚原政次氏も「身心の發達に就いて」寄稿。

☆ 本誌前號內容に就いては、奥付上を參照。

通信

臺灣阿里山から

近藤石象

過日は研究所のメムバーに加へて頂き、御厚情深く感謝いた

します。小生は山口縣出身者にて、明治四十一年生れ、十四歳まで臺北に住み、爾後家族と共に東京に出で、研究所の伊東豐夫氏とは同じ東京高校の第一回卒業生（伊東君は多分その後の在學と存じますが、同窓の誼を以て兄の御健闘を蔭乍ら喜び居るものであります。）昭和四年、東北帝大理科物理學教室に入る。昭和七年卒業、二月當地に歸り、阿里山高山觀測所で氣象事務に携り居ります。

高校在學中キリスト教に凝り、卒業間近に母を亡ひ、神經衰弱に陷り、大學在學中もあまり朗かでなく、自分の性格を研究する必要を覺えて、三省堂版の「性格學」なる本を讀みましたが、同窓の一人某が極度の赤面恐怖にて醫科の精神科にて施療中なるものと知り合ひ、初めて日本にも精神分析なるものが存在することを知る。

自分自身の精神現象に興味を持つと共に、當時丁度知人の家に歳頃の娘さんで赤面恐怖症らしき人があり、精神分析を受けたら屹度癒ると思つてゐる内に轉地して了ひました。また昨年も一人、これは五・一五事件の新聞號外をみて急に發狂した患者があり、それが醫者の子供でありながら普遍の氣狂病院に入れられてゐる爲にいつ迄たつても衰弱する一方であるのに、精神分析を勸めて居りますが、自分がまだ他人を納得させるだけの力がないため殘念に思つてゐます。

私は大學在學中フロイドを口にするが故に級友に笑はれましたが、笑ふ徒輩こそ物理學を專攻しつゝ科學の何物であるかを解しない連中と嗤つたのであります。

臺灣に參り、現在のところは蕃界でありますから、何か研究をやりたいと思つてゐますが、組織立てる迄に行きませんが、特に臺灣にゐる者でなければ出來ないやうな研究をやつて幾分なりとも皆樣の御期待に沿ひたいと思つてゐます。首切は生蕃の特徴のやうに考へられてゐますが、勿論これは吾々の祖先にもあつた事でありますが、多少その動機の如きものが違ふ樣に思はれます。蕃人等は暇さへあれば、子供と云はず大人と云はず、蕃刀を以て手當り次第、附近の木などを削つてたいづらをしてゐます。丁度我々が子供の時代に小刀を以て机を削つたやうに……。然もあれ程、恐るべき蕃刀でありながら當局は依然彼等に鐵砲の所持はやかましいに拘らず、蕃刀の携帶を許してゐる事程左樣に彼等に蕃刀はなくてならないものだと云ふ樣なことを考へ合はせると、やがては何故に彼等に首切の習慣が出來たか、又それを止めさせるため理蕃上には如何なる方法を講ずるのが最も確實な捷徑であるかと云ふやうな解決も出る筈だと考へるのであります。蕃人生活の分析學的研究は何かアルバイトが既にありませうか。（記者答曰、まだありません、是非お願ひ致します。）

東京に居りますれば月々の會には必ず出席させて頂きたいのですが、こんな遠方では遙かに會の記事を讀んで皆樣の熱のある御研究、御活動を拜察するのみであります。先生を始め研究所の各位の御健闘を祈ります。草々。十月四日（KO氏宛）

編輯後記

アインシタイン、フロイド兩碩學の戰爭論、並びにそれに刺戟されてのグラヅー氏の論は、何れも間接には日本がその成立の一つの契機となつてゐることは確實であるやうに思はれる。我々國民は落着いてよく彼等の說くところに耳を傾けるだけの大國民的雅量を有せねばならない。少くとも記者は非常に有益の示唆を受けたことを諸碩學に、並びにこれ等の三大論文を苦心譯出せられた伊東、岩倉兩氏に、深く感謝せねばならないと思つてゐる。その意味に於いて本誌本號は一部學界への貢獻であるばかりでなく、また廣く一つの國家的事業でさへもあつたと我等は確信してゐる。

×

巻頭フェレンチー氏の肖像は、フロイドの弔辭を彙報欄に紹介したに合せて掲げたものである。フェレンチー氏はわが古澤平作氏が滯歐中面接した時、「我々は共に東洋人であるから、東洋人として互に協力して斯學のために貢獻をしよう」と云つてゐたさうである。ハンガリー人は歐州よりも東洋に屬する。フェレンチーの寫眞を見て、その風貌の印度的なるに驚いたと共にまたなつかしくも思つた。精神分析學は慥に東洋的學問である。我々はそれを確信する。印度に於ける斯學の隆昌は、彙報欄に紹介しておいた。日本の學界は大きな刺戟を受けるであらう。

×

例に依り執筆者中の新顏を紹介いたします。

諸岡存氏は大正三年九州帝國大學醫學部卒業、大正八年英國に留學、モット卿に師事して精神病理學及び腦生理學を研究。「癡痺痴呆及び其他の精神病者の腦室脈絡叢の顯微鏡的檢査」と題する論文を提出し、大正十一年十月十八日醫學博士の學位を得らる。（なほ詳細は前號「探訪欄」參照。）

田村榮太郎氏は群馬縣高崎商業學校出身。卒業後獨學にて今日に至り、民衆的立場に卽する歷史家として新進の學徒。研究主題は農民史、交通史、傳記など。著述は「明治初年政治的農民一揆」、「日本農民一揆錄」、「一揆、雲助、搏徒」（大畑書店）など。

小野田幸雄氏エスペランティストとして言語學一般に興味を持たれ、精神分析學の言語學への寄與に特別の關心を持つてゐられる篤學の士であります。

奥本島田氏は京都府下綾部町の郵便局に勤務しつゝ精神分析學を熱心に研究してゐられる人であります。本誌は不思議に郵便局關係の方に支援者が多い。

×

岩倉氏の譯せられたグラヅー氏は英國のロンドン精神分析學研究所研究部長で、本誌前號高水氏の紹介にもあつた通り、ロンドン犯罪科學研究所の技師長をも兼ねてゐる。なか〳〵政治的手腕のある學者のやうに思はれる。諸方面によく頭の働く人であることをその論文を見ても我々は感ずる。

「精神分析」合本

豫約募集！

第一卷第一册
（五月創刊號から八月號まで）
一年十二部を三册に分ち
四部を以て一册とす。
總クロース美本
定價三圓
送料十六錢

單册は——携帶に、書入れに、素讀に……

合本は——書齋に、精讀に、保存に……

總目錄は毎卷最終册尾に附けます。

前號內容（社會思想犯罪心理）

犯罪者の心理……長谷川誠也
マルクスとフロイドとを比較して所謂轉向心理に論及す……大槻憲二
理想我と犯罪心と宗教心……矢部八重吉
J・Aシモンヅのひそかなる情熱……江戸川亂歩
時言數題（時評）……大槻憲二
フランスに於ける斯學研究……松田俊武
心理學と政治（リヴズ）……岩倉具榮
或る背德者の分析觀察……則近保良
「棄て鉢」の心理……長崎文治
社會思想犯罪心理文獻多數紹介……高水力太郎
性的象徵に就いて（講座）……田內長太郎
諸岡博士の診療室（探訪）……
內外彙報……
質疑應答……

昭和八年十月二十日印刷
昭和八年十一月一日發行　**第七號**

定價五十錢（郵稅一錢）

東京市本鄉區駒込動坂町三二七
編輯及發行　大槻憲二
東京市牛込區改代町廿四
印刷所　理想社印刷所

定價一部五拾錢（郵稅一錢）
半年分參圓（送料共）
一年分六圓（送料共）

御注文規定

- 本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
- 御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
- 郵券代用の場合は一割增に願ひます。
- 本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館・北隆館

東京市本鄉區駒込動坂町三二七
發行所　**東京精神分析學研究所**
振替口座東京七八八一七番

來月號豫告

第二・夢の研究號

本誌はさきに八月號を「夢の研究」第一特輯號とし、多大の賞讃を讀者諸氏から得ましたことを感謝すると共に、こゝに第二「夢の研究號」を續輯することの必要と勇氣とを感じました。第一特輯號には日本の夢を大部除きまして本號のために保留いたしてありますので、本號には、

民俗に現れたる夢……中山太郎
日本中世の夢判斷……長谷川誠也
題未定……高島平三郎
夢の日本的象徵……矢部八重吉
芝居に於ける夢の表現……松居桃多郎
夢の分析實例抄……高水力太郎

などを始め、夢學の大著に依つて斯學に貢獻するところ大きいT氏や、夢の趣味的研究家S氏などにも執筆が依頼してあります。また翻譯には

フロイド「夢と神靈」……大槻憲二譯
ステーケル「死の夢」……伊東豐夫譯
グリーン「處刑の夢」……岩倉具榮譯
イェンゼン「グラディーヴ」……田內長太郎譯

などがあり、その他霜田靜志氏の「子供の家」の「探訪」、江戸川氏のシモンヅ論、大槻氏の時評、下山氏の「講座」など、愈々精彩を發揮して參ります。

長谷川誠也著　定價二圓七十錢　送料十六錢

文藝と心理分析

本書の四大特色

一、精神分析各派を綜覽的に研究せること、
一、英文學界に於ける斯學影響の研究に詳しきこと、
一、文明批評的見地をとれること、
一、參考資料に精しきこと、

主要目次

一、心理分析の文學
二、文明に對するアムビバレント心理
三、內省と自我
四、リビトオ說と心理タイプ
五、無意識の意義
六、フロイドの無意識說
七、アドラーの優越慾說
八、ユングの集合無意識說
九、夢と象徵
十、白日夢と文藝
十一、心理的タイプと美學說
十二、溯源的研究の危路……（その他）

日本橋區通三丁目八
振替東京一六一七番　春陽堂

精神分析學全集

（第一卷）夢の註釋　定價一圓五十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第二卷）日常生活の精神分析　定價一圓七十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第三卷）社會・宗教・文明　定價一圓八十錢　送料十二錢　長谷川誠也譯　大槻憲二譯

（第四卷）快不快原則を超えて　定價一圓五十錢　送料十二錢　對馬完治譯

（第五卷）性慾論・禁制論　定價一圓七十錢　送料十二錢　矢部八重吉譯

（第六卷）分析藝術論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第七卷）トーテムとタブー　自我とエス　定價一圓八十錢　送料十三錢　矢部八重吉譯　對馬完治譯

（第八卷）分析療法論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第九卷）分析戀愛論　定價一圓八十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第十卷）精神分析總論　定價二圓　送料十二錢　大槻憲二譯

東京市日本橋區通三丁目八番地　春陽堂書店
電話・日本橋・五一番　振替東京一六一七番

藝術殿

坪内逍遙博士會號執筆

十一月號（第三卷第十一號）

要目

藝術殿……日高只一
柿の蔕……坪内逍遙
——シェークスピヤ・アト・ランダム——ドイツに在る沙翁の死面——沙翁廿八歳當時の寫生像——沙翁に對しても日本人は日本人の立場から——エリザ朝の活歴劇——「以尺報尺」——
脚本作家に對する希望……小林一三
新春座と築地の『ハムレット』を評す……永田衡吉
日本語の沙翁劇……佐藤賢
演劇の再演劇化……印南亨
紀海音研究……間民夫
多武峰樣猿樂考……小林靜雄
アト・ランダム……
五十嵐力　金子馬治　坪内逍遙
池田大伍　河竹繁俊　中村吉藏
長谷川誠也　吉江喬松　楠山正雄
本間久雄　山田清作
大村弘毅　伊達豐　日高只一
明治文壇回顧錄……後藤宙外
文學の行方……江間道助
隨筆……窪田空穗
劇場めぐり……佐原包吉
海外文藝ニュース……山口太郎
ロンドン劇信……小畠元雄
文藝時評……逸見廣
演劇時評……西澤揚太郎
坪内博士沙翁劇朗讀會の記……

一部　定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯　財團法人　國劇向上會　東京市淀橋區戸塚一丁目　振替（東京二〇二九〇番）

發行　梓（あづさ）書房　東京市神田區駿河臺町一ノ八　振替（東京七八六四四番）

精神分析學診療所

醫學博士　古澤平作

東京市世田谷區東玉川町三五八七

田園調布驛東口下車

電話田園調布七一八番

診療科目

諸種疾病ノ診斷及治療
性格素質ノ審査及矯正
精神衞生ノ相談及指導

診療ハ特ニ
神經衰弱、ヒポコンデリー、不安性神經症、性障礙、ヒステリー、
强迫觀念症、恐怖症、不眠症、心臟神經症、憂鬱症、偏執病、
輕度早發性癡呆症、性格異常等。

診察時間

午前七時——正午（主トシテ外來）
午後一時——五時（主トシテ往診）
但シ日曜ハ午前中、祭日ハ休業

"Fujii's Therapeutic Instrument for Nervous Disorder."

Invented by Dr. Momotaro Fujii.
Patented in Japan, England, Germany and France.

{good for any kind of illness.
{simple and easy to manipulate.
{giving no pain, leaving no scar.

Health or illness solely depends on one's nervous condition!

The perpetual use of the instrument will make one's nervous state normal, and gradually strengthen the natural power to recover; hence the happiness and rejoice of millions of people since the advent of the instrument, though it is not very long ago.

Price for one set : Yen 38.00
Parcel fee for Japan Proper; Sen 45.
.....Japanese Territories: Sen 75.

Notice : —A booklet of directions for, and explanation of the effect of, the use will be sent gratis, when applied with postage (Sen 4) to——

Jitsugio-no-Nihon-Sha, Sales Dept.,
Nishiginza I chome Kiobashi-ku, Tokio Japan.

神經ガ正調ナラバ疾病ハ無イ

本器ハ全身ノ神經ヲ整ヘ自然治癒力ヲ增シテ疾病ヲ治シ、又健康ヲ增進セシム。

本器ハ發賣日尚ホ淺キニ拘ラズ、各家庭ニ浸潤シテ、幸福ヲ齎シツヽアリ。

藤井物理療法本院長 **藤井百太郎先生發明**

日英米佛獨專賣特許

藤井療器

特徴

萬病一器
効驗確實
使用簡便
無痛無痕

定價三十八圓

送料 內地四十五錢 領土七十五錢

（本器ノ說明書及各方面大家ノ推賞文ハ郵券四錢封入申込次第送ル）

發賣所

東京市京橋區銀座西壹丁目

實業之日本社代理部

振替口座・東京・六四五〇番

矢部八重吉著「精神分析の理論と應用」

定價一・三〇
送料〇・一二

早稲田大學出版部

神經症　精神症　境界症
惡癖矯正　性格改造　等のための

精神分析治療應需

國際精神分析學會日本支部分析寮
（入寮分析受療の便あり）

分析擔任　矢部八重吉

東京市大井元芝町八二五
電話高輪一九五七番

昭和八年七月七日 第三種郵便物認可
昭和八年九月廿五日印刷納本 毎回一回一日發行 精神分析 第七號 定價金五十錢 郵稅一錢

I. Jahrgang, Heft 7, Nov. 1933. Erscheint monatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft fur u. Kriegspsychologie)

Inhalt

Studien

Warum Krieg? (Ein Briefwechsel zwischen A. Einstein u. S. Freud)·····übersetzt von *Toyowo Itô*

Krieg, Sadismus und Pazifismus (E. Glover)·····übersetzt von *Tomohide Iwakra*

Zur Parapsychologie vom Blut, ·····*Bunji Nagasaki*

Kriegsneurose und ihre Therapie, ·····*Rikitaro Takamizu*

Erinnerungen an meine psychoanalytische Forschungen, ·····*Dr. Tamotsu Morooka*

Kritik und Methodik

Rachegeist und Erziehung, ·····*Kenji Ohtski*

Psychoanalyse der "Sehnsucht nach niedlichen Lauben," ·····*Yasra Norichika*

Über Shakespeares "Hamlet," ·····*Momotaro Matsui*

Amnesie am Schlachtfeld, ·····*Seiya Hasegawa*

Verschiedene psychologische Erscheinungen bei soziale Umwälzungen in moderner japanischer Geschichte, ·····*Eitaro Tamra*

Psychoanalytische Gedanken über „X," ·····*Yukiwo Onoda*

R. W. Emerson über den Krieg, ·····*Kenji Ohtski*

Heutige Japanische Denker über den Krieg, ·····*Bunji Nagasaki*

Einführung in die Psychoanalyse

Materielle Symbolik und Funktionelle Symbolik, ···*Chotaro Tauchi*

Sexuelle Symbolik in Volkskunst, ·····*Shimada Okmoto*

Ausfragebesuch der Anstalten

Klinik des Dr. H. Kosawa, ·····

Neuigkeiten des In-und Auslandes

Freuds Kondolenz zum Tode von S. Ferenczi, ·····

Inhalt der "Internationalen Zeitschrift für Psychoanalyse" XIX, 3. ··

Fortschritte der Psychoanalyse in Indien, ·····

Kleine Mitteilungen ·····

Preis des Einzelheftes 50 Sen.

Tokio Psychoanalitischer Verlag,
327, Dozakacho, Hongo-ku, Tokio Japan.